
真・恋姫＋無双-白き旅人-

月千一夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 - 白き旅人 -

【Nコード】

N5977V

【作者名】

月千一夜

【あらすじ】

“天の御遣い”が消えて、三年の月日が流れた。乱世は終わり、人々は過去の傷を癒しつつある・・・そんな中、旅をする者達がいた。

“白き旅人”

新たなる物語の始まりである

—————

本作は、“魏 after”ですが・・・ただの、魏 after
ではありませんww

とても騒がしい、賑やかな物語となっております W W

十 序幕十（前書き）

さて、まずは始まり

この時点で、活躍するキャラが大バレ・・・まあ、いつかWW
それでは、お楽しみくださいWW

十 序幕十

「さよなら・・・寂しがり屋の女の子」

「一刀っ！」

美しい月の下

おとずれた・・・別れ

愛した人との、最愛の人との別れ

彼の言葉に、溢れ出しそうになる“想い”を必死に堪える

そして・・・彼の言葉を、心に刻みつける

「さよなら・・・愛していたよ、華びっ!？」

かずも・・・って啞んだーーーー!!??

「ちよ、まつ、貴方大事なとこで何噛んでるのよ!?!」

「じ、ごめ・・・舌、まじ痛っ・・・」

振り向いた先

痛そうに口元をおさえる“彼”の姿

この場面で、コイツはいったい何をしてるの!?!

って、体がどんどん透けていつてる!?!?

消えるの!?!?

こんなふざけたまま消えるというの、貴方は!?!?!?

「こら一刀!」

そんな中途半端なまま消えるんじゃないわよ!
言い直しなさい!

せめて、ちゃんと言い直しなさい!?!」

「さ、サーセン・・・」

「一刀——————!?!?!?!?!」(怒)

そして・・・申し訳なさそうに謝りながら、彼は消えていった

その場に残されたのは、私一人

だけど、不思議と“悲しみ”はない

変わりに、どうしようもない“怒り”が湧き出してくる

「覚えてなさいよ、馬鹿一刀——————!!!!!!」

その日・・・天の御遣い【北郷一刀】は、天の国へと帰った

私の胸の中、何とも言えない微妙な気持ちを残して・・・

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -
序幕 乱世の後に

――――

“ 天の御遣いは、その役目を終え天の世界へと帰った ”

それは瞬く間に国中に広がり、誰もが深い悲しみをあらわにした
彼を知る者は皆涙し、そして改めて誓った

“ この平和を、絶対に守っていかう ” と

何故ならばそれが、彼の・・・天の御遣いの願いだったのだから

それから三年の月日が流れた・・・

「華琳様、よろしいでしょうか？」

「あら秋蘭、どうかしたのかしら？」

ある晴れた昼下がりに

執務室にて政務に励む少女・・・曹操こと華琳
彼女のもとに、一人の女性がたずねてくる

夏侯淵こと秋蘭である

彼女は一礼し部屋に入ると、持っていた竹筒を広げそこに目を向けた

「三国会議の準備について、まとめたものを持ってまいりました」

「ありがとうございます、そこに置いておいて」

「それと・・・桃香殿、そして蜀の者達が先ほど到着いたしました」

「桃香が？」

随分と早いわね・・・会議まで、まだ五日はあるわよ？」

言いながら、華琳は苦笑する

ここ何年かの付き合いで、お互いのことならばある程度理解できているつもりだ

恐らくは、観光もかねて早く来たのではないか？

そう結論づけ、彼女は軽いため息をついていた

「相変わらずみたいね、あの子は」

「そのようですね」

そう言つて、二人は小さく笑う

それから、執務室の窓・・・その先に広がる青空を見つめた

「あれからもう“三年”もたつのね」

呟き、彼女は机から一枚の紙を取り出した

そこにはとても綺麗とは思えないような字で“華琳へ”と書かれて
いる

秋蘭はその紙を見つめ、ふっと微笑む

「あ奴が天へと帰つて、もう三年・・・しかしまるで、つい最近の
ことのように感じます」

「ふふ、そうね」

天の御遣い、北郷一刀

彼がこの世界から消えて三年

最初はやはり皆、取り乱したり悲しんだりした
しばらくは、仕事など手につかなかつた

しかし・・・それから数日後、彼の部屋からあるものが発見される

それは、彼が愛する者達に残した“手紙”だった

その紙に綴られた、各々に向けられた言葉

楽しかった日々のこと、愛していたということ

そして、最後に書かれた・・・彼のメッセージ

“絶対に、皆のところに帰るから”

この言葉が、彼女たちを再び立ち上がらせたのだ

たった一言

しかも、絶対に帰ってこれるといふ保証などどこにもない
だがしかし、彼女達にはその一言だけで十分だった

“彼は絶対に、約束を破らない”

それは・・・彼女たちが、一番理解していることなのだから

「さて、と・・・桃香のところに挨拶にいきましょうか」

「御意」

そう言つて、華琳は手に持っていた手紙を机の中へとしまった

余談だが・・・

「あのバカ・・・帰ってきたら、どうお仕置きをしてやろうかしら？」

「か、華琳様・・・お願いですから、いきなり首を刎ねるとかは勘弁してやってください」

華琳へと宛てられた、彼からの手紙

その中には、“小さくたっていいじゃない、人間だもの byかずと”と書かれていたとか・・・

――――
――――

ところ変わって、ここは呉国の中心である建業だ
その賑やかな街中、ひとりの美しい女性が歩いていた
桃色の長い髪、褐色した肌に紅き衣服

孫策こと雪蓮である

彼女は三国同盟が成った後、すぐにその王位を妹の孫権こと蓮華へと譲った

故に、彼女はもう王ではない

しかしだからといって、こうして街中をブラブラと歩き回るほどに暇ではないはずなのだ……

「はぁ……なんか、面白いことないかしら」

そんなこと知ってか知らずか……彼女は呑気に街を歩きながら、小さくそう呟いた

その視線をぼんやりと、遙か頭上の青空へと向けながら

「乱世は終わったし、皆に笑顔が戻ってきてる

それは良いことだと思っし、私だって望んでただけど……はぁ」

“贅沢な悩みだ”と、彼女は思ってしまう

望んでいたものが、多くの人々が求めていた願いが叶った
だが彼女には、もう新たな望みが生まれていたのだ
“欲張り”、そう自己嫌悪に陥りながらも彼女はここ数日ずっと考
えていた

どうすれば、この願いは叶うのかと・・・

「おつかしいなあ・・・私の勘、鈍ったのかなあ？」

言いながら、彼女は溜め息をついた
それから、その場で立ち止まる

「一年前・・・あの“白い流れ星”を見た時は、こっぴど何か楽しいこ
とが起きるって
そう思ったんだけどな」

“白き流星”

今から一年前、いつものように街をブラブラしているときのことだ
ある

彼女は見たのだ
昼間にもかかわらず、光り輝く美しき“白き流星”を

その時、彼女は思ったのだ

“何か、始まった”と

その何かが、いったい何なのか
それは、彼女にもわからない

しかし、それでも彼女はよかった

これからきつと、今までにないくらいに“楽しい”ことが起る
そんな予感がしたのだ

しかし、それから一年

未だに、彼女が望むことは起きてはいなかった

それでも・・・

「ううん、まだよ

まだ、待ってみましょう」

彼女は、待っている

これから、きつと今までにないくらいに楽しい出来事がやってくる
に違いない

何故ならば・・・

「あんなに綺麗で優しい流星だったんだもんだからきつと……この気持ちに、間違いなんてないわ」

そう言って、彼女は再び歩き出す

その足取りは、先ほどよりは軽い

風が吹き抜ける

揺れる、桃色の美しい髪

その優しい風が、彼女の背中を押していった……

—————

「何をしてるのだろうか、私は……」

そう言いながら、一人の女性が街を歩いている

銀色の短い髪に、背中に大きな戦斧を背負った彼女は・・・空を見上げながら、深くため息を吐き出した

「仕えるべき主を失い、この身に持つ武は乱世の終わりにより必要のないものになってしまった」

眩き、彼女はまた溜め息をつく
そして、その場で足を止めた

「私は・・・何のために、こうして生きているのだ？」

空を見上げたまま、彼女は手を伸ばす
その手には、何も掴まれてはいない

彼女の望む“答え”は・・・未だ見つからないままだったのだ

それでも、彼女は歩き続ける
フラフラと、頼りない足取りのまま・・・何処までも
ただひたすら・・・

「教えてくれ・・・“白き流星”よ」

一年前に見た、白き流星

その輝きの中に、もしかしたら自分の求める答えがあるんじゃないかと

そう言い聞かせながら・・・

彼女は、歩き続けていた

彼女の名は【華雄】

時代に忘れ去られた、哀しき女性

そんな彼女が再び笑えるようになるのは・・・もう少し、先の話である

――――十――――

「すみません・・・お力になれなくて」

「ええつて、そんな気にせんでも」

とある村の入口

そこに二人の男女がたっている

一人は年老いた、白髪の老人

もう一人は、紫色の髪をした胸元にサラシを巻いた女性だ

彼女の名は張遼・・・真名を霞

魏の將軍にして、“神速”として知られる名將である

そんな彼女は今、“とある理由”で一人国中を旅していた

「しっかし、ここにもなんも手がかりはなかったなあ・・・何処におるんや、一刀」

それは、“北郷一刀”を探すためである

今から一年前・・・彼女は見たのだ

昼間にもかかわらず、光り輝く美しき白き流星を

それを見た瞬間、彼女は核心した

“ 帰ってきたのだ ” と

そしてすぐさま、それを華琳や他の仲間達に知らせようとして・・・
・・・思い止まった
ここにきて彼女は、自身の中にあつた “ 女としての自分 ” を強く意識してしまつたのだ

彼に・・・北郷一刀に、一番最初に会いたい

だから彼女は、唯ひとりで城を飛び出していった
“ 自分探しの旅に行つてきます ” と、そう書置きを残して・・・

それから一年
未だに彼女は、その目的の彼を見つけるには至っていない

だが、あれが気のせいだとは思わなかつた
ましてや、見間違えなどとは微塵も思っていない

彼は絶対に、この世界に帰ってきている

彼女は、そう確信していた

「 それじゃ、あんがとなおじちゃん 」

「はい、張遼様もお気をつけて」

だからこそ、彼女は歩き続ける

その歩みは乱世の頃に比べれば、遙かにゆつくりで神速と言われた自分からしたら、驚くほどに遅くて

それでも、彼女は今の自分が嫌いじゃなかった

「さあて・・・次は、何処にいこか」

この歩みの先

この長い道の先

そこに・・・彼がいる

自分が愛した、あの太陽のように温かな笑顔がある

そう思えば、この歩みも決して無駄ではなく

また、嫌だとも思わなかった

「一刀、待つとれや

もうすぐ、ウチが迎えに行くから」

伸ばした手・・・視界いつぱいに広がる太陽の光
彼女の足取りは、今日も軽い

――――

「あわわ・・・」

深い森の中、一人の少女が半べそをかきながら立ち尽くしていた
長い先の尖った帽子を被った、背の低い少女である

鳳統・・・真名を離里である

彼女は大きめのバッグを背負ったまま、森の中に一人で立っていた

彼女は、“ある理由”で旅をしている途中だった

その途上でこの森に入ったのだが、結果的に今の状況に至ってしまう
・・・要するに迷子である

「あわわ・・・ど、どうしよう〜」

“あわわ”と慌てふためきながら、彼女は必死に考える
この状況を一転させる為の一手を

しかし、一向に良い考えは浮かんでこない

「じ、このままだと・・・」

“どうなるんだろう?!”

そこまで考えて、彼女の表情が一気に青くなる

まずは、単純に飢えによる“死”が浮かんだ

このままこの森から出れなくなり、ここで死んでしまうのだと

次に、“賊”という言葉が浮かんだ

乱世が終わった今でも、各地にはまだ賊は残っている

実はこの森はそんな彼らの縄張りで、そして彼らに見つかって自分
は・・・

「あ、ああ・・・」

体が、ガクガクと震える

彼女は、無理やりに思考を変えようと首を思い切り振った

しかし、一度思い浮かんだことは中々消えてくれない

“ 怖い ”

彼女の精神は、もう限界だった

唯でさえ、慣れない一人旅だったのだ

今までは安全な道を行っていたが、今は違う

此処には、自分しかしないのだから・・・

「嫌だ・・・だって私はまだ、見つけてない」

くあの・・・優しく輝く、“白き流星”をく

「ねえ・・・その、可愛い御嬢さん」

「っ!!!?!?」

反射的に、彼女は後ずさった

そして、護身用にと持っていた短剣へと触れる

それが気休めでしかないことは彼女にもわかっていた

彼女には、これっぽっちも武の心得などはないのだから
それでも、そうせずにはいられなかった

「っ・・・驚かせてしまったかな」

そんな彼女の心配もよそに、聞こえてきた声は随分と落ち着いていた
ガサリと、草木が揺れる音が聞こえる

彼女の視線の先、ゆっくりと人影が近づいてくる

彼女はずっと睨み付けるように見つめたまま、その場に立ち尽くす

そして・・・言葉を失ってしまった

「やあ・・・どうも、こんにちわ」

そう言って現れたのは、白いフード付きの外衣を羽織った人物
顔はフードですっぽりと隠れてしまっているが、声を聞く限りは男
なのだろうと雛里は思った

その右手には長い、まるで魔法使いが使うような杖が握られていた

一言でいえば“怪しい”

これに尽きるだろう

しかし、雛里には不思議とそうは思えなかった

森の中

木々の僅かな隙間から入った、太陽の光

その光に照らされた、その姿が・・・唯々美しくて

雛里は、無意識のうちに息を呑んでいた

「あ、貴方は・・・？」

ゆっくりと、震えてしまいそうになるのをおさえて尋ねる

その言葉に、彼の口元が僅かに上がった

「俺？

そうだね、俺は・・・」

サアと、風が吹き抜けていった

雛里と男の間を、そっと・・・撫でるように

そんな中、雛里は感じていた

“新しい物語”

その始まりを・・・

「俺の名前は“司馬懿”、字は“ミラ・ジヨヴォヴィッチ”だ
気軽に、字の“ミラ・ジヨヴォヴィッチ”で呼んでくれ」

「み、みみみじゃじよぶおびつちえしゃんでしゆか？」

「き、君さ、そんな噛んでよく舌を噛み切らないね・・・いや、可愛いからいいけど」

これは、“白き流星”

その光りに魅せられ、そしてその光りを追い求めた乙女と
白き旅人の織り成す

小さな、小さな冒険の物語

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -

開十幕

十 序幕十（後書き）

いかがだったでしょうか？

本作は、一話が基本的に長いので更新速度には期待しないでください
いww

それでは、またお会いしましょうww

第一章 あわわとミリア・ジヨヴォヴィッチと修造と〜もっとだ！もっと熱くな

ども、さっそく一話です

まずはある少女との出会いから

それでは、お楽しみくださいw

第一章 あわわとミラ・ジヨヴォヴィッチと修造とくもつとだ！もつと熱くな

ずっと、二人は一緒だった

私と朱里ちゃんは、ずっと・・・一緒だった

でも、いつからだろう

私の居場所が、無くなってきた・・・そう感じたのは

乱世は終わった

ここからは、内政に力を入れていかなくちやいけない

そんな中、朱里ちゃんは・・・私なんかよりも、ずっと皆の役に立っていた

皆が、朱里ちゃんのことを見ていた

皆が、朱里ちゃんのことを頼っていた

ああ、ここには・・・私は必要ない

そんな時だった

私が、あの白い流れ星を見つけたのは・・・

お昼なのに、美しく光り輝くその白い流星に

私は、目を奪われてしまった

そして、一枚の書置きを残し・・・国を飛び出した

それから一年、色々なところを旅しましたが
でも、中々見つかりません

そんなある日、私は出会ったんです

白く輝く、不思議な男の人と・・・

『俺の名前は【司馬懿】、字は【ミラ・ジヨヴオヴィツチ】だ
気軽に、字の“ミラ・ジヨヴオヴィツチ”で呼んでくれ』

『み、みみみじゃじょおびつちえしゃんでしゅか？』

『き、君さ、そんな噛んでよく舌を噛み切らないね・・・いや、可
愛いからいいけど』

真・恋姫十無双・白き旅人・

第一章 あわわとミラ・ジヨヴオヴィッチと修造と〜もっただ!も
っど熱くなれよ!〜がんばれよ!君ならd(ry)

――――

「み、みじゃじゃぼぶつちえしゃん!」

「違う!

“ミラ・ジヨヴオヴィッチ”だ!

さあ、もう一回!」

「み、ミジャゴボヴィっチエシャン!」

「惜しい!

さあ、もう一回だ!」

「あ、あわわ・・・も、もう無理れしゅ」

「なっ・・・諦めんなよ！」

熱くなれ！もつと熱くなれよ！！

やれるって、絶対やれる！

君ならできる、だから頑張れよ！！」

「あ、あわわ、私頑張ります！！」

「そっだ、その意気だ！」

さあ、ばっちり決めてくれ！！」

「はい！！」

ミラ・ジヨヴオぴっ！！！！??」

「鳳統ちゃー！！！！ん！！！！??」

現在、とある森の中

何故か、某松岡修造並みにやたらと熱くなっている二人組がいた

一人は先の尖った長い帽子を被った少女

鳳統・・・雛里である

もう一人は白い外衣を纏い、顔はフードですっぽりと隠した男
司馬懿、字は“ミラ・ジヨヴオヴィッチ”である

森の中での、偶然の出会い

二人はあれからひとまずお互いに自己紹介をした
それから、彼のある一言によってこのような状況になったのだ

『ところでさ、人の名前を噛んだりするのってさ……物凄く失礼
じゃないかな?』

『あ、あわわ!?!』

『もももも、申し訳ありません!?!』

『いや、俺は別にいいんだけどね
ただこの先、“ステイブ・セガール”さんや“アーノルド・シ
ユワルツネツガー”さんといった名前の人と出会ったとき……君
は、ちゃんと噛まずに言えるのだろうか?』

『……む、無理そうだしゆ』

『しかも、すでに噛んでいらっしやる』

『あ、あわわっ!』

『仕方ない……可愛い女の子の為だ
ここは、この司馬懿に任せてくれないかな?』

『……え?』

・・・というわけで始まったのが、冒頭にあったことである
とりあえず、まずは自分の字からという司馬懿の提案のもと雛里は
何度も練習していたのだ

結果は、まあ先ほどの通り・・・

「大丈夫、鳳統ちゃん？」

「い、いひゃいれす」

鳳統の惨敗、すなわち修造の惨敗だった（？）

某松岡修造の力をもってしても、彼女は彼の字を噛まずに言うこと
が出来なかった

“仕方ない”と、司馬懿は苦笑する

「まあ、人には得手不得手があるからね

とりあえずは、呼びやすいように略してもらって構わないよ

もう、日が落ちてきているし・・・そろそろ、ここを出ないとマズ
イからね」

「も、申し訳ありません」

「いって、気にしないで」

そう言つて、司馬懿は笑う

そんな彼の言葉に、鳳統は微かに頬を赤くしながら頷いた

「そ、それでは“ビッチ”さん・・・」

「ごめん、俺にその発想はなかった！！

その略し方だけはだめだ！！」

「？」

可愛らしく小首を傾げる雛里に一瞬キョンとなる司馬懿だが、自分は“ペドという名の紳士”だと言い聞かせ何とか堪える
それから、額に手を当て溜め息をついた

「うん、これは俺が悪いよな

ごめん鳳統ちゃん、実は俺の字は“ミラ・ジョヴォヴィッチ”じゃないんだ」

「・・・へ？」

男の突然の告白

雛里はキョトンとしてしまう
そんな様子に、司馬懿は苦笑しながらペコリと軽く頭を下げる

「俺の名前は司馬懿

字は“仲達”・・・だったはず！」

「“はず”!？」

“はず”ってなんですか!？」

男の言葉に、今度は盛大にツッコんでしまう雛里

司馬懿はそのツッコミに満足気に頷いた後、軽く笑いをこぼしながら頭を掻いていた

「いやあ、名前まではハッキリと憶えてるんだけど字は曖昧でさ
確か、司馬懿の字は仲達で合ってるはずんだけど・・・どうかな
?」

「“どうかな?”ってなんでしゅか!？」

私知ってるわけないじゃないでしゅか!？」

「もちつけ鳳統ちゃん

また凄まじく噛んでるから」

“どー、どー”と、鳳統の言葉を軽くいなす司馬懿
そんな中、雛里はある疑問が頭に浮かんできた

それは・・・

「あの、もしかしてその司馬懿という御名前も・・・」

「うん、偽名」

ズルツと、盛大にズツコケる雛里

その見事なコケツぷりに、司馬懿は感銘の声をもらしていた
森の中での不思議な邂逅から、はや数時間

日は・・・もうすぐ、完全に沈もうとしている

—————

「落ち着いた？」

「は、はい・・・」

もうすぐ、日が落ちようという頃
相変わらず、二人は向かい合い立っていた

ただ先ほどに比べ、雛里の顔には疲れが目立っているようだったが、

・
・

「さて、と……そろそろ、日が落ちてしまっな」

「あわわ、そうでした！

早くここを出ないと、今夜はここで野宿になってしまいます!!」

雛里の言葉に頷く司馬懿

彼はそれから、持っていた杖を肩に担ぎ息を吐き出した

「しっかし、こんな所で人に会うなんて……今日はついてるな」

「あわわ、そんな……私のほうこそついてますよ」

言って、二人は笑いあう

それからお互いに安心したように溜め息をついていた

「俺さ、実は道に迷ってて……」

「私、実は迷子になってしまいました……」

――間――

(って、二人とも迷子かよー……)

(って、このお方も迷子だった……)

もう薄暗い森の中

二人はまったく同じことを考えながら、同じように頭を抱えていた

状況は変わらず

まあ一人よりは二人の方がいいのだろうが……それでも、ここから出られないという事実は変わらない

そんな中“仕方ない”と、司馬懿が顔をあげる

「とりあえずさ、一人よりは二人っていうし

まだ少し日があるうちに、歩いて行ってみない？」

「あ、あわわ……いいんですか？」

「いいんですかって、何が？」

「その、ご一緒に行動しても・・・」

「ああ、それなら大歓迎さ

ここ最近ずっと一人だったから、すごい寂しかったしそれに、君みたいな可愛い子と一緒に歩けるんなら・・・迷子だつて、楽しいものになるしね」

そう言つて、彼は笑つた

その瞬間、僅かに吹いた風

サラリと揺れる髪・・・見えた瞳

優しい光りを宿す、彼の瞳

雛里はその瞳に一瞬見とれてしまう

だがすぐに我にかえり、彼女は慌てて頷いていた

「あわわっ！

こ、こちらこしょよろしくお願いしましゅー！」

「うん、よろしくね」

フツと微笑み、彼はゆっくりと歩き出す

その後ろを、ちょこちょここと雛里はついていく

もうすぐ真っ暗になってしまふ森の中

夜の森は危険だ

だがしかし、二人の足取りは随分と軽いものだった・・・

――――

「そういえば・・・どうして、司馬懿さんは偽名なんて使ってるのですか？」

ふいに、歩きながら雛里は尋ねる

それに対し、司馬懿はポリポリと頬を掻いていた

「うん、まあその・・・幾つか、理由があるんだけどさ」

ピタリと、そこで彼の足が止まる

何事かと、隣を歩いていた雛里も同様に足を止めた

そして見た

司馬懿の体が、微かに震えているのを・・・

「司馬懿、さん……?」

「ん、ああごめん……ちょっと、思い出しちゃってさ」

力なく笑い、彼は言う

そんな彼の様子に、雛里は申し訳なさそうに頭を下げた

「ごめんなさい、変なこと聞いてしまって!」

「ああ、気にしないで

そんな大した、理由じゃないんだよ」

“それに……”と、彼は持っていた杖を見つめる
それから、ニツと口元を釣り上げた

「この名前に相応しくなったら、俺は……“彼女”と肩を並べられるかもしれないね

そしたら、たぶん許してもらえる……だから、大丈夫なんだ」

そう言つて、彼は笑う

それから、彼は空を見上げた

見上げた空・・・日はもう完全に落ちていた

幸いなことに、夜空に浮かんだ月灯りのおかげかそこまで暗くはな
かったのだが

それでも、今日はここら辺が限界だろうと司馬懿は溜め息をつく

「今日はもう諦めたほうがよさそうだね」

「はい、仕方ないですよね」

雛里も、彼の言葉に頷く

それから、辺りをキョロキョロと見回した

「あそこの木の傍なら、ちょうどいいかもしれません」

言いながら、雛里は指を差す

その先には、他の木よりも少し大きな木があった

その下で、一夜を過ごそうということか

彼はそう思い、その木の傍まで行くこうとして・・・ピタリと、足を
止めた

「司馬懿さん？」

どうかしたのですか・・・？」

雛里の言葉・・・司馬懿は、それに対し苦笑する
それから、彼女の前に庇うように立った

「残念だけど、お客さんみたいだ・・・」

「お客さん？」

雛里はその言葉の意味がわからず首を傾げる
だがすぐに、その意味を理解することになる

ガサリという音

その音が聴こえてすぐに、先ほど自分が指を差した方向から何人か
の男が現れたのだ

雛里は、自分が彼に会う前に考えていたことを思い出す

“ 賊 ”

「へへ・・・兄ちゃんよお、随分と可愛い嬢ちゃんを連れてるじゃ
ねえか」

そんな中、ひとりの男が話し出す

風貌や周りの男の反応からして、この男が賊の親玉なのだろう
手に持たれている剣も、若干だが立派なものだった

雛里は恐る恐る周りを観察する

賊の人数は十人

十人は親玉である男を中心に、自分たちを囲むように近づいてくる

この状況から逃げられるか？

答えは、恐らく否

司馬懿だけならばわからないが、自分は走ることに自信はない
しかも相手はたぶん、この森のことを知り尽くしている

「あ、ああ・・・」

“ 絶体絶命 ”

そんな言葉が浮かぶ

雛里の体は、大きく震えていた
しかし・・・

「大丈夫だよ」

“ 彼 ” は、違った・・・

「え……?」

啞然とする雛里

そんな彼女をよそに、彼はスツと前に出る
それから、持っていた杖を彼らに向けた

「貴方たちは、山賊さんか何かですか？」

「は？」

その質問に、賊の親玉は思わずそんな声をあげてしまう
それからすぐに、呆れたように自身を指さした

「いや、どこからどうみても賊だろうが!？」

「いや……ただのいい歳したオッサンにしか見えないんだけど」

「オッサン!!?」

司馬懿の言葉に、親玉が驚きのあまりまた声をあげた
そして、同時に思う

“何なんだコイツは？”と
そんなことつゆ知らず、彼は話を続ける

「ていうかさ、なんで賊なんてしてんの？」

「いや、なんでって・・・」

この質問に、今度は他の賊が呆れたように反応する
司馬懿はその反応を見て、深いため息を吐き出していた

「いやさ・・・乱世は終わったんだよ？」

なのにアンタらは、こんなところで何やってんだよって話しさ
何なの？

“働いたら負け”とでも思ってたんの？

「んなつ！？」

「あわわ！？」

グサリと、賊たちの心に何かが刺さった
そして雛里は、司馬懿のあまりの発言に“あわわ”言っていた

それでも尚、彼は止まらない

「お、俺らだって最初は頑張ったさ！」

「最初だけ？」

それ、頑張ったって言えんの？

始めだけ頑張るのだったら、子供だってできるよ？」

「じゅあっ!!?」

容赦のない一言に、また一人賊が怯む

そんな中、雛里は思った

“あれ？ 絶体絶命？”と

「いい歳して、仕事ないからってやさぐれて・・・アンタらは恥ずかしくないのか？」

「て、てめえ!!」

こっちが下手に出りゃ、調子に乗りやがって!!」

チャキツと、一斉に賊たちが武器を構える

しかし・・・司馬懿は、気にしていない

先ほどから変わらない態度で、賊たちに向かい杖を向けている

そのまま・・・賊たちをあざ笑うかのように、冷たい笑みを浮かべた

「それ以上近づいたら、この杖が火を噴くよ？」

「なっ・・・なめんじゃねえええええ!!!!」

その言葉が合図となった

賊の親玉が、顔を真っ赤にしながら司馬懿に突っ込んでいく
剣を大きく振り上げながら、彼めがけ駆けていく親玉

だが。司馬懿は動かない

このままでは、彼は殺される

しかし雛里は、何故か恐くはなかった

聞こえたのだ

賊が駆け出した瞬間、確かに聞いたのだ

彼が……司馬懿が言った言葉を……

“なら……仕方ないな”

「あ……」

それは……本当に、一瞬の出来事だった

剣を振り上げたまま、走っていた親玉が

それを見ていた賊たちが

そして、離里が

全員の視線が集まる

彼の……司馬懿の持つ杖に、その先端に灯る“赤”

そして、凄まじい勢いで噴き出る“炎”

それは真っ直ぐに、賊の親玉に向かい噴出していく

「おっおっおっおっ!!!??」

バツと、反射的にしゃがむ親玉

直後、頭上を通り越していく炎

チリツと、髪の毛が僅かに焦げたが……そのような些細なことは気にしていられなかった

全員の視線が、今度は司馬懿本人に向けられる

彼はその視線に気づき、ニツとまるで悪戯に成功した時の子供のように笑った

雛里に至っては、壊れたように“あわわ”と慌てふためいている

そんな周囲の反応に、彼は満足げに頷いていた

「ふっふっふ・・・これぞ司馬懿印の発明品“ぼくのかんがえたかっこいい武器シリーズ?54”、先端から炎が出る危ない杖！その名も“ひのきの棒”だっ！！！」

「あわわ、名前はしょぼいですっ！！！」

雛里のツッコミもよそに、彼は上機嫌に笑いつづける

その姿を見れば、どっちが悪者かわかったものではない

そんな中、賊の一人が恐る恐るといった様子で司馬懿を指さした

「まさか、てめえ・・・五胡んとこの妖術使いか!？」

「妖術使い？」

そんなまさかつww」

司馬懿は男の言葉に爆笑

しかし、他の者は皆彼を警戒していた

そもそも、彼は服装からして怪しいのだ

顔だつて隠しているし、さらに炎がでる杖まで持っている

むしろ、“僕、怪しくないですよ”なんて言っても冗談にしか聞こ

えない

「これは妖術じゃなくて、ちゃんとした技術だって」

「し、信じられるかつ！」

この言葉に、頷く男たち

それを見て、“うん”と唸る司馬懿

彼はしばらく考えた後に、深い・・・本当に深い溜息をついた

「ま、仕方ないよな・・・このまま妖術使いなんて思われるのも嫌だし」

「・・・え？」

聞こえた声

雛里は、彼のことを見た

瞬間・・・見えたのは“白”

「あ・・・」

バサリと、何かが自分の前を通り過ぎて行った
それが彼が先ほどまで着ていた外衣だと気付いたのは、それからす
ぐのこと

その向こう・・・彼女には、光が見えた

彼女だけではない

賊たちも同じように、光を見ていた

月灯りをつけ、キラキラと美しく輝く・・・“白き光”を

「あ、貴方は・・・いつたい・・・」

声が震える

だがしかし、聞かなくては

雛里は震える声のまま、必死に目の前の光に向け声を出す

その問いかけに、光りは・・・“彼”は、優しく微笑んだ

そして杖を肩に担ぎ、静かに口をひらいた

「俺の名前は“北郷一刀”」

まあ人によっては俺のことを……【天の御遣い】と呼ぶ人もいるけどね」

—————

「天の御遣い……だと？」

親玉は、ゆっくりと呟いた

噂には聞いたことがあった

乱世を終わらせるべく、この国に舞い降りたということ
三年前に、その役目を終え天へと帰ったということ

だがしかし、実物を見たことはない

あくまで噂のみの存在

それが親玉をはじめ、男たちの認識だった

ならば……目の前の男はどうだ？

実際に見たことはない

実際にいたかどうかも、自分たちにはわからない

だがしかし・・・“本物”だと、そう確信していた

この目の前の白き光は、紛れもなく本物である
男たちは、そう思っていた

だからだろう・・・自分たちが、こうして膝をついているのは
男たちは自然と、自分たちでも気づかないうちに跪いていたのだ
そして、頭を下げていた

「御遣い様・・・」

その様子を、雛里はじっと見つめていた

先ほどまでの態度が嘘のように、静かに頭を下げる賊たち

そして・・・そんな彼らを、優しげな瞳で見つめる男

天の御遣い、北郷一刀

彼はしばらく彼らを見つめた後に、すっと親玉に向かって歩み寄っ
ていった

「親分さんはさ、けっこう力がありそうだね」

「へ、へえ！」

力になら、少しは自信がありますっ！！」

「なら・・・そうだな、土木関係の仕事を探すといいよ」

「へ、へ？」

御遣いの言葉

わけがわからないといったふうに、男は声をあげる
そんな彼の肩をポンと叩き、御遣いは優しげに笑った

「さつきも言つたる？」

乱世は終わったんだ・・・けどさ、やることなんてまだまだ山のようにあるんだから

今までの戦によって壊れてしまった街の復興や、新しい土地の開拓
君の力が必要とされる場所は、それこそ沢山あるんだ」

「俺の力が・・・必要？」

“ああ”と、一刀は笑った

それから男の手をとり、スツと立ち上がらせる

「今からでも間に合うさ

君の・・・君たちの力を、この国の今の為に

そしてこれから先の未来の為に、貸してくれないかな？」

その一言で、“充分”だった

「う、あああ・・・」

賊の男たちは皆、その一言で涙を流していたのだ

一刀が手を取った親玉もまた、盛大に涙を流していた

誰かに、自分を必要とされる

彼らには・・・それが、堪らなく嬉しかった

「さて、と・・・鳳統ちゃん」

「ひゃ、ひゃいつ!」

いきなり話を振られ慌てる雛里の様子に苦笑しながら、彼は懐から一枚の紙を取り出した
そしてそれを、雛里へと差し出す

「こつからなら、蜀が一番近いし
劉備さんのところも、結構人手が必要なんだよね?
だったらさ・・・一つ、お願いしてもいいかな?」

「あ、はい!

わかりました!」

そこまでで、彼女は彼が言いたいことを理解する
すぐさま彼から紙を受け取ると、背負っていたバッグから墨と筆を
取り出す

そしてその紙に、黙々と何かを書き始めた

やがて書き終わったのか、その紙を丁寧に畳むと一刀へと差し込
彼はそれを受け取ると、賊の親玉に渡した

「ここにいる鳳統ちゃんは、蜀では軍師をやっててね
ある程度なら、融通がきくんだ

というわけで、それ・・・君たちの紹介状
それをもって成都まで行けば、仕事が貰えるはずだから
そっから先は、君たちの頑張り次第だよ？」

「あ、ありがとうございます!!!!!!」

「どづいたしまして」

バツと、勢いよく頭を下げる男たち
その様子に、苦笑する彼

雛里は・・・そんな彼の姿から、目が離せなくなっていた

月明かりの下

出会った・・・この、白き光から

「天の御遣い、さま・・・」

—————

「おゝ、やっと出れた~~~~」

その翌日

森の出口に、二人の男女の姿があった

鳳統こと雛里と、司馬懿こと北郷一刀である

彼はすでに昨日と同様、フードを被り“司馬懿”となっていた

さて、昨夜はあれからどうなったのか

ひとまず、賊の親玉だった男・・・“周倉”の案内によって、出口付近まで歩いた一刀たち

それから、そこで一晩過ごしたのだ

そして今日の朝、こうして出口までたどり着くに至った

なお周倉たちは、つい先ほど成都に向かうべく別れた

彼らは一刀にお礼を言い、いつか必ず恩を返すと涙を流しながら歩

いて行った

「さつてと、次は何処に行こうかな」

言いながら、彼は思い切り背中を伸ばす

見上げた空・・・今日は快晴

“絶好の旅日和だ”と、彼は嬉しそうにつぶやく

そんな彼の様子を見つめながら、雛里はゆっくりと口をひらく

「あ、あの・・・魏に、華琳さんのところには帰らないんですか？」

「っ・・・」

ピタリと、彼の動きが止まった

次いで、プルプルと震える体

明らかに、様子がおかしい

「あ、あの・・・御遣い様？」

「・・・だ」

「はい？」

微かに聞こえた呟き
それを聞き、彼女は首を傾げた

「深夜のテンションだったんだ・・・仕方なかったんだよ！」

「へ、あっあわわ!？」

そんな彼女の肩を、ガツと掴む彼
何故か顔を真っ青にしたまま、僅かに瞳をウルウルとさせながら
彼は必死に声をあげていた

「あ、あの、一体どうしたんですか!？」

「ご、ごめん・・・ちょっと取り乱しちゃって」

“ふう”と、彼は息を吐き出した
それから、ゆっくりと話し始める
彼が・・・何故、彼女たちのもとに帰らないのかを

「俺さ・・・この世界から消える前に、皆に宛てて手紙を書いたん

だ

「はい」

この話は、実は雛里も聞いたことがあった

彼女と仲の良い魏の軍師、程？こと風

彼女から、何度かその話を聞いたことがあったからだ

その話をする時の風の表情を、雛里は今でもしっかりと憶えている
故に、その手紙がどれほど大切なものだったのか理解できていた

「その手紙を書いていたのが、もう深夜でさ

眠気と戦いながら、必死に皆に対しての想いを書いてたんだ」

「は、はい」

「でさ、眠い時って偶に変にテンション・・・まあ、気分が盛り上がる時ってない？」

「・・・え？」

ガクリと、彼女の肩が落ちる

そんなこと知らずに、彼は話し続けた

「その時が、まさにそれでさ・・・しかも、よりもよって華琳に宛てた手紙の時にね

その時は“ま、後で直せばいつかWW”みたいな感じだったんだ

けど、結局……」

「そのまま消えてしまった、と？」

“ああ”と、彼は顔を真っ青にしたまま頷く

その頼りない姿に、彼女は思わず額をおさえたため息をついてしまった

「それで、その手紙にはなんと？」

「それは……」

呟き、懐から取り出したメモ帳にボールペンをはしらせる
やがて書き終えたのか、それを雛里へと手渡した

「この紙を見てくれ……コイツをどう思う？」

小さくたっついていいじゃない、人間だもの byかずと

「すごく・・・“斬首”です」

「だよ、ちくしょー！ー！ー！ー！」

雛里の言葉

彼は頭をおさえたまま叫んだ

言葉のとおりである

これを見た華琳の反応・・・彼らが想像する限り、まず間違いない

ニヤリと笑みを浮かべた後に、確実に首を落とそうとするだろう

「で、でも御遣い様は華琳さんにとってとても大切な御方ですしそれに三年もたってるんです・・・もしかしたら、もう許してくれるかもしれません」

「甘い、甘すぎるよ鳳統ちゃん！」

「あ、甘いでしゅか!？」

「ああ、甘いよ・・・実は俺、一年前にこっちに帰ってきたんだけどさ

その時に聞いたんだよ・・・」

『本当にいいのねん、御主人様
もうこっちの世界に帰ってこれなくっても』

『ああ、いいさ』

約束したから・・・絶対に、みんなのところに戻るってね』

『どうふふ』

流石は御主人様ねん

わかったわん・・・この貂蟬にお任せよん』

『ああ、ありがとう・・・ん？』

（あれ？

何か大切なことを忘れてるような・・・）

小さくたっついていいじゃない、人間だもの byかずと

「・・・って、ね」

「は、はあ」

彼曰く、送られたのは魏国内

彼はそこから脱兎の如く逃げ出して、こうして様々な場所を逃げまわ・・・旅してまわっているのだ

余談だが、この後すぐにそこに霞が駆けつけるがその時にはもう彼はその場にはいなかった

司馬懿と名乗ったのは、自分の知る三国志で曹操に並ぶ人物として浮かんだのが司馬懿だったからだ

幸いにも、司馬懿はこの世界にはいない

だったら、自分ならう

もしかしたら、こう名前的な補正でちょっとは気がまぎれるかもしれない・・・そう考えたのだ

勿論、そんなことはなかったのだが

そうこうしているうちに、一年の月日が流れ今に至る

「そのままズルズルと、現在に至るわけですよ」

“はあ”と、彼は軽く息を吐き出した

その様子に、雛里は苦笑することしかできない

「まあ、でも斬首つてうのは最悪の場合です」

「なら、良くて？」

「う・・・打ち首でしょうか？」

「同じじゃないか」

結局、首と胴体がアルマゲドンしてるじゃないか」

“だけど・・・”と、彼は空を仰ぎみる

気持のよい青空を見上げたまま、彼は力なく笑みを浮かべていた

「俺も・・・みんなに早く会いたい

だからこのままじゃ駄目なんだってわかってる

けど、中々覚悟が決まらなくてね」

「御遣い様・・・」

三年だ

その間、ずっと想っていた
想い続けていた

だからこそ、彼は自分の世界を捨ててまで……この世界に帰って
きたのだ

そんな彼が、愛する彼女たちに会いたくないわけがない
ただその為には越えなくてはいけない壁（華琳）があつて

その壁（華琳）が余りにも高すぎて……中々、覚悟が決まらない

雛里はその気持がわかっていた
故に、考える

彼が、どうしたら彼女たちのもとに帰れるのかを

「あ……」

そして……思いついた

「……来てもらえばいいんです」

「え？」

「ですから……こっちから会いにいけないなら、向こうから来て

もらえばいいんです!!」

大きな声で、雛里は話始める
自身が思いついた考えを・・・

「たとえば、消えたとされる“天の御遣い”
それが何処かの街で目撃されたら華琳さん達が聞けば・・・」

「つ・・・間違いなく、誰かに確認させる」

「はい！」

しかも華琳さんは王ですから、そう簡単には国から動けません
そうすると、必然的に動くのは華琳さん以外の誰かとなります!!」

言って、彼女は彼の瞳を見つめる

彼はその彼女の考えに、しばらく啞然とした表情をした後に・・・

「す、すごいよ鳳統ちゃんっ!!
さっすが名軍師だっ!!!!!!」

「あ、あわわ!!!??」

思い切り、彼女に抱き着いた

それこそ、満面の笑みを浮かべたまままでだ
そして彼女を抱きしめたまま、ぐるぐると回り始めた

「あはは！

それから会った誰かに、上手く華琳のことを説得してもらえばいい
！！

すごい、すごい良い考えだよ！！」

「あわわ、目が回りましゅ」

「ああ、ごめんごめん！
でも嬉しくってさ！！」

言いながら、彼は笑顔のまま彼女の体を離れた

そんな彼のすがたに、知らずのうちに彼女も笑顔を浮かべていた

そして思う

ああ、あの男の人たちもきつと・・・こんな思いだったのか、と

誰かに必要とされる

誰かに認められる

それが、こんなに嬉しいものだったとは

雛里はそう思い、空を見あげた

見あげた空・・・晴れ渡る空に、彼女は手を伸ばす

その手が、彼女は何かを掴んだと・・・そう感じていた

く決めた・・・く

「御遣い様・・・」

「どうかしたの？」

「その、よろしければですけど・・・私も、連れて行ってもらえな
いでしょうか？」

「え？」

雛里の言葉

一刀はピタリと、動きを止める

そんな彼の様子に苦笑しながらも、彼女は真っ直ぐに彼を見つめた
まま話をつづける

「この策を考えたのは私ですし

それに・・・見てみたいんでしゅ

御遣い様が、これから何を為していくのかを」

「鳳統ちゃん……」

“今、さりげなく囁んでたよね？”とは、彼は空気が読めるから言わない

彼女のその真剣な目を見つめたまま、すっと考え込む
それから……彼は笑った

あの、青空に浮かぶ太陽のような笑顔で……

「一刀……って呼んでよ

こっちでいう、真名みたいなもんだからさ」

「それでは……!」

「ああ、一緒に行こうか」

「は、はい!」

私のことも、雛里とお呼びくだしやい!」

「うん、わかったよ雛里ちゃん」

ニッコリと笑い、彼女の手をとる一刀
その行動に一瞬戸惑うものの、彼女もまたすぐに笑顔になった

「これからよろしくね、雛里ちゃん」

「よろしくお願いします、一刀さんっ！」

澄み渡る空の下

交わされた握手

今ここに・・・物語は始まりを告げた

白き流星はこれから、いかな物語を紡いでいくのだろうか

それは、これからの楽しみである・・・

「よっし、じゃあまずは昨日のおさらいだー!!」

「ミラ・ジヨヴォヴィッチの練習から始めるぞー!!」

「あわわ!?!」

「まだやるんですか!?!?!」

・
・
・
次回に続く

第一章 あわわとミラ・ジヨヴォヴィッチと修造とともつとだ！もつと熱くな

さて、いかがだったでしょうか？

今回はあの人物が登場いたしますw

それでは、またお会いしましょうw w

第二章 野生の

が現れた

この白き衣が目に入らぬのかあ！（前書き）

さて、第二話です

今回は、一人の女性が活躍します

勿論、一刀君も大活躍ですよww

それでは、お楽しみくださいww

第二章 野生の が現れた この白き衣が目に入らぬのかあ！

「助さんと格さんが足りないと思うんだ」

「ど、どうしたんですかいきなり？」

それは、ある晴れた昼下がりのこと

比較的に整地された道を歩く、二人の男女の姿があった

一人は先の尖った長い帽子を被った少女

鳳統、真名を雛里である

もう一人は白い外衣を身に纏い、顔をフードですっぽりと覆い隠した男

司馬懿仲達・・・またの名を、北郷一刀である

二人はあの森での一件の後、目的地を特に決めることもなく何となく“南”に向け歩いていた

まあ魏の領内をあまり歩きたくない一刀からしたら、向かうのは必然的に南か西に絞られてしまうのだが・・・

その途中のことだった

一刀が突然、そのようなことを言ったのは

「だからさ、俺たちには足りないんだよ・・・“助さん”と“格さん”がさ」

「は、はあ？」

もう一度、同じように言う一刀

しかし雛里はそれに対し、可愛らしく首を傾げてしまう

その様子にズキユン　としてしまう一刀だが、自分は“ペド野郎という名の紳士”だと言い聞かせグツと堪える
それから、彼女を指さしながらニツと笑った

「雛里ちゃんは、“うっかりハチベエ”だし」

「あわわ!？」

ハチベエってなんですか!？」

「俺の国にいる、伝説の英雄の名前さ

うっかり悪の魔王を倒したり、うっかり世界を救ったりするんだ」

「うっかりで救っちゃうんですか!？」

しゅ、しゅごしゅぎましゅ!！」

吹き出しそうになるのを必死に堪えながら、一刀は雛里の頭を撫でる
その突然の行動に一瞬だけ慌てる雛里だが、すぐに気持ちよさそうに目を細めた

空は、快晴

うん、今日も三国は平和である

「でも、欲しいな〜・・・助さんと格さん」

呟き、彼は空を見あげる

彼がそんなこと言うのには、ある程度理由があった

それも、これからの自分たちの行動に大きく関係していくことだ
だがそんなこと知らない雛里からしたら、わけのわからない話である

「ああ、どっかにこう・・・戦える人、できれば元武将さんとか
落ちてないかなあ」

強そうな・・・大きな斧とかでも軽々振り回せそうな人とか」

「さ、流石にそれはないですよ・・・」

「ですよねえつつとお!!?」

「一刀さんっ!?!?」

突然、話している途中に一刀の体がグラリと揺れた

彼は慌てて体勢を立て直そうとするが、時すでに遅し

体にかかる重力には逆らうことが出来ずに、彼はその場に盛大にズ
ッコケてしまった

そんな彼の傍に、雛里は慌てて駆け寄っていく

「つてて・・・」

「一刀さん、大丈夫ですか？」

「ああ、大したことはないよ」

そう言っつて、一刀は苦笑する

それから、自分がズッコケた場所を見つめた

「なんかに躓いたと思ったら、見てみなよ
あんなに大きなものが落ちてるんだもん」

「本当です・・・一刀さんは上を向いてたから、気づかなかったんですね」

「ああ、今度からは気をつけるよ」

「それにしても、本当に大きなものに躓きましたね」

言いながら、雛里はクスリと笑いを漏らした

そんな彼女の様子に、一刀は照れたように頬を掻く

「まったく・・・誰だよ、こんな所に“女の人”を捨てたのは」

二人の視線の先・・・一刀が、先ほど躓いた場所

そこには、一人の女性が倒れていた

銀色の髪をしたその女性を見つめたまま、二人は顔を見合わせ笑う

「ふふ、本当ですね

見た感じ、旅の武者が何かでしょうか・・・もしかしたら、何処かで武将だった人かもしれませぬね」

「あはは、本当だ

なんか重そうな斧も持ってるし、なんか強そうだ・・・」

――間――

「……つて、本当に落ちてた――――――」

……この日、二人は生まれて初めて人を拾った

真・恋姫＋無双 - 白き旅人 -

第二章 野生の が現れた この白き衣が目に入らぬのかあ！

――――――

「……助さんと格さんが足りないと思うんだ」

「ちょっと、待ってくださいー刀さん！

なんで見なかったことにして、少し前の会話からやり直そうとしてるんですか！！？」

“うっ”と、雛里のツッコミに対し一刀は声をあげる

それから、視線を自身の足元へとうつした

そこには、先ほど見たとおり一人の女性が倒れていた

銀色の髪に、紫色を基調とした色合いの衣服

そして、相当の重さであろう戦斧

一刀はそんな女性の姿を見つめ、その場にしゃがみ込んだ

「息は・・・してるみたいだ」

一刀の言葉に、“よかった”と雛里は安堵の息を吐いた

そんな雛里の様子に苦笑し、一刀は女性の体を抱き上げた
所謂、お姫様抱っこというやつである

「仕方ない、か

このまま、近くの街まで運ぶことにしよう」

「はい、そうしましょう」

頷く雛里が先頭を歩き、その後ろを一刀がついて歩く

一刀が運ぶ女性はというと、先ほどから偶に小さく声を漏らしていた
そんな彼女を見つめたまま、一刀は僅かに表情を歪める

「なんかさ・・・俺、この人を何処かで見たとある気がするん
だけど」

「その人を、ですか？」

「ああ」

言われて、雛里はその女性を見つめる

それから、ニッコリと笑いながら首を横に振った

「私は、きつと初対面だと思いますけど」

「そう、なのかなあ

ていうか、俺なんかよりも雛里ちゃんの方がこの人のことを知ってるような気がするんだけど・・・」

「気のせいですよ」

「ああ、うん・・・きつとそうだよな」

雛里の言葉に、うんうんと頷く一刀

そんな彼を見て、雛里は“そうですよ”と笑顔を浮かべていた
それから、二人は顔を見合わせ笑う

「さて、とりあえず近くの街まで急ごうか」

「はいっ!」

力強くうなずき、早足で歩き出す雛里
その後ろで、一刀は女性を抱えたままついていく

(けどやっぱ・・・どっかで見たことある気がするんだよなあ)

頭の中・・・なかなか出てこない答えに、モヤモヤとしたものを抱えながら

――――

「ふう・・・なんとか、宿は確保できたな」

言いながら、一刀は安堵したように息を吐き出した
それに続くよう、雛里も椅子に座ったまま笑う

「はい、本当に良かったです
もう少ししたら、日が落ちてしまうところでした」

そう言って見つめた、窓の向こう

彼女の言うとおり、空はもう赤く染まってきた

あれから、近くの街を目指し歩いた二人
しばらく歩きもつゞ日が暮れるといったころ、ようやく街に辿り
着くことができたのだ

それからすぐに宿をとり、ひとまず運んでいた女性を寝台へと寝か
せた

因みに、宿は混んでいるらしく一部屋しかとることが出来なかった
仕方なく一刀は自分は街の外で野宿をするといったのだが、それを
雛里が全力で止めた

何でも、一刀なら間違いは起こさないだろうとのこと・・・要する
に、一刀のことを信じているというのだ

そこまで言うならと、一刀も渋々承諾

ただ部屋には二つしか寝台がないため、自分は椅子で眠るから雛里
は寝台で眠るよにという条件付きでだが・・・

「さて、と・・・これからどうしようか？」

そう言って、彼が見つめた先

そこには寝台の上に眠る、銀髪の女性の姿があった
彼女はスヤスヤと、安らかな寝息をたてている

「とりあえず、目が覚めるまでまっつてみましょうか？」

「うん、それがいいかな

見たところ、病気かなにかつてわけでもなさそうだし」

雛里の言葉に、一刀は頷き女性の額を優しく撫でる
銀色の髪がさらりと揺れた

「熱があるわけでもないし、今のところ医者は大丈夫か」

“ふう”と、一刀は椅子に座り彼女の顔を見つめる
そしてまた、先ほどのように表情を歪めていた

「うん・・・やっぱ、見たことある気がするんだよね」

腕を組み、何かを考えるよう俯く一刀

その様子に、雛里は額に手を当て同じように考えていた

「少なくとも、私は初対面だったと思います」

「そっか・・・なら、魏にいた頃に見たのかなあ」

一刀がそう言うと、“そうだと思いますよ”と雛里は微笑む
その微笑みに癒されつつ、一刀もそうだったか一人納得した

「ん・・・」

「「！」「」

ふと、小さく漏れた声

それが眠っていた女性から聞こえたものだど気付いたのは、その女性の目が僅かだが開かれたときだった

「ここ・・・は？」

「目が覚めたみたいだね」

「ん・・・？」

ゆっくりと言葉を紡ぐ女性

一刀はその女性を安心させるよう笑みを浮かべたまま声をかけた
そんな一刀のことを見つめたまま、固まってしまっ
どうかしたのか？

そう思い、一刀が彼女に再び話しかけようとした時だった・・・

「董卓・・・様？」

「は？」

彼女の口から、そのような言葉が聞こえたのは

その言葉に、今度は一刀が固まってしまふ番だった

“董卓”

彼は、その名前を知っている

彼だけではない

離里も、その名前を知っていた

“反董卓連合軍”

これに参加した二人が知らないはずがない

洛陽にて暴政をはたらく董卓を倒すために集まった諸侯たち

その中には二人の主である曹操と劉備もいたのだから

だからこそこの名前が出た時、二人は顔を見合わせ一様に驚きを隠せないでいたのだ

対して、その原因となった彼女もまた驚いていた

口をパクパクとさせ、慌てて手をブンブンと振っている

「す、すまない！

今のは、忘れてくれ！！」

「あ、ああうん！」

彼女の言葉に、一刀も慌てて頷く

“何か事情があるのかもしれない”と、そう思ったからだ

一刀からしたら、反董卓連合はもう終わったことだ

今更董卓軍の関係者だったからといって、どうする気もないのだ

それ故に、彼は彼女に気にしないよう伝え安心させようとした

「俺は気にしてないよ
だから、君も気にしないで」

「あ、ああ・・・すまない」

その言葉に、彼女は安堵したようにため息をついた
それから、キョロキョロと辺りを見回した

「すまん・・・私は何故、ここにいるのだろうか？」

「ああ、実は今日の昼ぐらいかな・・・倒れている君を見つけてね
それから君を抱えて、近くの街まで来たんだよ」

「そうか・・・私は、倒れていたのか」

「覚えてない？」

「ああ・・・大方、疲れていたのだろう
そういえば、ここ何日かまともに睡眠をとっていなかった」

彼女の言葉

「一刀は“そうだったんだ”と呟き、コクリと一度頷いた
それから彼女の手をとり、ニツと優しげに微笑む

「なら、今日はゆっくり休むといいよ
宿代なら気にしないでいいからさ」

「しかし・・・」

「いいから、いいから」

「こういう時はゆっくり休むに限るって、ね？」

「うむ・・・ならすまないが、お言葉に甘えましょう」

“ありがとう”と彼女は頭を下げる

そんな彼女に、一刀は“気にしないで”と笑っていた
すると同時に、何かを思い出したのか手をポンと叩きだした

「そういえば、まだ俺たちの名前を覚えていなかったね

彼女は鳳統ちゃん、俺と一緒に旅をしてるんだ」

「ほ、鳳統でしゅ」

「うむ、よろしくな」

カミカミな雛里に、思わず微笑んでしまう女性

その様子に笑みを浮かべながら、“それで、俺が・・・”と彼も自身の自己紹介を始めようと立ち上がった

「俺の名前は“司馬懿”、字は“クエンティン・タランティーノ”だ
巷では、“鬼才”なんて呼ばれたりもしてる
俺のことは気軽に、字で“クエンティン・タランティーノ”って呼
んでくれ」

「ぶっ!!!?」

吹き出す雛里も華麗にスルーし、サムズアップしながら言う一刀
しかも、ここ一番の良い笑顔で
そんな彼の言葉に、彼女は難しそうな表情のまま口をパクパクとさ
せていた

「くえんて・・・す、すまん、悪いがもう一度聞いてもいいだろう
か？」

「ああ、いいよ」

言って、一刀はポンと雛里の肩を叩いた
そして相変わらずの良い笑顔で、雛里のことを見つめる

「それじゃ、雛里ちゃん・・・よろしく」

「あわわ!?!」

なんで、そこで私に振るんですか!!?」

「面白いk・・・雛里ちゃんのために思ってたよ、勿論」

「聞こえましたよ!？」

今、面白いからって言おうとしましたよね!？」

「ボク、ナニモシラナイヨー

イイカラ、イツテミヨーーー」

「あわわ、あわわわわわ」

白々しい一刀の言葉に、あわわ言うことしかできない雛里
だがいつまでもこうしてはいられない
やがて雛里は意を決して、力強く拳を握りしめ口をひらいた

「くえんひんひやりゃんぴいのしゃん、でしゅ!!--」

-----間-----

「うん、そついうわけで・・・」

「待て待て待て！」

そのまま話を進めようとするな！
わからなかったぞ！？

全くと言っていいほどに、わからなかったぞ！？」

慌てて、声をあげる女性

その言葉に、一刀は呆れたようにため息を吐き出していた

「今、雛里ちゃんが言ったじゃないか

“クエンティン・タランティノー”って・・・聞こえてなかったの
？」

「いや、言えてなかったからな！？」

よく舌を噛み切らなかつたなと褒めてやりたいくらいに、言えてな
かつたからな！？」

「そんなことないよ・・・ねえ、雛里ちゃん」

「え、あ、はい、その・・・ハイ、チャントイエテマシタヨ？」

「・・・不自然なほど目が泳いでいるんだが？」

「見なかったことに・・・」

「出来るかーーーーー!!!!!!」

“うがー!”と、彼女は頭を抱え叫ぶ

その様子にフツと笑みを浮かべながら、一刀は“仕方ない”ともう一度名乗ることに

「クエンティン・タランティノー、だよ

よろしくね」

言って、スツと手を差し出す一刀

その手をしばし見つめた後、彼女はその手をソツと握った

「うむ、よろしく頼む・・・“クエン酸・楽しいよ”」

「うん、その発想はなかったよ」

・ 相変わらず、まったく言っていないほどに伝わっていなかったが・・・

――――

「うん、もついいや・・・好きに略して呼んでくれて構わないよ」

「すまない」

彼女の言葉

彼は“別にいいよ”と、笑顔で言う

あれから何度か言い直したが、何故か彼女は“クエン酸”から離れようとしなかった

雛里とは全く違うタイプの間違いに、彼は苦笑しつつも前回同様略して呼ぶように言ったのだ

「さて、鳳統に“タラシ”だったな

まずは・・・」

「ちょ、ちよつと待って！

どこをどう略したら、そんな失礼な呼び方になったのさ!？」

彼女の言い方に慌てて止めに入る一刀

だが彼女には何が悪いのかわからないようで、キョトンとした表情のまま一刀のを見つめていた

「なんだ？」

どこがおかしかったのか、タラシ」

「だから、その呼び方はらめなおおおおおおおお!!!!!!」

彼女の呼び方が、グサリと心に刺さっていく

というのも、魏にいるころの渾名も関係してのことなのだが……もちろん、彼女が知る由もない

結局、雛里のころと同様に“仲達”と名乗った一刀

偽名云々のお話は華麗に誤魔化し、彼は話を進めていった

それから、今度は彼女が自己紹介を始めたのだが……

「私の名前は“華雄”という」

「……え？」

今度は、二人が驚く番だった

「いや、ごめん……もう一回、言ってくれろ?」

「なんだ、聞こえなかったのか？
私の名前は、華雄という」

その名を聞き、二人は聞き間違いではなかったと頭を抱えた
特に・・・雛里

「ねえ、雛里ちゃん

俺の記憶が確かなら、劉備軍つて反董卓連合軍のころに彼女と・・・

」

「あわわ、いつ言わないでください!!」

顔を真っ赤にしながら、慌てて言う雛里

数分前の自身の言葉が頭の中で反復しているのだろうか

もう、今にも泣きそうだった

そんな彼女の姿に“ぴちゅん”とされる一刀だが、“自分はペド
という名の選ばれし者なんだ!”と言い聞かせ何とか堪える
華雄はというと、そんな二人の様子に苦笑を浮かべていた

「仲達たちは、随分と仲がいいのだな」

「あ、あわわ!??」

そして、突然の言葉

雛里はさらに顔を赤くし、一刀はというと照れたように小さく笑み

を漏らしていた

「雛里ちゃんと一緒に行動しはじめたのは、つい最近のことなんだ」

「そうなのか？」

とても、そうは見えなかったが・・・」

「ほんの、数日前からだよ

偶然森の中で出会ってさ・・・それから、俺の旅について来てくれることになったんだ」

「そうだったのか

しかし、旅か・・・いったい、何の為に？」

華雄の問い

一刀はスツと、部屋の窓を見つめた

窓の向こう・・・外は、もうすっかりと日が落ちている

彼はそんな景色を眺めたまま、優しげに微笑んでいた

「何の為、か」

呟き、視線を自身の手にうつす

その手を、彼は静かに握りしめた

「俺さ・・・」

“~~~~~”

「・・・」

「・・・」

「・・・」

シンと、静まり返る部屋

何故か、凄まじく気まずい空気の中

無言のまま手をあげたのは・・・華雄だった

「す、すまない」

顔を真っ赤にしながら、絞り出すような声で言う華雄

そんな彼女のしぐさに、一刀と雛里は思わず吹き出してしまつ
それからお互いに顔を見合わせ、大きな声で笑つた

「うん、そういえばもうそんな時間だったね
それじゃあ、そろそろ晩御飯にしようか」

「はい」

二人の言葉

華雄はというと・・・照れくさそうに笑いながらも、お腹をおさえ
たまま頷いたのだった

――十――

「そういえば、さ・・・」

部屋に食事を運び、三人で仲良く食べている時のことだった
食事も一段落したと一刀が箸を置き、華雄を見つめたまま口をひら
いた

「華雄は、どうしてあんな所に倒れていたんだ？」

「む・・・？」

その言葉に動かしていた手を止め、華雄はふと天井を見上げる
その瞳は、微かだが揺らいでいた

「私は・・・ずっと、探していたのだ」

「探していた？」

「ああ・・・1年前に偶然見た、白き流星をな」

「「！」」

“白き流星”

その言葉に、二人はピクリと反応する
しかし華雄はそれに気づくことなく、話を続けていた

「その流星を見つけることが出来れば、わかるような気がしてな」

「わかるって・・・」

“何が・・・”

一刀がそう言い掛けた時だった
それよりも早くに、華雄は悲しげな表情を浮かべたまま言ったのだ

「私のもつ“武”は・・・いったい何の為にあるのだろうか、とな」

重い

一刀はその一言を聞いた瞬間、そう思った
いや、重いだけではない

(華雄……)

彼は、“似ている”と……そう思ったのだ

何故、そう思ったのか？

それを彼は、今はまだ言うことはできない
故に、その言葉に対し“そっか”と……力なく言うことしかでき
なかつたのだった

――――

「ん……」

翌日

一刀は朝一番、椅子から立ち上がり思い切り体を伸ばしていた
椅子で寝ていたため、体が少し痛いのだ

「ふう・・・よし、こんなもんかな」

言って、彼は窓の外を眺める

太陽の温かな光が心地よい

今日は、良い天気だ・・・そう思い、彼はフツと微笑む

「おはよう・・・朝が早いのだな、仲達」

「華雄、おはよう」

そんな彼の背後から、声をかけてきたのは華雄だった
彼女は肩を軽く回し、それからコクンと頷いた

「ふむ、もう大丈夫なようだ」

「そっか、よかったよ」

「ふっ、仲達たちのおかげだ・・・ありがとう」

「どういたしまして」

彼女のお礼に、彼は笑顔でかえした
その笑顔に一瞬だけ華雄が固まってしまいが、すぐにハッと我にか
えりまた肩をグルグルと回していた
どうかしたのか？
そう思い、彼は彼女に声をかけようとする・・・が

「た、大変だあああああああああ！！！！！！！！！！」

「「っ！！？」」

「ふ、ふあわわわっ！！！！！！？」

それは、突如として響いた声によって阻まれてしまう
因みに、その声に驚いたのか雛里が寝台から顔面ダイブしていた

「何かあったみたいだな」

「行ってみよう」

「ああ」

頷きあい、二人は部屋から飛び出していく
その後ろを慌てて、雛里が追いかけていった

さて、そういうわけで宿を飛び出した三人
先ほどの声の主は、すぐに見つかった
すでに今の声を聞きつけた村人が、その声の主の周りに集まってい
たからだ

「何やら、騒がしいな」

「ああ、皆焦ってるように見える」

「あわわ、いったい何が・・・」

その尋常じゃない様子に、三人の表情も強張る
とりあえず話を聞こうと、一刀達はその人ごみの中へと駆けて行く

「すみません、ちょっといいいですか？」

「ん・・・アンタは？」

「俺は姓を“松岡”、名を“修造”
字は“諦めるなよ！！熱くなれよ、もつと熱くなれよ！！頑張れつ
て君なら出来る、だから熱くなれよ！！”といます」

「松岡？ 修造？」

え、なに？

熱くなるの？

おじさん、熱くなっちゃっていいの？」

「そ、そんなことより！

いったいこれは、何の騒ぎですか？」

この親父、ガチだ！

と内心焦った一刀は、すぐさま話題を変える

勿論“自分で言うておいて”などと、空気が読める二人は言わないそんなことよりもまずは、今の状況が知りたかったというのもあるが・・・

「ああ、それが・・・この村のすぐ近くの森に、巨大な虎が出たみたいだね」

「虎が？」

「ああ・・・あの森には私たちもよく行くからね、皆でどうしたのかと悩んでいたところさ」

「ふむ・・・虎、ね」

腕を組み、一刀は考える

妥当なところ、この辺りを治める太守なりに連絡し何とかしてもらった案がある

その間は森には入れなくなるが、死ぬよりはマシなはずだ

「そそそ、そういえば・・・私の娘が、さっき森に遊びに行くって家を出て行ってしまったわ!!!!!!」

「なっ・・・!?!」

しかし、その案はこの一言で崩れ去ってしまう

一刀は頬を伝う冷や汗を拭い、慌てて声の主のもとへと駆け寄っていった

「今の話は本当ですか!?!」

「あ、貴方は!?!」

「修造です!

そんなことより、娘さんが山にいるというのは・・・」

「ほほ本当です!?!」

「くっそ・・・!」

舌打ちし、一刀は思考をフルに働かせた杖を握る手に、力がこもっていく

「娘さんの年は？」

「七つになります」

「きた、ストライク……って違うだろ、俺の馬鹿！！」

「は、はいっ！！？」

煩惱がダダ漏れました、とは言えない

故に一刀は必死に首を横に振るしかなかった
と、そのようなことを考えている場合ではない
そう思い、一刀は思考を素早く切り換えた

(七歳の女の子が、虎に出くわして逃げ切れるわけがない
だったら、太守なんかに助けを求めている時間はないよなあ)

「ああ、いったいどうしたら……！！」

「くそ、こうなったら俺たちで！」

「馬鹿野郎、死ぬ気かよ!？」

「けど……!!」

「熱くなれよ!!もつと熱くなれよ!!」

「くそ……」

ふっと、見つめた先

娘を心配し、涙を流す母親

そんな彼女のため、森に行こうとする村人達

しかしろくな装備もないまま虎に立ち向かうなど、はっきり言って
無謀だ

“はぁ”と、ため息がこぼれた

それと同時に、彼の中である“決意”が固まった

「仕方ない、よね・・・雛里ちゃん」

「は、はい！」

「ごめん・・・ちょっと、寄り道していくよ」

「え・・・？」

「む・・・？」

ポツリと、呟いた言葉

雛里と華雄はその言葉の意味がわからずに、その場に立ち尽くして
しまう

そんな二人のことも知らず、彼は先ほどの母親の肩にそっと触れた
それから、ニツと笑い掛ける

「大丈夫ですよ
俺が、助けてきますから」

「・・・え？」

キョトンと、母親は口も半開きのまま固まった
周りの村人たちも、華雄でさえも同じように固まっていた
そんな中、唯ひとり・・・雛里だけは、何かわかったように顔をあげた

「まさか・・・」

「まあ、そのまさかだよ
ここで会ったのも、何かの縁だしね
だから・・・」

「ここから・・・始めてみようと思っただけ」

“バサリ”と、彼は身に纏う外衣を脱ぎ捨てた

そして露わになる、日の光を浴びて美しく輝く・・・“白き衣”

村人たちは、そのあまりの美しさに目が離せなくなってしまっ

村人だけではない

彼女も・・・華雄もまた、その一人だった

彼のその姿を前に、彼女は体が自然と震えてしまつのを抑えることができないでいた

「あ、貴方は・・・いつたい？」

そんな中、あの母親が声をあげる

震えたままのその声に、彼は太陽のような温かな笑みを浮かべ言った

「俺の名前は北郷一刀

まあ、“天の御遣い”って呼ぶ人もいるけどね」

三年前・・・消えたとされる、天の御遣い

歴史から消えた、乱世を終わらせた英雄の名前

その彼が今再び、歴史の表舞台に立とうとしていた・・・

――――

「……というわけで、森の中です」

「でしゅー！」

現在、村の近くの森の中
一刀は外衣を羽織り、杖を片手に歩いていて
その後ろを、必死に雛里がついて歩いていて

「ていうか、なんで雛里ちゃんまで来るのさ？
ぶっちゃけ、かなり危ないと思うよ」

「一刀さんお一人で、危険な所には行かせられません！
もともと、この策は私が考えたものでしゅしゅ……最後まで責任を
持ちたいんでしゅー！」

「ああ、うん……その噛み具合で、どれだけ本気がってことは伝
わってきたよ」

さて、あれからどうなったのか・・・

一刀は自身が天の御遣いだということを明かした
それからすぐに、森の中へと駆け出して行ったのだ
そのすぐ後に、雛里がついて走ってきたわけなのだが・・・理由は、
今言ったとおり

“仕方ない”と、一刀は苦笑する

因みに、雛里が言った策とは“一刀が魏へと帰る為の策”のことである

つまりまずはこの村から、“天の御遣い”という名を広めようというのだ

母親の娘を無事に連れ帰ることが出来れば、かれらは“天の御遣い”の名を深く記憶するだろう

もっとも・・・一刀からしたら、そのようなことは後回しでもよかった

ただ単純に“助けたい”と、そう思っただけの行動だったのだから

「しかし、いないなあ・・・幼女」

「はい、そうです・・・幼女？」

「え、あ、いや・・・そう娘さん、娘さん中々見つからないな」

「そうですね」

まだ七歳らしいですし、そう遠くには行けないはずなんですけど」

言いながら、彼女はキョロキョロと辺りを見渡す
そして、“あつ”と声を漏らした

「いました・・・」

「え、嘘!？」

言われ、一刀は彼女が見つめた先を見つめる
そして・・・絶句

そこには、確かに少女がいた
泣きながら、こちらに向かい走ってきている
本来なら“幼女ワシヨイ”といく一刀だが、状況がそれを許さな
かった

「ああ、くそ!!!」

「一刀さん!!」

彼らが見つめる先にいる幼女
そのすぐ後ろには、4匹の巨大な虎がいたのだから・・・

—————

「なんて、ことだ」

村の中

未だざわめきに包まれる村の中心で、彼女は自身の両手を見つめ呟く
その体は、微かに震えていた

「まさか、この私が武者震いを起こすとは……な」

呟き、彼女はフツと微笑む

そして……思い出す

彼が、天の御遣いが村を飛び出す直前のことを

『待て……本当に行くのか？』

『華雄……まあ、言っちゃったしね』

娘さんを、助けてくるって』

『しかし・・・相手は巨大な虎だぞ？
命に関わることだ』

しかも、この村人とお前はまったくの赤の他人じゃないか』

『そこら辺は、まあ一応考えてはいるよ』

“それに・・・”と、彼は小さく笑う
その微笑みに、彼女は“見た”のだ

『乱世は終わったんだ・・・それなのに、未だに悲しそうな顔をしてる人たちがいる』

俺は、そんな人たちを見捨てることなんてできないよ』

『あ・・・』

その笑顔に

その笑顔の奥にある優しさに

彼女は“見た”のだ

かつての自身の主・・・“董卓”の姿を

「くくっ・・・本当に、面白い男だ」

言って、彼女は駆け出していた

その手に、長年共にあった“相棒”を握りしめて・・・

彼女は、駆け出して行ったのだ

村の門を飛び出して

彼が・・・一刀が入っていった、森の中へと

—————
—————
—————

そして、場面は再び森の中

彼・・・北郷一刀は現在、絶賛大ピンチだった
というのも・・・

「」「」「」「」
「」「」「」
「」「」「」

四匹の巨大な虎に囲まれているのだから
そんな中、少女と雛里を庇うようにして一刀は杖を構えていた

「あわわわわ」

「ねえ、こんなにいるなんて聞いてないんだけど!？」

「私もでしゅよお!！」

「怖いよ〜!！」

自分一人だったなら、逃げられたかもしれない

しかし、ここには雛里と少女がいる

一刀は何とか、この危機を乗り越えるための策を考えていた
だが、中々思いつかない

(とにかく、一か八かだ……!)

「雛里ちゃん!

俺が何とか気をそらすから、その間に逃げるぞ!」

「でもどつやって……!」

「どつやってだよ!」

言って、彼は杖の先端を正面の虎へと向ける
それと同時に、グツと前へと足を踏み出した

「メラ”!!」

“轟!!”と、杖の先端から勢いよく炎が噴出していく
その炎が、一匹の虎へと命中した

「今だ!!」

その隙に、彼は雛里と少女の手を掴み駆け出す
・・・因みに、叫び声は気分である

「よっし、上手くいったか!？」

「ガアアッアアアアアアア!!!!」

「うっほう、きたああああああああ!!!!!!??」

咆哮をあげ、勢いよく三人を追いかけてくる四匹の虎
その恐ろしさに体が震えそうになるのを、一刀は必死に抑える

「やっぱアレか!？」

メラじゃ駄目なんか!？」

MPケチつたら駄目なんか!?

メラゾーマくらい出さなくちゃダメなのか!?!」

「あわわわわ、このままだと追いつかれちゃいますよおおお!!!
!?!?!」

「ああ、もう!

こうなりや、ヤケクソだ!

雛里ちゃん、君はそのままその幼女を連れて逃げるんだ!」

「一刀さんは!?!」

「俺は・・・ここで時間を稼ぐから!!」

叫び、一刀はその場で方向転換する

そんな彼の姿に一瞬足を止めそうになる雛里だが、一緒に走る少女
の顔を見て思い止まる

「一刀さん、絶対に戻ってきてくださいね!!」

「大丈夫だ、問題ない!!」

・・・って、これ死亡フラグじゃん!?

ごめん、今のやっぱなしいいいいいい!!?!?!?!」

「ガアアアアア!!」

「うひゃああ!?!」

ちよっと待って、心の準備だけさせてええええええええ!!?!?!?」

「？」

「一刀さー！ー！ー！ん！！！！？？」

背後から聞こえる声に、彼女の不安は一気に高まる

その不安を必死に押し殺し、彼女は村へと続く道を駆け抜けていった

因みに、一刀は間一髪で虎の猛攻をかわしていた

そのかわり、四匹に囲まれてしまったのだが

「おいおいおい・・・これってピンチじゃね？

ものっそいピンチじゃね？

じいちゃんとの特訓という名のイジメでさえ、こんな状況は想定してなかったよ？」

じりじりとにじり寄ってくる虎たち

一刀は頬を伝う嫌な汗を拭い、深く息を吐き出した

「まだ“アレ”は使えないし・・・今あるのだけで、何とかするしかないか」

“仕方ない”と、彼はまた深く息を吐き出す

そして、眼前に立ちはだかる虎を睨み付け叫んだ

「我が名は司馬懿！」

字は仲達！！

貴様らの相手、全力で務めさせてもらおう！！」

くただし・・・く

「俺は、ぶつちやけ戦えないから・・・全力は全力でも、全力で逃げることだけだな！！！！！！」

なんとも、情けない本音をぶつちやけながら一刀は自身の懐に手を入れる

そして取り出したものを、思い切り地面へと叩きつけた

瞬間・・・辺りに、凄まじい程の煙が広がっていく

「が、ガウ！！？」

その突然の事態に焦る虎たち

そんな虎の隙間を縫うようにして、彼は駆け出して行った

「はっはっはっは、見たか!!」

これぞ司馬懿印の発明品“ぼくのかんがえたかつこいい武器シリーズNo.76”

地面に叩きつけたら“胡椒”やら“唐辛子”やら“ウコン”やら“ジャスミン”やらが含まれた煙が辺り一面に広がる不思議なボールその名も“モンスターボール”だ!!

一見嫌がらせに見えて、健康や香りにも気を使った素敵な一品!!
さあ、貴様らにぬけっげほっがはっ!!???

ちよ、まっ、ごほっ、煙出すぎじゃ・・・ごほっ!

喉痛っ・・・あ、でもジャスミンの良い香り・・・ごほ、がはっ!!?
」

・・・むせた

それはもう、盛大にむせた

どれくらい酷かったかというと、走ることを忘れるくらいにむせた

それが、不味かったのだ

「ガアアアアアアアアアア!!!!!!」

「っ、しまっ・・・!!!!?」

彼が気づいた時には、もう遅かった

虎は、あと数秒で彼を噛み殺さんというところまで迫っていたのだ

(ウソだろ・・・ここまでなのか？
俺はまだ、“見つけてないんだぞ”？
まだ、俺は“なれていないんだぞ”？
なのに・・・！！！)

くごめん、華琳く

ギョツと目を瞑り、彼は身構える
しかし・・・

(あ、れ？)

中々、その時はやってこない
もう襲いかかってきていてもおかしくないのに、だ
彼はその事態を不審に思い、恐る恐る目を開けていく
そして・・・見えた光景に、彼は言葉を失ってしまう

「まったく・・・無茶をする」

風に揺れる銀色の髪

“彼女”は斧で虎をおさえつけたまま、彼を見つめ微笑んだ

「なん、で・・・？」

「なんで、だと？」

それを、お前が言うのか？」

呆れたという表情をする彼女に対し、彼は苦笑してしまった
それから、彼は杖を構え彼女に向かい微笑んだ

「ありがとう、華雄」

「ああ、気にするな

今後、こういうことは多々あるだろうしな」

「“今後”？」

首を傾げる一刀

そんな彼の様子にクツと笑いをこぼし、彼女は目の前の虎を・・・
真つ二つに切り裂いた

瞬間、残りの虎たちが一斉に二人から距離をとる

彼女は・・・虎たちの行動に笑みを浮かべ、斧を思い切り地面へと突き刺した

そして・・・叫ぶ

「我が名は“華雄”!

天より舞い降りし“白き流星”を守護する“斧”なり!!
その命、惜しくなくばかかってこい!!!!!!!!!!」

—————

「一刀さんっ!!!!」

「おっと」

村に着いた瞬間に、一刀に向かいダイブしてくる雛里
そんな彼女のことを、彼は優しく受け止める

「よかった!

無事だったんでずね!!」

「ああ、うん無事だったよ
だから鼻チーンしようか、可愛い顔が台無しだから」

「チーン!!」

「ヒナりん、それ俺の外衣iiiiiiii!!??」

着いて早々に、二人はワイワイと盛り上がる(?)
そんな二人の様子に、華雄は優しげな笑みを浮かべていた

「御遣い様!」

「お兄ちゃん!!」

その二人のもとに、あの母親と娘が駆け寄っていく
続くように、村人たちも集まってきた

「ありがとうございます!」

本当にありがとうございます!!」

「いや、そんな・・・俺、そんな大したことはしてないし」

「そんなことはありません!

貴方様のおかげで、娘が救われました!」

「ありがと、お兄ちゃん！」

「ああ、気にしないで

なんたって俺はp d . . . 紳士だからね」

ピツと、サムズアップする一刃

その紳士という言葉に込められた意味に、気付くものはいないだろう

「そんなことよりも、一応虎は退治したから

けど念の為、太守さんには連絡して確認してもらってね」

「退治したんですか!？」

「華雄がね」

言って、彼は華雄を指さした

一斉に、彼女に集まる視線

そのことに気づき、華雄はフツと笑みをもらす

勝負は、あれからもの数分だった

華雄の持つ圧倒的な武の前に、虎たちは切り伏せられたのだ

あれから数年

彼女は苦しみ迷いながらも、武の鍛錬は怠ったことはなかった
それに、彼女は見つけたのだ

自分が探し求める答え . . . その、欠片を

だからこそ、彼女は“この道”を選んだ

「なに、そこいらの猛獣など私の相手ではない
それに私は、当然のことをしたまでだ
何故なら私は、御遣いを守る“斧”なのだから」

「一刀さん？」

首を傾げながら、雛里は一刀のことを見る
それに、彼は苦笑を浮かべることしかできなかった

「まあ、そういうわけで
華雄が仲間に加わった、みたいなの？」

「みたいになって、聞かれても・・・」

「あははは、まあ新しい旅の仲間ってことで」

「・・・タラシで合ってるじゃないですか」

「ぐはっ！！？」

“ザクンツ”と、一刀の心に何かが刺さった
そんな彼のことを見て、華雄はまた笑いをこぼすのだった

――――

「しかし、いいんかな・・・こんなに色々貰っちゃって」

晴れやかな空の下

歩くのは3人の男女

そのうちの一人・・・一刀は背中に背負った荷物を見つめ苦笑していた

「いいんじゃないですか？

折角のご好意ですし、断る方が失礼ですよ」

そう言っつて微笑む少女

雛里の背中に背負われた鞆も、いつもよりも膨らんでいた

この中には、お礼だと言っつて渡された“食料”が入っているのだ
少女を助けたことと、“天の御遣い”という名が生んだ結果である
うか

「そっだぞ一刀
貰えるものは、貰っておく方がいいだろう?」

それに同意するように頷くのは、二人よりも大きな荷物を軽々と運ぶ女性

華雄だった

彼女には真名がないらしい

しかし、だからといって彼が自分の名を預けない理由にはならない
そういうわけで、一刀は華雄に自身を“一刀”と呼ぶように言い
雛里は、自身の真名を預けたのだ
最初はそれを断ろうとしていた華雄だったが、それが旅について来る為の条件だと言われ渋々承諾
そして、現在に至るといっわけだ

そんな彼女の言葉に、彼はふうと息を吐き出した

「まあ、いつか・・・減るもんじゃないし」

それから、彼は空を見あげる

今日も、絶好の旅日和

流れていく雲に、何やら妙な親近感のようなものを感じながら・・・
彼はそう思い、ふと微笑んでいた

「雛里ちゃん、このまま行くと次は何処に着くかわかる?」

「えっと、確か・・・」

彼の問いに、雛里は慌てて持っていた地図をひらいた

彼女がコツコツと様々な情報や記憶から作り出したお手製の地図
それを見つめながら、彼女は呟く

次なる目的地の名を・・・

「次は・・・呉の首都、建業です」

ゆらりゆらり、白き旅人は歩いていく
その旅に、新たなお供を引き連れて
ゆっくりと、彼らは歩いていく

因みに・・・

「村」

「御遣い様・・・やっぱり、すごい立派な方だったなあ」

「ああ、良い人だったよ」

「つて、ああ!？」

御遣い様のお名前・・・なんだっけ!!?」

「やべえ、おれも忘れちゃったぞ!!?」

「あ、私は覚えているぞ!!」

「」「」「ほんとか!!?」「」「」

「ああ、確か・・・」

「確か、そう・・・“松岡修造”様だ!.....!」

ここに、間違った伝説が始まろうとしていることも
これにより、未だかつてないほどの巨大な“死亡フラグ”が立とう
としていることも

彼らは・・・未だ知る由もなかった

第二章 野生の が現れた この白き衣が目に入らぬのかあ！（後書き）

いかがだったでしょうか？

今回は、ちよつとした閑話休題のようなお話

それでは、またお会いしましょう

第三章 女の子？男の子？・・・いいえ、男の娘です（前書き）

さあ、第三話

ひとまずは、ここで一休み

というのも、TINAMIはここでストップしているからです
まあ、近いうちに更新できればいいなあとは思いますが

それでは、お楽しみくださいw

第三章 女の子？男の子？・・・いいえ、男の娘です

乱世は終わった

長きにわたる戦乱の世は、三国が手を取り合う“三国同盟”という形で終幕を迎えたのだ

しかし、乱世が終わった今でも尚・・・苦しむ人々がいる
悲しみに身を震わせる人たちがいる

そんな中、立ち上がった者達がい
彼らはこの大陸に颯爽と現れて、苦しむ人々の為各地を駆け回ったのだ
そんな彼らのことを、人々は・・・そして、彼ら自身はこう呼んでいた

その名は・・・

「「ジャッジメント風紀委員ですの！！」

「じゃっ、じゃっじめんちよでしゅの！！」

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -

第三章 女の子？男の子？・・・いいえ、男の娘です

—————

「もうね駄目、駄目だね。全然駄目、全く駄目。もう話にならないよ雛りん」

「あわわっ、出だしから物凄い駄目出しです!!?」

晴天の下

溜め息と共に、一人の青年がダメ出しをしていた彼の名前は“司馬懿”、字は“仲達”、時々“修造”本名を“北郷一刀”である

三年前に天へと帰ったとされる“天の御遣い”だ

そんな彼にダメ出しをされているのは、先の尖った長い帽子を被った少女

“鳳統”、字は“土元”、真名を“雛里”

三国のうちの一つ、蜀の軍師だ

彼女が何故、ここまでダメ出しをされているのか？

それには、そんな深くもない理由があった
それは……

「なんで、こんな大事な台詞を噛んじゃうんだよ雛りん……」

これである

まあ要するに、雛里の噛み癖が原因だったのだ

「決め台詞だよ？」

俺たちの決め台詞なんだよ？

それを噛むなんて……はあ〜」

言っつて、大げさに頭を抱える一刀

その彼の様子に、雛里は申し訳なさそうに“あわわ”言っていた

「しかし一刀よ……決め台詞、だったか？」

本当に、そのようなものが必要なのか？」

そんな中、一人の女性が首を傾げながら呟いた

彼女は“華雄”

一刀と雛里の、新たな旅のお供である

その彼女からの疑問の声に、一刀は顔をあげ“ああ”と答えた

「俺が“天の御遣い”であるってことを強く印象付けることが重要だからね
なるべく、皆の印象に残るような登場の仕方じゃないと」

「……そうなのか？」

「そうだよ」

言って、彼は笑いながら腕につけていた“団長”と書かれた腕章を見せる

因みに華雄は“生徒会長”、雛里は“庶務”と書かれた腕章をそれぞれ腕につけていた

この世界に“作品が違う！”と突っ込んでくれる人がいないのが、残念でならない

「これを言うのと言わないのでは、皆が俺に対して抱くインパクト……衝撃が違うんだよ」

「ふむ……なるほどな」

納得したように頷くと、一人黙々と先ほどのポーズを繰り返す華雄そんな彼女の姿に苦笑しながら、雛里は彼女に続くようポーズと決め台詞を繰り返した

相変わらず、台詞はカミカミだったが

その光景を“シユールだなあ”と他人事のように見つめながら、ふと一刀が空を見上げた瞬間だった

「お・・・？」

ポツリと、一刀の頬に何か当たったのだ
それが雨粒だと気付いたころには、もうサアサアと細かな雨が降り
始めていた

「参ったな・・・雨が降ってきた

雛里ちゃん、こっから次の街までどのくらいあるかわかる？」

「あわわ、ここからだと一夜かかります」

「む、それは困ったな」

「だな・・・」

言って、彼は辺りをキョロキョロと見回した

それから冗談めいた笑みを浮かべながら、小さく呟きを漏らした

「ここらへんに、一晩泊めてくれるような家とかってないかなあ」

「さ、流石にそれはないですよ」

その言葉に、雛里は苦笑しながら言った

彼女の言うとおり、現在三人のいる場所から街まではだいぶ距離がある

加えて三人がいるのは、だだっ広い高原だ

遠くには山が見えるくらいで、街のようなものは見えない
まさに、お手上げといった状態なのだ

「仕方ない、か

雨がしのげる様な場所を探して、そこで野宿しようか」

「そうですね」

そうして、2人が諦めたような声をあげた瞬間だった

華雄がハッと辺りを見回したのち、二人に向い声をかけてきたのは

「あそこに・・・何やら、家のようなモノが見えるな」

「え・・・？」

言われ、二人は華雄が見つめる先を見た

しかしそこにあるのは高い山だけで、家のようなものは見当たらない

「いや、何にもないみたいだけど」

「あわわ、そうですね」

「いや、確かにある
よく見なければわからないのだが・・・」

その言葉に、もう一度その山を見つめる一刀

しかし相変わらず、そこには緑生い茂る山しか見えない

だが、このままここにいるよりはマシなのかもしれない
そう思い、一刀は苦笑を浮かべる

「ま、どっちにしろ雨をしのげるとこまで行かなくちゃいけない
だし

とりあえず、行ってみよっか？」

「はい、そうですね」

「うむ」

――
――

「ほ、本当にあったよ・・・」

啞然とした表情のまま、零れ出た言葉
彼が見つめる先・・・そこには、古ぼけた一軒の大きな屋敷が建っ
ていたのだ

華雄の言葉通りだったというわけだ
これには一刀だけでなく、雛里も信じられないといった表情を浮か
べている

そんな中、華雄はフツと笑みを浮かべ二人の肩を叩いたのだった

「なに、そこまで驚くことではない
武人として、当然の嗜みだ」

「そうなの・・・雛里ちゃん？」

「わ、私に聞かないでくださいよ」

そんなやり取りもそこそこに、三人は改めて目の前に建つ屋敷を見
つめる

見た目はとても古く、一見すると誰も住んでいないようにも見える
しかしよく見ると、微かにだが中から灯りが漏れていた

「一応、人は住んでるみたいだね」

「どんな奴が住んでいるかはわからないがな」

言いながら、華雄は背中に背負った戦斧へと手をやる
万がここに住む者が山賊などだった場合、咄嗟に動けるようにだ
雛里も、二人の後ろに移動する
そんな二人の姿を見た後に、一刀はゆっくりと大きな扉へと歩み寄る
それから、“ドンドン”と扉を叩いた

「すいませ〜ん！
ちよつと、いいですか〜！」

瞬間、中から声が聞こえてきた

とても小さい声だった為何と言ったのかまでは聞き取れなかったが、
とりあえずは自分たちのことに気づいたのだろう
そう思い、一刀はひとまずは安堵の息を吐きだした

「油断はするなよ、一刀」

「大丈夫、何かあったって華雄が守ってくれるんだろ？」

「う、うむ・・・まあ、そうなんだが」

「なら、大丈夫さ
ね、雛里ちゃん」

「はい・・・ってあわわ、来たみたいですよ」

雛里の言葉に、三人の視線が眼前の扉へと集まった

その言葉の通り、コツコツと小さな足音が扉へと近づいてくるのがわかる
やがてその足音は、扉の向こう側で止まった
その直後……

「あ、あの……どちら様でしょうか？」

扉の向こうから聞こえてきた声に、三人は拍子抜けてしまう
弱弱しく、とてもか細いその声に

「えっと、旅の者なのですが……突然の雨にどうしたものと困っていた時、こちらの家が目に入ったもので
どうか一晩、泊めていただきたいと

無論、タダでは言いません
少ないですが、お礼もさせていただきます」

「は、はあ……」

一刀の言葉に、声の主は戸惑ったような声をあげる
その声を聞き、ため息と共に華雄は背にやった手をおろす
武人としての勘か何かだろうか……そのようなものが、彼女にこれ以上の警戒の必要はないと決めさせたのだろう
そんな彼女の様子を見て、一刀と雛里もホッと胸を撫で下ろす
しかし……こちらが警戒の必要がないとわかってても、相手からし

たら別である

「あ、あの・・・その、知らない人は家に泊めちゃいけないって小さい頃からお母さんに言われてて」

（ああ、めっちゃくちや警戒されてるなあ）

（無理ありませんよ

乱世が終わったとはいえ、まだ山賊などの被害はありますから）

（ままならんなあ・・・）

彼女の警戒ももつともである

雛里が言ったとおり乱世が終わったとはいえ、まだ問題は山積みだ
その一つが、未だに続く賊の被害

かくいう雛里と一刀も、出会った直後に遭遇している

そんな状況下で、警戒するのは当然のことだ

しかし・・・このままでは、結局野宿である

そう考えると、ここで引くのも些か不味い気がした

「何とかして、彼女の警戒を解くことはできないかな？」

「うむ・・・そうだな

いつそのこと我が斧でこの扉を吹き飛ばさ……」

「あわわ、駄目ですよ!？」

「やってることが、賊そのものですよ!？」

「ひっ……や、やっぱり山賊さんなんですか!？」

「そして、バツチリ聞かれてる!？」

「華雄謝れ!超謝れ!!」

「ぬう、すまん……その、あれだ

今のは出来心というやつでな、そ、そうだ!

普段は斧など使わずに、これくらいの扉なら素手でも楽々吹き飛ばせるのだぞ!？」

「どんなアピール!？」

「なんで今このタイミングで、そんなこと言っちゃうの!？」

「わわわわ!

「ややややっぱり山賊さんだ!

「ぜ、絶対に家には入れませんから!!!」

「そして、警戒心が一気にマックスに!？」

ガバツと大げさに頭を抱え、一刀は叫んだ

「華雄も必死に誤解を解こうと頑張っているのだから、全てが逆効果である」

「どどどどどどする!？」

「いっそのこと、この扉をぶち破るか!？」

「華雄頼む」

頼むから、もう喋らないでくれ

しばらくの間、お口にチャックしててくれホント」

「あわわ、でもこれ以上は無駄な気がします

あまり怖がらせるのも悪いので、今日は潔く野宿をしましょうか？」

「あゝ、仕方ないか・・・このままだと、俺たち山賊さんになっちゃうし

ほら、行くぞ華雄」

「ああ、仕方ないな」

“ハア”という溜め息と共に、のそのそと歩き出す三人
不意に見上げた空、雨はパラパラと三人に降り注いでいた
しかし、そこまで酷くはない
これならば、大した問題でもないだろう
そう思い、一刀がフツと微笑んだ直後・・・

ザアアアアアアアアアアアアアアアア・・・

「俺たちは“怪しい者じゃないし、山賊でもない”
“君に危害を加えるつもりは一切ないよ”」

「あわわ

屋敷の扉をぶち壊した拳句、その家主を“縄で雁字搦めに縛った人が言っても説得力がありません”」

「うん、言っというてなんだけど“俺もそう思う”」

言って、彼は目の前に座る人物の姿に苦笑した

三人の目の前・・・そこに座る、縄で雁字搦めにされた拳句口に布を巻かれた一人の少女の姿を

彼女は首辺りまである茶色い髪をゆらゆらと揺らし、半べそをかきながらモゾモゾと縄から脱出しようと頑張っていた

そのため、つけていた片眼鏡はズレてしまい衣服も僅かに乱れている

「あゝ、ホント落ち着いてくれ

俺たちは山賊なんかじゃないんだ

ただ雨露をしのげる場所が欲しかっただけなんだ

だから、決して君から何かを奪うとかそういうのは・・・」

「一刀〱、こっちに食い物があるぞ〱〱〱！」

「いや、もうね・・・何で毎回こつも見事なタイミングで、やらかしてくれるのかな彼女は」

“もしかして俺、とんでもない人仲間にしちゃった？”と、頭をおさえ割と本気で悩む一刀

そんな彼の姿を見て、雛里は苦笑いを浮かべていた

「とりあえず、口に巻いた布だけでも外しませんか？」

「そうだな、これはちょっとやりすぎだよな

やったのは俺だけだよ・・・」

「ですね・・・ノリノリでしたね、一刀さん」

「ああ、嘘みたいだろ？」

俺・・・乱世を終わらせたって言われてる、天の御遣いなんだぜ？」

「あわわ、何でそこで泣きそうになってるんですか!？」

泣きそうになりながら、少女の口に巻かれた布を取り外す一刀

その瞬間、少女は泣きそうになりながらブンブンと首を横に振った

「お願いします、殺さないでください！

何でもします、何でもしますから!！」

「あ~~~~、うん

ものっそい誤解なんだ、それは

俺たちは旅人であって、賊なんかじゃ断じてない」

「嘘です！」

だって、どこからどう見ても“賊の手口”でしたよ!?”

「うぐう!?”

「は、反論できませんね・・・」

“どうしたら・・・”

そう考えていた雛里だったが、ふと何かを思いついたのか一刀の袖をクイツと引いた

それに気づき、彼は雛里の目線に合わせるようしゃがみ込んだ

「どうしたの？」

何か思いついたの、雛里ちゃん」

「はい、もう正直一刀さんに頼るしかないかと・・・」

言いながら、雛里は彼の着ている外衣を指さした

そのことが何を意味しているのか理解したのか、一刀は“だよなあ”と溜め息を吐きだす

「ま、仕方ないかあ」

言つて、彼は身に纏っていた外衣を脱いだ

その瞬間、目の前で泣きそうになっていた少女の表情が驚きに染まる

「え・・・？」

「その様子だと、噂か何かで俺のことを聞いたことがあるみたいだね」

“よかった”と、彼はひとまず安堵の息を吐く

それから自身の胸元に手を添え、フツと微笑んで見せた

「俺の名前は北郷一刀

まあ人によつては、俺のことを“天の御遣い”って呼ぶ人もいるけどね」

—————

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

“コトン”と、目の前に置かれた湯呑

それを見つめたまま、一刀は“この今の状況”に頭を悩ませていた

「ど、どうしてこうなったんだ？」

「あわわ……私に聞かれてもわかりませんよお」

そのまま、隣に座る雛里へと問いかける一刀

しかしかくいう雛里も、この状況についていけないでいた

「よいしょ、と」

そんな中、件の少女は何食わぬ顔で座った

一刀の隣に、体をピッタリとつけながら

「どうぞ、僕なんか淹れたお茶なんてそんなに美味しくないかも
しれませんが」

そ、それでもたっぷりと愛情が詰まっていますから!」

「あ、ああ・・・いただくよ」

言いながら、彼は自身の目の前に置かれた湯呑を手に取った
そして、その湯呑に書かれた文字を見つめ苦笑する

“御遣いLOVE”

「あ、あのさ・・・これって、いったいどこで手に入れたのかな?」

「あ、これは最近魏国で買ってきたんです」

「そっか・・・あはは

誰だ、こんなもん作ったの」

などと、乾いた笑いを零し・・・彼は部屋を見渡した
それに伴い、頬を冷や汗が伝う

“魏国名物、御遣い饅頭”

“手乗り御遣い君”

“等身大・一刀君人形”
e t c . e t c

そう・・・この部屋は彼、天の御遣いに関する物で埋め尽くされていたのだ

「僕、感激しちゃいました

まさか、本物の御遣い様とこうして一緒にお茶を飲めるなんて

「そ、そっか」

「その湯呑はもう洗えません・・・もう、毎日抱いて寝ます」

「げほっ、ごほっ!?!」

「一刀さん、しっかりしてください!」

咽た一刀の背中を、雛里は慌ててさする

そんな彼の様子に気づくことなく、隣に座る少女は話を続けていた

「三年前・・・御遣い様が天に帰ってしまったと聞いた時は、本当

に悲しかったです

でも、僕は信じてました！

御遣い様はきつと、この大陸に帰ってくるって！

そして今日、僕はまた御遣い様に出会うことが出来たんです！！」

「けほつ・・・ちよつと待って、“また”？」

「僕、御遣い様と一度実際にお話したことがあるんですよ？」

「う、ごめん・・・その、覚えてないんだ」

そう申し訳なさそうに謝る一刀

そんな彼に、彼女は“いえ、仕方ないことです”と笑った

「御遣い様は、いつも困っている人をお助けしていましたから

それこそ、僕のことなんて覚えてる暇もないくらいに・・・毎日、
沢山の御方を助けてきたんですから」

言って、彼女は照れたように微笑む

その笑顔に一瞬“ドキッ”としてしまう一刀

彼はそれから、フツと微笑みを浮かべる

「なら、君の名前を覚えてくれないかな？

そこまで想ってくれてる娘のことを何も知らないなんて、失礼だと思っしや」

その言葉に、“はい”と笑う少女
彼女はそれから、自身の胸に手をあて彼を見つめた

「僕の名前は“馬鈞”、字は“徳衡”と言います
よろしく願います、御遣い様」

「へへ、馬鈞ちゃんっていうのk・・・え？」

ピタリと、一刀の言葉が止まった

その様子を不思議そうに見つめる馬鈞と雛里だったが、彼はその視線に気づくことなく自身の額をおさえ何やら考えているようだやがて、ようやく自身の中で何かが纏まったのか彼は恐る恐るといった様子で口を開く

「もしかして馬鈞ちゃんってさ・・・こう、絡繰りとかの発明が得意だったりする？」

「え、わわっ!？」

どうして、ご存じなんですか!？」

彼女が慌てて言うが、それ以上に一刀は慌てている様子だった何やら興奮した様子で、彼女を見つめ目を輝かせているのだ

「馬鈞ちゃんの名前は、俺の世界でも有名だからね
“魏の大発明家”ってさ」

「そ、そんな大発明家なんて！
それ以前に、僕なんか魏国の臣下になれるはずないですし・・・」

「そんなことないって
きつと、すごい発明を沢山造ってきたんでしょ？
それに俺の世界では発明だけじゃなくって、“士気を12払ったら、
無敵の攻城兵になるんだから”！」

「ええ！？
攻城兵！！？」

「一刀が言ったことは、彼女には勿論通じない
そんなことすら気にならないほどに、彼は興奮していたのだ」

「ねえ、何か発明品を見せてよ」

「発明品、ですか
わ、わかりました・・・少し、待っていて下さいね」

「そう言うと、彼女は少し名残惜しそうに席を立った
一刀は、その背中を笑顔で見送ったのだ」

「……………」

「コレ……最近、作ったものなんですけど」

そうやって彼女が机の上に置いたのは、一体の小さな人形だった
ただし、ただの人形ではない
というのも……

「……これ、俺じゃね？」

「あわわ、小さい一刀さんです！」

「うむ、一刀にソックリだな」

3人の言葉の通りである

目の前に置かれた小さな人形

それは、一刀ソックリの人形だったのだ

「これは、ここをこうすれば……こうなるんです」

「おお！」

「あわわ!?!」

「む!?!」

その人形の背中についているゼンマイ
彼女はソレを回し、手を離す

その瞬間、人形はカタカタと歩き出したのだ

「へえ、良く出来てるね」

「えへへ・・・さ、さらに他の機能があるんですよ?」

「なに!?!」

動くだけではないのか!?!」

華雄の驚きの声に、馬鈞はコクンと頷く
そして、背中についていたボタンを押した
瞬間・・・

『おっばい、おっばい、おっばい』

「あわわ!?!」

凄いでしゅ、喋りました!?!」

—————

「と、まあ……こんな感じなのですが」

「うん、まあ……凄い発明ではあったよ
こう、複雑な気持ちだけど」

「あ、ありがとうございます！」

言って、彼女は頭を下げる
しかし、その表情はどこか暗い

「でも、周りの人は皆……僕のことを気持ち悪いって
村にいた頃から、ずっと言われてて」

“だから僕は、ここに越してきたんです”と、彼女は力なく笑う

「一人なら、何も言われないから……」

「馬鈞ちゃん……」

呟き、一刀は立ち上がる
それから、彼は馬鈞の体をそっと抱きしめたのだ

「っ、みみみ御遣い様!？」

「君は凄いよ

他の誰が何と言おうと、俺はそう信じてる

うん、君はもつと自信を持っていいと思うな」

「自信……」

か細い声で呟く馬鈞
その頭を優しく撫でながら、彼は頷いた

「うん、君ならもつともつと凄いものを作れるはずだよ
それこそ、この大陸の歴史を塗り返してしまうほどの凄い発明がさ」

「御遣い様……」

「だからさ、頑張って

俺は、君のこと応援してるよ」

「はい!

僕、頑張ります!！」

言って、彼女は一刀の体をギュツと抱き返す
その行動に一瞬頬を赤くさせ、一刀は“はは”と笑いを零した
しかし、その余裕も・・・

「御遣い様、僕・・・御遣い様のこと、大好きです」

この一言で、吹き飛んでしまった

「は・・・え、えええええ!!?」

「御遣い様は覚えていませんが、僕はあの日からずっと・・・御遣い様のことが好きでした」

『ねえ、君・・・どうかしたの?』

『わ、わわ・・・その、道に迷ってしまって・・・』

『そっか、なら俺に任せてよ』

『わわわっ!!?』

『あ、ごめん』

『ついいつものクセで手を・・・』

『いいいいいいえ、いいんです!!』

『僕、全然へっちゃらですから!!』

『あはは、ならよかったよ』

『それで、何処に行きたいの?』

『あの、その・・・ええつと』

「あの時の温かな手の感触を、僕は未だに覚えています
あの時の胸の高鳴りを、僕は未だに思い出せます
ホラ、今みたいな感じですよ」

「ぶっ!!?」

そう言って、彼女は一刀の手をとり自身の胸に当てる

瞬間、彼は思い切り噴き出した
その手を通じて、確かに彼女の胸の鼓動がはやいことを感じる
しかし・・・同時に何か、妙な違和感を彼は感じていた

(ん・・・?)

その違和感の正体が中々わからない

そんな中、彼のその手を握り締め馬鈞は上目使いのまま口を開いた

「どう、ですか？」

「どう・・・って、聞かれても」

馬鈞の言葉

彼は一度頬を軽く搔くと、少し困ったような表情を浮かべた

「俺・・・実はまだ、魏の皆のところに顔を出してないんだ
そんな状態のまま他の誰かとしてというのは・・・やっぱり、良くな
いかなって」

「僕じゃ、ダメなんですか？」

「ん・・・やっぱり俺、魏の皆のことが好きだからさ」

「そう、ですか・・・」

言って、“シユン”と頂垂れる馬鈞
だがすぐに、何か思いついたのか顔をあげた

「なら僕、魏に行きます！」

いっぱい発明して頑張つて、曹操様に認めてもらつて・・・そして
ら、そしたらまた御遣い様に告白します！！

僕、絶対に諦めませんから！

だって・・・御遣い様のこと、大好きだから！！」

「馬鈞ちゃん・・・」

その言葉に、彼は不覚にも胸をうたれた

まさか、こんなにも一途に想われていたとは想像もしていなかった
のだ

だからこそ、彼は微笑みを浮かべ馬鈞の頭を撫でたのだ

「ああ、わかった

待ってるよ・・・馬鈞ちゃん」

「はい！」

馬鈞は笑顔で頷いた

そんな彼女の姿に、彼はまた笑みを浮かべていた

「あはは・・・まあ君みたいな可愛い子に好きだって言われて、嫌な気分にはならないしね」

「そんな、可愛いなんて・・・僕、そんなこと初めて言われました」

「嘘？」

「こんな可愛いのに？」

「はい、いっつも村の皆にイジメられてたんです」

この一言に、一刀は“嘘だろ？”と驚いた
いったい何故？

しかしその疑問は、次の彼の一言で明らかになったのだ・・・

「男のクセに、女みたいな恰好しやがって”って・・・」

――――十――――

「「え・・・？」」

馬鈞が放った一言

その言葉に一刀はもちろん、絡繰り一刀君で遊んでいた華雄と雛里までもが固まってしまう

「う、ごめん馬鈞ちゃん

一つだけ、聞いてもいいかな？」

「はい、なんでしょう？」

「君って、その・・・“男”、なの？」

一刀の一言

それに対し、馬鈞は頬を赤く染め・・・

「はい」

笑顔のまま、頷いたのだった
その瞬間、華雄と雛里は一刀を見つめ……小さく呟く

「流石は魏の種馬」

「この場面でその一言は止めて
俺も今、物凄い動揺してるから
もう、膝の震えが止まらないから」

その言葉の通り、彼は顔こそ笑っているが膝は震えていた
しかも、冷や汗が凄まじいのだ
そんな彼の様子も知らずに、彼女……改め、“彼”は笑顔で言っ
たのだ

「待っていてくださいね、御遣い様
僕、絶対に御遣い様にもう一度この想いをお伝えしますから」

その笑顔が、あまりに綺麗で
その仕草が、あまりにも愛らしくて

「あ……あはは
ま………待ってるよ」

彼は乾いた笑みを浮かべたまま、こつ答えることしかできなかったのだった

“ああ、どうしてこつなつた？”

……続く！

第三章 女の子？男の子？・・・いいえ、男の娘です（後書き）

いかがだったでしょうか？

馬鈞は、今後も活躍しますw w

次回はいよいよ、運命の街“建業”へ

懐かしの再会へと、物語は進んでいきます

それでは、またお会いしましょうw

第四章 道に迷った!?!なら、もっと熱くなれよおおおお!.....! (前書)

はい、本当に久しぶりの更新ですww
お待たせいたしましたw

今回は、しっとり甘々・・・?

ついに、ある人物と再会することには?

それでは、お楽しみください

第四章 道に迷った!？なら、もっと熱くなれよおおおおお!.....!

「アカン・・・道に迷ってもうた」

ザアザアと揺れる木々の中

一人の女性が、立ち尽くしたまま溜め息を吐きだしていた

その表情には、若干の疲れが見えている

だがしかし、まだ苦笑を浮かべられるほどの余裕はあるようだ

「参ったなあ・・・確かにこっちに行けば、建業に着けるはずなのに」

懐から取り出した地図を見つめ、呟く彼女

だがその地図は、お世辞にも綺麗だと言えるような代物ではなかった
その為だろう

現在こうして森の中、彼女がこうして立ち尽くしてしまっているのは

「うーん、アカン・・・お手上げや」

地図を懐に仕舞い、再び溜め息を吐きだす彼女
しかし彼女はすぐ、フツと笑みを浮かべたのだ

「ま、愚図ってたってしゃあないしな

なるようになるやろっ」

そして、踏み出した一歩

その一歩は先ほどまでの雰囲気や嘘のように……とても軽く

とても、楽しげなものだった

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -

第四章 道に迷った!? なら、もっと熱くなれよおおおおお!!

!!!!

—————

「ん~~~~、良い天気だなあ」

言って、思い切り伸ばした背
その口から零れ出た声色が、今の彼の気分を物語っている
見つめた青も、どこか誇らしげだ

「昨日の雨がウソのようですね」

そんな彼・・・一刀の隣をトコトコと歩いていた雛里は、ニコリと
微笑みを浮かべる
彼の言葉に賛成ということだ
その隣、多くの荷物を軽々と運ぶ女性
華雄もまた、同意とばかりに頷いていた

「この分ならば、建業まではもちそうだな」

「はい、そうですね」

此処からなら、建業には明日の朝にも着けるでしょうし」

「あれ？」

もうそんな近くまで来てたんだね」

雛里の言葉に驚きつつも、一刀はすぐに“まあいい”と笑う
それから何故か、深い深い溜息を吐き出したのだ

「ホント、晴れてくれてよかったよ
もし今日も昨日くらいの大雨だったら、あの屋敷にもう一泊しなく
ちやいけなかったし」

「あ、あはは・・・」

一刀の言葉

その言葉に、雛里は乾いた笑みを漏らした

瞬間思い浮かんだのは・・・一人の少女、改め“男の娘”

あの屋敷の主、馬鈞である

彼女（彼）はあれから、一刀にべったりであった

おまけに、いざ寝ようとすると夜這いをかけてくる始末

相手は男だと知っていても、あの見た目である

『御遣い様、僕なんだか・・・体が、火照ってきちゃいましたあ』

息子『おっほお、元気だ〜〜（＾＾）』

『ええい、落ち着け愚息！！相手は男だぞ！！？』

まあ、今の一言でもわかるとおりである

それはもう、危つく新たな一步を踏み出してしまうそうになるくら
いだったのだ

そんなこんなで、一刀の精神力はギリギリまで削られることとなったのだ
故に今日が絶好の旅日和と知った時の一刀の顔といたら、容易に想像がつくであろう
ともあれ、善は急げ
彼らは残念がる馬鈞もよそに、屋敷を飛び出したのだった

『絶対・・・絶対、また会いに行きますからっ！！！！』

涙ぐみながら放った、馬鈞の言葉を背に・・・

「さつて、建業までもうひと踏ん張り
いっちょ、頑張りますかっ！！」

「はいっ！」

「うむ」

晴れ渡る空の下

その視線の先・・・まだ見ぬ、建業の地を見据えながら歩く三人

その足取りは、とても軽い

—————

「んで、道に迷っちゃいました・・・と」

“チャンチャン”と、随分と古典的な音楽をつけてしまいそうになるほど

彼らは、見事に道に迷っていた

「困りましたね・・・」

言いながら、地図と睨めっこをする雛里
その隣で華雄は、“ふむ”と腕を組んだまま声を漏らす

「恐らく、地図もあてにはならんだろう
何せ、我らは今森の中にいるのだから」

そう言つて、深く息を吐き出す華雄

一刀と雛里もそれに続き、深い溜息を吐いたのだった

現在、三人は迷子だ

それも・・・建業と一刀達との間にあつた“森”の中である

当初は小さな森だし、この森を抜ければ建業まではもう目と鼻の先だと意気込んでいたのだが

結果は、ご覧のとおりだった

見事な迷子の出来上がり、だ

「油断したなあ、もう

しかも、もうすぐ日が落ちちゃうし」

「仕方ありませんね

今日は、この森で野宿をしましょう」

「それがいい

夕闇の中動き回るのは、自殺行為もいいところだからな」

“そうと決まれば”と、三人はさっそく休むのにちょうどいい場所を見つけ野宿の準備をしていく

一番の問題である“火”に関しては、まったく問題はない

適当に集めた木の枝に、一刀が自身の持つ杖で火をつければいいのだ次に、食料であるが

こちらも、今のところ問題はなかった

以前に華雄と出会った村で貰ったものも残っていたし、新たに僅か

だが馬鈞からも貰っていたからだ
勿論、飲料水も確保してあった
それらを使い、雛里が簡単な料理を作っていく
その間、華雄と一刀は辺りに注意を払っていた
それからしばらくして・・・

「いったただつきま〜〜す」

彼らの前には、簡素ながらもひどく食欲をそそる料理が並んでいた
のだった
その料理を前に、一刀はニコニコと笑顔を浮かべたまま口に運んで
いく

「美味しい！」

「美味しいよ、さっすが雛里ちゃんっ！」

「あ、ありがとうございますゅ」

「うむ、確かに美味しいな」

一刀に続き、華雄もそれらの料理を口に運んでいく
そんな隣で、雛里は若干頬を赤く染めながらチビチビと食べていた

「うん、本当に美味しいよ
雛里ちゃんはきつと、良いお嫁さんになれるよ」

「あ、あわわ!!?」

「おおお嫁さんでしゅかつ!!!???」

「・・・?」

「どうしたの、そんな慌てて?」

彼にとっては、本当に何気ない一言だったのだろう

しかし、初心な彼女を動揺させるには十分だったのだ

そんなこと知らない彼は、不思議そうに首を傾げるばかり

華雄は、そんな彼の様子にクツと笑みを漏らし

雛里は、“にゃ、にゃんでもありません!!!”と首をブンブ
ンと横に振る

そんな中・・・

(不思議だなあ・・・)

(まったく、何とえばいいのか・・・)

出会ってから今までの時間は、まだ短いはずなのだが
それでも、まるで長い間共に過ごしてきたかのような心地だと
2人は・・・華雄と雛里は、そう思っていたのだった

—————

翌朝、木々の間から太陽の光が差し込む中
三人はそれぞれ準備を済ませ、前を見据えていた

「さつて、そんじゃ行きますか」

「はいっ！」

「ああ」

一刀の声に続き、三人は歩き出した
目指すは、地図上では目前にまで迫っているはずの建業
しかし、やはり現実は厳しい……！

「くっそ……なんか、方向を間違えてるような気がするな」

その声を漏らしたのは、一刀だった
一刀の言うとおりだと、華雄と雛里は頷く
もう昏も中ごろだというのに、いっこうに出口が見えてこないのだ

そこまで大きくない森のはずなのだが、三人は未だに抜け出せずにいた

「なんか、デジャブだな・・・」

思えば、一刀と雛里も出会った当初は迷子だったのだ
“ どうかやら俺は、森とは相性があまり良くないらしい ”
そう思い、一刀は苦笑を浮かべたまま溜め息を吐きだす

「しかし、進めば進むほど深くなっていくな」

「そうだな・・・これは本格的に、道を間違えてるっぽいな」

華雄の言つとおり

進めば進むほど、周りに生える草木は大きくなっていく
今では、その草木により前が見にくくなってしまっている
それを、一刀は杖で掻き分け進んでいく

「これは気を付けないとな・・・いざ進んでみて“ おっほう、よく見たら崖だったお（^^） ”とかだったら、シャレにならないよな」

「まったくだな、はは」

クツと、笑いあう二人
そんな二人に囲まれながら、雛里もクスクスと笑いを零していた
だがすぐに、その笑いは掻き消えてしまう

「っ……一刀さん、前っ!!!?」

「え?」

稀にみる不幸、とでもいうのだろうか
華雄と話していたせいかわ、後ろを向きながら歩いていた彼に振りか
かった不幸だったのだろうか

「あ、あれ……」

“フワリ”と、一瞬軽くなったかのような錯覚
次いで、空を切る自身の足

「まさか……」

などと、そう思った時にはすでに遅い
彼の体は、みごとに宙を浮いていたのだから

そう……もうわかりだろう

彼は自分でおっ立てたフラグを、みごとに回収したのだ

“ 森を抜ければその先は・・・見たこともない崖でした。ブスリ
by北郷一刀 ”

「う、ウソだ!!」

嘘だと言ってよ、バー……ニ………
|………|

「一刀さ………ん!!………?」

「一刀おおおおおおお!!………?」

叫び、落下していく一刀

慌てて駆け寄るが、間に合わない

顔を真っ青にしたまま、2人が見下ろす先

同じよう、広がる森が見えた

恐らくは、この下の木々に向い落ちていったのだろう

「ひ、雛里!!」

急いで下に降りれる道を見つけ、あそこまで向かっぞ!!!!!!!!」

「ひゃいつ!!!!!!!!」

キツと表情を強張らせ、駆け出していく2人
その胸にある想いは、ただ一つ

一刀の無事を祈ることのみだった・・・

—————
—————

「オー、マイガッド・・・」

見える景色は、全て逆だった

自分が知らないうちに、世界はきっとひっくり返ってしまったのだ
ろっ

そんなアホなことを考えられるほどには、落ち着けたらしい
そう思い一刀は、木々に引っかかり逆さまのままの自身の姿に苦笑
していた

「いや、危機一髪ってやつか？」

こうして引っ掛かってなかったら、死んでたよな確実に」

頭とか体、強打して

こうして助かったのも、日頃の行いが良かったからなのだろうか？

“運が良かった”などは、よく言ったものである

「そもそも運が良かったら、崖から落下なんてしねーっすよね」

“ああん？ だらしねえな”と、どこかのガチでムチなパンツ一丁
の兄貴に言われたような錯覚を胸に
彼は手間取りながらも、なんとか無事に現在の状態から脱出するこ
とに成功する

「さつてと・・・ここは何処だろうな」

外衣についた葉っぱを落とし、辺りを見渡してみる

多少の違いはあれど、どうやら同じような森の中

見上げてみると、先ほど自分が落下したであろう崖が木々の間から
確認できた

「そんな、高くはなかった・・・のか？」

さっきの衝撃のせいだろうか

感覚が鈍っているのかもしれない

確かに一刀自身がイメージしていた崖よりもはるかに低い、それでも普通なら死んでいたレベルである

一刀は本当に、運が良かったのだ

「何とかして、さっきの場所に戻る方法を探さないとないやそれとも、こっから動かない方がいいのか？」

恐らく、あの2人はここに来る為の道を探しているだろう
そう思ったのだ

しかし・・・

「駄目だ・・・やっぱりジツとしてるのは性に合わない」

言って、溜め息を一つ

とにかく、辺りを少し見て回って「よし」と思ったのだろう
彼はその場から、ゆっくりと歩き出す

その背後を・・・

「少し見て回るくらいはしないとな・・・」

「ガルル・・・」

「お、君もそう思うか？」

茶色く、巨大な影がついて歩いていることに気付かずに・・・

「・・・“ガルル”？」

“ピタリ”と、彼は踏み出した足を止める

それから、ゆっくりと振り向いた先

彼は・・・見た

「おいおいおい・・・マジっすか？」

茶色く、巨大な影

日本に住んでいた頃は“熊”と、そう呼んでいた生き物が
自身の背後にいたのだ・・・

「グルル・・・」

「あ、あはは・・・どくも」

言っではみたが、伝わるはずはない
彼の視線の先、熊は一刀を睨み荒い息を吐くばかりだ
それはまさに・・・獲物を狙う目

「それじゃ、俺はそろそろ行くからっ・・・」

「ガウツ!!!!!!」

「うつひゃあ!!?」

やっぱりか、コンチクショーーーー!!!!!!?????」

思い切り振るわれる腕を何とか躲し、一刀は一目散に駆け出した
“逃げるんじゃない!戦略的撤退だ!!”と、心の中叫びながら
無論、それを簡単に許す熊ではない
一度見つけた獲物を逃がすまいと、一刀の後ろから凄まじい速度で
追ってきたのだ

「ガアアアアアアア!!!!!!」

「あーーーー、不幸だーーーー!!!!!!」

なんなの!?

前は虎で、今回は熊!!!?

俺って前世で、動物でも虐待してたの!!!?

今まさに、その罰を受けてるの!!!?

「グルア!!!」

「おっほう!!!?」

風を切る音に恐怖しながら、駆けて行く一刀

逃げ足ならば自信があると思っていたのだが、熊は彼の予想以上に早かった

このままでは、先にこちらの体力が尽きてしまう

「いったい、どうしたら・・・ん?」

ふと、目に入った光景に・・・彼は、一瞬言葉を失ってしまふ

彼の走っていく先に、何やらボロイ外衣を身に纏う人間の姿があったのだ

“俺たち以外にも、この森の中に人がいたのか”と思ったのは一瞬
彼はすぐさま思考を切り換え、駆けながらその人物に向い叫んだ

「危ないぞ、熊だあああああ!!!」

「っ!!!!!!?」

瞬間、その視界の先の人物はハツと此方を見つめてくる

フードを被っている為顔を窺えないが、何やら背中に背負っている長い“棒のようなもの”に手をやっている

(なんか、怪しいな・・・って、俺も人のこと言えないじゃんか)

クツと笑い、彼は今一度フードを深くかぶり直す

それから杖を握り締める手に力を込め、素早く後ろへと振り返った

このままでは、あの人物も巻き込んでしまう

そう思ったからだ

故に、彼がとる行動は唯一つだ

「燃えろっ！！！！！！」

振り返り、切っ先を熊へと向け叫ぶのと同時に・・・杖の先端から、勢いよく火が飛び出していく
その炎が熊に襲い掛かり、激しく燃え上がった

「グガガガアアアアアアアア！！！！？」

その熱に、堪らず苦悶の声をあげる熊
それを見て、一刀はグツと拳を握り締める

「やったか？」

「いや、まだや・・・」

ふと、彼の横を風が吹き抜けていく
それが、先ほどの人物だと気付くころには・・・

「これで、終いや」

先ほどまで大声をあげていた熊が、真つ二つに切り裂かれていたのだ
目の前の人物が肩に担ぐ“刃”によって

「なっ・・・」

驚き、声をあげたのは一刀だ

しかし、“違う”
彼が驚いたのは、熊が一刀のもとに切り倒されたことではない
目の前の人物
その人物が肩に担ぐ“刃”を見つめ、驚いていたのだ

“飛龍偃月刀”

「ん・・・なんや？
ウチの顔に、なんかついとるか？」

言いながら、被っていたフードを脱ぐ“彼女”
そうして露わになった素顔を、やはり彼は“知っていた”

「し・・・あ？
「ん・・・？」

流れる、紫色の髪
それが懐かしく・・・愛おしかった

「霞」・・・」

「な・・・アンタ、なんでウチの真名を!!!?」

“霞”

その名を呟き、彼は一步前に踏み出す

それに対し、彼女は警戒したのか偃月刀を構えていた
無理もない

いきなり、真名を呼ばれたのだから

しかしその警戒も、すぐに無駄になることだろう

何故なら・・・

「霞・・・俺だよ」

「あ・・・」

彼女の目の前

そこに立つ男を、彼女は知っているのだから

「一刀」・・・?」

フードをとり、露わになった素顔
その素顔を、彼女もまた知っていた

“張遼、真名を霞”

“北郷一刀、またの名を天の御遣い”

その顔を、忘れるはずがない
彼女は・・・“霞”は、静かに涙を流していた
その顔を、知らないはずがない
霞は、駆け出していた

「霞っ!!」

「一刀っ!!」

三年分の想いを込め、駆けて行く2人

“会いたかった”

そんな言葉など、言わなくともわかっているから
だから二人は、互いの名を叫び

唯々、がむしゃらに駆け出していたのだ

そして・・・その想いは、ついに“一つ”になったのだ

「夢や・・・ないんよね？」

愛しい人の胸の中、彼女は小さく呟いた
その彼女の呟きに、彼はニツと微笑んだ

「当たり前だろ？
俺はちゃんと・・・此处にいるよ」

その言葉に、霞は涙ぐみながら“そか”と笑う
それから、自身の顔を彼の胸に押し付ける

「そういえば、さ・・・霞は、どうしてここに？」

「ウチ、待ったで・・・ずっと、待った
けど、我慢できへんかった
せやからウチ、魏から飛出してん
一刀を、探すために」

「ああ、なんか・・・霞らしいよ」

言って、苦笑する

そんな彼の顔を見つめ、霞は頬を微かに膨らませる

「切欠は、一刀やで？」

「俺？」

「せや・・・一年前、ウチ見たんやから

空から、白い流星が降ってくるのを

一刀、一年前にはこっちの世界に来とったんやろ？」

「うっ!？」

“見られてたのか”と、一刀は表情を曇らせる

が、そんな一刀の心中に気付いたのか・・・霞は、呆れたように溜め息を吐き出した

「ま・・・安心せえ

魏の中じゃ、見たのはたぶんウチだけやから

手紙にも、自分探しの旅って書いたしな

華琳には、バレとらんよ」

「なら、いいんだけどさ」

ポリポリと頬をかき、安堵の息を吐き出す一刀
その胸の中、彼女は何やら不安げな表情を浮かべる

「なあ、一刀

一刀は、ウチらのこと嫌いになつたん？」

「なっ……そんなわけないだろ!？」

「だったら……だったら何で、早う帰ってこんかつたの？
なんで一年間の間、魏の皆んとこに顔を出してやらんかつたん？」

この言葉に、思わず言葉を失ってしまふ一刀

そんな一刀を追い詰める様、霞は言葉を続けていく

「最初は華琳の手紙に変なこと書いてまったから、華琳が怒ってる
思つて帰れんのかなつて思つたけど

それは、絶対に無いはずや

一刀ならきつと、それでもウチらんとこ帰ってくるはずやつて
ウチは、そうおもつとる」

「霞……」

「それに……自惚れなんかやなく、一刀だつてわかつとるやろ？
華琳がそんなことで、怒るわけないやん

今帰つたらきつと、一刀に泣いて抱き着くはずやで

それで、それからその手紙のことでちょいちょいからかつてくるん
ちやうかな」

“違うか？”と、霞の言葉

それに、一刀は静かに微笑んで見せた

「そうだね・・・きつと、そうだ

華琳ならきつと、そうするだろうね

そんなことで首を刎ねるなんて、絶対にしないよ」

「せやったら・・・」

「けど、ダメなんだ

まだ、俺は帰れないよ」

「っ！」

言葉を失う霞もよそに、彼は自分の胸に手をあてる
それから、フツと笑みを浮かべ言葉を紡いでいく

「俺は、”ならなくちゃいけないんだ”・・・だからこそ、名乗っ
たのだから

この、“司馬懿仲達”の名を」

「かず、と?」

「いったい、どういうことなのか?」

「彼女が、そうたずねようとした直後だった」

「ハアアアアアアア!?!?!?!」

「っ、うおう!?!?!?!?」

彼女めがけ、刃が振るわれたのは
彼女はそれを咄嗟に、自身のもつ偃月刀で受け止めた

「な、なんやいきなり!?!?!?」

「一刀、大丈夫だったか!?!?」

「一刀さん!?!」

突如、襲い掛かった刃

次いで、一刀の側に駆け寄る二つの影

その姿を見て、一刀は焦ったように声をあげる

「華雄！―雛里ちゃん！？」

「いったい、どうやってここに！！？」

「それは、その・・・あまり思い出したくないのですが、“落ちてきたんです”」

「・・・は？」

「今言ったとおりです」

「落ちてきたんです、あそこから」

心なしかげっそりとしたような雛里に言われるがまま見つめる先見上げれば、自分が落ちた時と同じような景色が見える

「えっと・・・詳しく聞いてもいいかな」

「詳しくも何も、下に行くための道が中々見つからなくて
そしたら華雄さんがいきなり、“そうだ、落ちたらいいのか！”
とか叫びだして」

「あ、あの、華雄さん？」

「いったいどうして、そんな結論に？」

「俺の国だとソレ、“そうだ、落ちて楽になろう”って言うてるよう
なもんだよ？」

「いえ、この国でもそのまんまの意味ですけど」

“単純明快”にも、限度がある
道がないから、落ちればいいなど
それはもう、どうみても自殺志願者だ

「なに、私は武人だ

武人たる者、落下中上手く木の枝を掴むことくらい造作もないことだ
・・・結局折れて、思い切り地面に叩きつけられたがな」

「うおい!!?」

「ヤバいじゃないか!!」

「大丈夫だ

離りを庇いながら、しっかりと受け身をとったからな（ドヤァ・・・
）」

211

などと、素晴らしいドヤ顔で言われても信じられない
彼女の中では“受け身をとる 問題解決”となっているのだろうか？

「それよりも一刀・・・今は目の前の賊を何とかせねばなるまい」

「あ、華雄彼女は・・・」

「華雄つ、アンタ華雄か!!!?」

「な、貴様は・・・張遼!!!?」

驚き、声をあげる2人

その光景に思わず吹き出す一刀の横で、雛里もまた驚いていた

「霞さん!？」

「はあ!!？」

なんで雛里までおんねん!!？」

ギャーギャーと、騒ぐ三人のすがたをよそに

一刀は唯一人、安堵したように溜め息を吐きだしていた・・・

—————
+—————

「なるほど、なあ・・・」

木の幹に背を預け、霞は静かに呟いた

その目の前には、一刀たち三人がそれぞれ座っていた

あれから、すぐさま休憩できるような場所を見つけた四人

それからすぐ、霞に色々と話したのだ

何故、雛里と華雄が一緒にいるのか

雛里の考えた策について

自分達が今、建業に向っていることなど

それらを全て、彼女に話したのだ

「なんや、あれやね・・・面白そうなこと、しとるやん」

「まあね」

言って、二人は笑う

そんな中、霞は真剣な表情を浮かべ口をひらいた

「それが・・・“さっきの話”に、関係しとるんやね」

「・・・まあ、ね」

“そか”と、一言

そんな彼女に向い、一刀は苦笑いを浮かべ話しはじめる

「それで、霞はどうするんだ？」

俺を・・・魏に、連れて帰るつもりか？」

「せんよ、そんなこと」

一刀の言葉に、キツパリとそう応える霞
おまけに、“何を、アホなこといつとるん？”などと言う始末だ
そのあまりのあっけなさに、華雄と雛里はポカンとしていた
無論、一刀でもある

「いや、その……いいのか？」

「じゃあ逆に聞くけど、一刀はウチと一緒に帰ってくれるんか？」

「それは、その……」

「ホラ、な

そんなら、意味ないやん

それにウチ、別に一刀を魏につれて帰る為に旅をしとったわけぢや
うし」

「む？

ならば、いったい何故……」

華雄の言葉

その言葉の最中、霞はニツと笑顔を浮かべ言ったのだ

「ウチは……誰よりも先に、一刀に会いたかったただけやもん」

その一言に、一瞬言葉を失う一刀
だがすぐさま、その頬を真っ赤にしたまま口をひらく

「霞、その・・・」

「それに、ウチもこれから一刀の旅についてくしな」

「・・・え？」

「「は・・・？」」

再び、言葉を失う一刀
いや今回は、雛里と華雄もセツトで黙ってしまった
そんな中、唯一人明るく笑う霞

「もう二度と、ウチらの前から消えんよう見張りが必要やる？
それに、一刀と一緒になら・・・きつと、なんだって楽しいもん」

「霞・・・」

呟き、見つめる先

華雄と雛里は、クスリと笑い頷いている

それを見て、一刀もまた笑っていた

「ああ、そうだな・・・こっちから、お願いしたいくらいだ」

「お、そんなら・・・？」

「ああ、勿論だ」

立ち上がり、一刀は彼女に歩み寄る

そして真っ直ぐに彼女を見据えると、優しげに微笑んで見せた

「もう二度と、俺が皆を泣かせてしまわない様・・・俺の傍で、見張っていてくれないか？」

霞は、気付いていない

自分が今、大粒の涙を流していることに

そのことに気付かないほどに・・・彼女は、喜んでいた

ずっと、求めていたのだから

その、太陽のような笑顔も

その、温かな空気も

どれも・・・ずっと、自分が探していたモノだったのだ

(やっぱり、かわらへん・・・なんや、色々隠しとるみたいやけど
それでも、やっぱり一刀は一刀や)

「任せとき

もし天が無理やり一刀を連れ帰ろうとしても、ウチが止めたる
そんで、この旅が終わったら・・・絶対に、また華琳達に会わせ
るわ」

「ああ、頼むよ」

笑い、自然と近づいていく2人
重なる・・・二人の唇

三年間の、長い別れを経て
今再び・・・繋がった絆が、確かにそこにはあった

「しかし、ちょうどよかったよ」

「しかし、ちょうどよかったわ」

まあ、しかし・・・

「実は、道に迷っちゃってさ・・・」

「実は、道に迷ってしもうて・・・」

その道のりは、まだまだ障害だらけのようだが・・・

「「「・・・え？」」」

・・・続く

第四章 道に迷った!?!なら、もっと熱くなれよおおおお!?!?!?!?!(後書

さて、お久しぶりのシロタビ
いかがだったでしょうか？

次回はいよいよ、建業編に突入ですw
新たな出会いも、待っています

それでは、またお会いしましょう

第五章 建業到着！！まずはゆっくり羽を伸ばすぜ！！ 悪いなの 太、このだ

はは、自分でも予想していなかった

こんな早く、この作品の続きが出来るなんて

それでは、お楽しみくださいw

第五章 建業到着！！まずはゆっくり羽を伸ばすぜ！！〜悪いなの太、このだ

「あゝ・・・退屈う」

サンサンと、照り付ける太陽の光

その光りが窓から差し込む中、一人の女性は大きな溜め息と共にそ
う吐き出す

目の前には、天高く積まれた書簡の山

「まさか留守番だけじゃなく、こんなバカみたいな量の仕事任せ
られるなんて・・・はあ」

“失敗したなあ”と、また溜め息

彼女の名前は孫策、真名を雪蓮

“元”呉の国王だ

今はその家督を妹の孫権、真名を蓮華に譲っていた

それでも、そう簡単に休めるかと言えば・・・否だった

未だ人材不足の呉において、働けるのならば元国王だろうが今の王
である蓮華は容赦無く働かせるのだ

ある意味、彼女を王にしたのは正解だっただろう

皆が皆、この新たな王に期待しているのだ

もつとも・・・これで心置きなく休めると思っていた雪蓮にとつて
は、大きな誤算だったのだが

「あゝ、なぐんで留守番するなんて言っちゃったのかしら」

現在呉の重臣たちは皆、三国会議の開催地である魏に赴いている
本当なら雪蓮も行かなければならないのだが、出発当日になって彼
女は“留守番がいい！”と玉座の間でごねたのだ

理由はない

ただ何となく・・・彼女の“勘”というのが、働いたのだろうか
何故か彼女は、“此処にいたほうがいい”と思ったのだ

故に、彼女は留守番をすることになったのだが・・・

「あー、もう!!」

何にも起きやしないじゃない、ウガーーーー!!!!!!」

この結果である

留守番をはじめ、幾日か経過した現在

彼女の周りでは変わった出来事が起こることもなく、いつもどおりの日々が続いていたのだ

「やっぱり・・・最近、調子悪いなあ」

“勘”

昔は、これに従えば大抵は上手くいったのだが

最近では、まったく上手くいかなくなっていました

「ほんと・・・どうしんだろ？」

思えば一年前、あの白い流れ星を見た時からだったろうか
自分の勘が、ことごとく外れるようになったのは

「参ったわねえ・・・」

眩き、苦笑する

しかしすぐに、彼女は自身の頬を叩き笑った

「あゝ、もつっ！

最近、何でもかんでも上手くいかないからって暗くなり過ぎよね！
「！

“よし”と、気合一喝

彼女は、先ほどまでの暗さが嘘のような笑顔を浮かべ言ったのだ

「よっし、明日はちょっと息抜きに散歩でもしましょうっ！
しばらくお城に籠りっぱなしだったし！

たまには息抜きも必要よね」

息抜きの散歩

そう考え付いたのは、本当に偶々だった

ここ最近の自身の不調を何とかしようと、そう思っただけの提案だった

それが、彼女にとって“大きな意味を持つ”ことになるのだが
そのことに彼女はまだ、気付いていなかった・・・

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -

第五章 建業到着！！まずはゆっくり羽を伸ばすぜ！？〜悪いなの

太、このゲーム・・・四人用なんだ

十一

「……建業に……キター……」

建業の街並みに響き渡る、元気の良い掛け声

その主である四人は、周りの目など一切気にした様子もなく
ただ無我夢中に、その街並みに感動しそう叫んだのだ

事情を知らない人が見たのならば、“何なのコイツら？”と思うだ
ろう

しかしまあ、今回は許してやってほしい

彼らは再会の後、丸一日かけてようやくあの森から抜けたのだから
しかもまったく見当違いの方向から、だ

おかげで最初に森を迂回して建業へと行く道のりよりも、多く時間
がかかってしまったのだ

その結果……こうしてようやく建業に着くころには、もう太陽も
寝る準備を始める時間帯だった

もう二度と近道などすまいと、心の中で誓ったことは言つまでもない

ともあれ、ようやくたどり着いた建業

ハッキリ言つて、四人は……特に、一刀は浮かれていた

「やっと……やっとついたよ、離り……ん……」

「あ、あわわ……!?!」

ご覧のとおり
クタクタのはずの体で雛里を抱き上げ、その場でグルグルと回るほどだ

「むっ……」

その様子を、若干面白くないといった表情で見つめる者が一名
前回の森で新たにこのパーティーに加わった仲間
張遼こと霞だ

「どうしたのだ、霞？」

「ん〜にゃ、何でもない」

言いつつも、相変わらず不機嫌そうな表情だ
そのことを不思議に思いつつも、華雄は“そうか”と苦笑する
それよりもまず、早く宿に行って休みたかったからだ
流石の彼女も、道に迷った拳句の強行軍には応えたようだ

「一刀、雛里
遊んでないで、ひとまず宿を探そう」

「おっと……そうだな
久しぶりに、寝台に沈み込みたいしなつとお！？」

言われ、笑う一刀
だがその瞬間、グラリと危うく倒れそうになってしまう
その直後、華雄は慌ててその体を支えたのだ

「おい一刀、大丈夫か？」

「ああ、サンキュ華雄

何か、思ったよりも疲れてたみたい」

「フフ、なら尚更早く宿を見つけないければな」

「そうしようか」

顔を見合わせ笑う二人
そんな二人を見つめ・・・

「むっ・・・！」

霞は、さらにその表情を険しくさせていた
もっとも・・・一刀は、そのことに未だ気づいていないのだが

「ああもう、早う宿見つけんでっ！」

「あ、待てよ霞ッ！」

そのことに気付かないまま、“何故か”不機嫌な霞に手を引かれていく一刀

華雄はまたも不思議そうに首を傾げるが、ひとまずはとその後をついていく

雛里もまた、テチテチとその後についていくのだった

――――

「で、今後のことなんだけど・・・」

足早に見つけた宿の一室

その中で、寝台に腰かけた一刀がおもむろに口を開く

「しばらくの間、此処に留まるうかと思うんだ」

一刀の言葉

それに、雛里は“わかりました”と頷いた

華雄、霞も同様に頷く

「ま、ちよつとした休憩つていうかさ
折角の旅なんだし、街に来てすぐさよならつて何か勿体ないしね
ちよつとの間、羽を伸ばすでしょう」

「賛成だな

思えば私も一刀に会うまでは、その街その街の景色を楽しむ余裕す
らなかつたからな

この機会に、少し観光と洒落込ませてもらおう」

華雄は、そう言ってフツと笑う

その隣で、霞は僅かに表情を歪めた

「そついや、ウチきいとらんかつたな

華雄は、あれからどうしとつたんか」

「ああ・・・なら、今晚でも一緒に酒でも飲み語らうか？
久しぶりの再会を祝して、な」

「あゝ、そつやねえ・・・」

言いながら彼女が見つめるのは、寝台に腰をかける一刀だった
彼女のその意味ありげな視線に、一刀はしばし考えんだあと・・・

「いいんじゃないかな？

一緒に行つてきなよ

久しぶりの再開だし、積もる話もあるだろうしね」

笑顔を浮かべ、こう言ったのだ

ただその笑顔に反し、霞はというと・・・恐ろしい“怒気”を孕んだ表情を浮かべていたのだが

その迫力に、“あわわ”という悲鳴が聞こえていた

「あゝ、もう!!」

わかった、そうするわ!!

ホラ、華雄いくでっ!!!!」

「あ、コラ!？」

ひ、引っ張るんじゃない!!」

そして、大声でそう言いながら部屋を出ていく霞

部屋を出る間際、小さく“何年経ってもかわらんのか、あの鈍感一
刀は!!”と吐き捨てていきながら

そうして、残されたのは一刀と雛里

2人はしばらくの間ポカンと呆気にとられていたが、やがて我に帰った一刀が小さく呟く

「俺・・・なんかしたかな？」

「一刀さん・・・今は流石に、一刀さんが悪いですよ」

“俺？”と、自分を指さし呟く一刀

そんな彼の姿に、雛里は大きな溜め息を吐きだしていたそうな

—————

「ああ、もう！！

本っ当に信じられへん！！

三年やで！？

三年ぶりに会ったちゆうんに、なんやあの態度！！！！」

“ダンツ！”と、勢いの良い音が響く

それが机に思い切り叩きつけられた杯による音だと気付く者達は皆、その音の発信源にはなるべく近づきまいと心の中思ったことだろう。それほどまでに、“彼女”は荒れていた

無論、霞のことである

もつとも・・・そんな彼女と席を共にする彼女には、そんな選択肢はないのだが

故に彼女、華雄は先ほどからそんな彼女の話を聞き苦笑を浮かべて

いたのだ

「普通、ちやうやろ!!!?」

三年ぶりに愛する男女が再会したんやったら、やることなんて唯一つやん!!!???

何をするかって!!!?

ナニに決まっとるやん!!!

ヤルしかないやろ!!!???.なあ!!!???

「ブハっ!!!?」

おま、少し声を下げろ!!!

そして落ち着いてくれ、頼むから!!!!!!」

顔を真っ赤にし、勢いよく席から立ち上がる華雄

そんな彼女の姿に、霞は先ほどまでの不機嫌はどこへやら
大声をあげ、笑いだしたのだ

「あっはははははは!!!」

なんや華雄、意外やなあ!!!

てつきりそういう知識とかには疎いかと思つてたんに、案外知つとるやんか!!!!!!」

“あはははは”と、愉快そうに笑う霞

一方華雄はというと、“しまった”とばかりにさらに顔を真っ赤にさせている

「あゝ、おもしろい

ホンマ、笑わせてもらったわ」

「ああ、それはよかったよ」

言って、勢いよく酒を飲み干す華雄

今度は、華雄の機嫌が悪くなる

その様子に、霞はクツと小さく笑いを零していた

「なんや・・・元気そうで、よかったわ
ずっと、心配やったからな」

「そうか・・・お前も、元気そうで何よりだ」

“もつとも”と、華雄は杯に酒を注ぎながら呟く

「お前の場合、魏の將軍として名を馳せていたからな
そこまで心配はしていなかったが」

「しっしっし、まあな」

“流石はウチやる？”と、笑う霞

それに対し、華雄は“ああ”と笑った
しかし、その表情はすぐに崩れさったのだ

「すまなかった・・・霞
あ のとき、私が愚かな行動をとったせいで
董卓様は・・・」

ふいに、出た言葉
かすれ、震える声
その瞳から、大粒の涙を流し
彼女・・・華雄は、泣いていた

「本当に、すまなかった・・・」

「華雄・・・」

泣きながら、頭を下げる彼女の姿に
霞は、微かに表情を歪めた後・・・

「今は桃香・・・劉備のところで、侍女として生活しとるわ
流石に、董卓っちゅう名前は捨てなアカンかったけど
勿論、詠も一緒やで」

霞の言葉

華雄はしばし呆然とした後、ゆっくりと口を開く

「董卓様が・・・生きている」

「ああ、生きとるよ」

「劉備が、助けてくれたのか？」

「んゝ、結果的にそうなたんやけど
厳密には、ちよい違うかな」

言って、また笑う霞

彼女は杯に新たな酒を注ぐと、ニツと笑いながら彼女を見つめ言った

「あの混乱の最中・・・月達を見つけてくれたんは、一刀や」

「っ!!」

再び、驚き言葉を失う華雄
そんな彼女を面白そうに見つめ、霞は言葉を紡いでいく

「誰よりも早く、月と詠を見つけて保護してな
それで安全なところに連れて行こうとして、桃香達のところに預けたん
や」

「そう・・・だったのか」

呟き、微かに震える自身の体を抱き締める
その瞳から流れる涙は、先ほどまでとは違う

「よかった・・・董卓様」

生きていた
自身が敬愛する主君が
己の愚かな行いによって死んだと思っていた少女が生きていた
そして・・・

「やはり・・・私は、間違っていなかったんだな」

あの日

失意の自分が見つけた、あの白き流れ星

その光りに導かれ出会った青年に感じた、あの温かな空気
自身が敬愛する主とよく似た空気を身に纏うその青年との出会いを
彼女は、唯々……喜んでいたので

「……乾杯、しよか？」

「ああ、そうだな」

スツと、近づいていくのは……二つの杯

「そんじゃま、再会を祝して……」

「それから、そうだな……新たな旅立ちに、でいいかな？」

「ええな、ソレ」

“チンツ”と小気味の良い音をたて、合わさった二つの杯
2人の夜は、まだ長くなりそうだ……

—————

「あ、あわわゝ・・・」

所かわって、ここは宿の一刀の部屋

その中で、雛里は驚いたように声をあげていた

その原因は、彼の普段着ている外衣や持っていた荷袋から出てきた荷物だった

「そんな驚くものかなあ・・・」

「驚きますよ

どれも、見たことないものですし」

雛里の言つとおりだ

此処に有るモノは、どれも彼が現代から一緒に持ってきた物なのだから

その中から一個を手に取り、彼はフツと笑顔を浮かべる

「これくらいなら、真桜の工房とかで見れるんじゃないかな」

「私は、あまり工房には行かなかったので

あ、朱里ちゃん・・・孔明ちゃんは、よく行ってましたけど」

「孔明ちゃんが？」

「はい・・・なんでしたっけ
“お菊なんとか”っていう発明を見せてもらいに・・・って、一刀
さん？

どうしたんですか？

そんなに、前かがみになつて」

「いや、気にしないで

ちよつと、息子が“サムズアップ（^ ^）b”してるだけだから
すぐに大人しくなる筈だから」

「は、はあ・・・」

“いったい何故？”と、呟き前かがみになる一刀
彼はその後、しばらくして荷物の整理を始めた

「色々ありますね」

「うん、まあ・・・こっちに帰るって決めた日から、色々作つたか
らね」

“使えない物も、多いかもしれないけど”と、彼は笑う
そんな彼の笑顔に、雛里は微かな胸の高鳴りを感じていた

「そういえば、雛里ちゃん？」

「っ、ひゃい！」

「どうかしたの？」

急にこの部屋に来たから、何か話があるのかと思ってただけよ」

一刀の言葉

雛里は思い出したかのように、大きく頷いていた
それから、彼に向い聞こえる様言葉を紡いでいく

「その、明日なんですけど」

ちよつと、お城の方に行ってみようと思っんです」

「お城に……？」

“はい”と、一言

「私もしばらく蜀にいなかったんで、色々と情報が足りないの
その……旅をするうえで、やっぱり情報は大切ですから
私なら、呉の皆さまとも親交がありますし
色々、教えてもらえるはずなので」

「なるほどね……むしろ、こっちからお願いしたいくらいだよ」

“頼めるかな？”と、一刀

それに対し雛里は嬉しそうに笑い、「はい」と大きく頷いたのだ
った

—————

翌日

温かな太陽の光りが、窓から差し込む中

「頭・・・いたい」

華雄と霞は、絶賛二日酔い中だった

「2人とも、大丈夫か？」

「アカン・・・今動くと、確実に吐く」

一刀の言葉

力なく返事をする霞の聲が、これが“冗談ではない”ということを物語っていた

「す、すまん一刀・・・ちょっと盛り上がって、気付いた時には遅かったのだ

何とか宿には帰ってこれたのだが・・・このザマだ」

「ああ、いいよ無理して喋らなくて
なんか、今にも吐きそうじゃないか
今日はゆっくり休むといいよ
どうせ、数日は滞在する予定なんだし」

「すまない・・・うぷっ」

「ありがとな、一刀

お礼にキスしたるか・・・うぷっ」

「・・・オチが見えたから、絶対に止めてくれよ」

“いいから、今日は寝てな”と、一刀は笑う
それから、雛里を伴って部屋から出たのだった

「さて、雛里ちゃんは今からお城に行くんだよね？」

「はい

「一刀さんは？」

「俺は、ちょっと街を見て回ろうかなって色々、欲しいものもあるし」

“ そうですか ” と、雛里は笑う

彼女はそれから “ 夕方までには、戻りますから ” と言って、城に向い歩き出した

残された一刀はというと、先ほど自分が言ったとおり

街を見て回ろうと、賑やかな街並みに向い足を進めたのだった

そして数分後・・・彼は、賑やかな街中を一人歩いていた

「すごい賑わってるな・・・流石は、呉の都なだけはあるよ」

賑わう人々を見つめ、彼は嬉しそうに呟く

一方で何人かの街人は、一刀の姿を見て首を傾げている
無理もない

彼はいつものように、白い外衣を着てフードで顔が見えないようにしているのだから

“ 司馬懿仲達 ” としてのスタイル

本人がどう思っているかは知らないが、周りからしたらこれ以上に怪しい人物は中々いないだろう

そんな視線に気付くことなく、彼は悠々と街を散策していく

そうして過ぎていく時間

やがて、太陽は彼の真上にまでやってきていた

「もうお昼か・・・どこかで、昼ごはんにしようかな」

そう言っつて、杖を肩に担ぐ一刀

彼はそれから、近くにあった飲食店に入っていく
しかし・・・

「うわぁ・・・」

御昼時、ということもあるのだろう

その店は、もう人がいっぱいだったのだ

“これは、無理かな”などと、彼が心配しているとき笑顔を浮かべた店員がやって来た

「申し訳ありません、お客様
相席でよろしければ、何とか座れますが？」

「あ、ならそれでいいです」

「かしこまりました
こちらへどうぞ」

“なんとか座れる”と安堵し、店員についていく一刀
やがて案内された席には、すでに一人の客が座り食事をとっていた

「此方です」

「はい」

ありがとうございます」

“では、ご注文が決まったらお呼び下さい”と、去っていく店員
その背を見送った後、彼はその席に座り込んだ

「向い、失礼しますね」

「あ、いいわよ別に」

一刀の言葉

向いに座る“女性”はニッコリと笑いそう言った
直後、一刀は言葉を失ってしまう

「……？」

私の顔に、何かついてるかしら？」

「え、いや、その……」

言葉が、上手く出ない

それほどの驚き

彼は知っていた

自分の向いの席に座る女性のことを

彼女は・・・

(な、なんで孫策さんがここに――――！！！！？？？)

そう、彼女の名は孫策

彼の記憶の中では、呉の国王である孫策だったのだ
もっとも、今は王ではないのだが

そんな彼女が、今自分の目の前で食事をとっている
驚くなど言う方が無理である

「ちょっと、どうしたのよ？」

「な、なんでもないですよ？」

あはは・・・そうだ、早く注文しないとなー
お腹空いたし」

言いながら、彼は笑う

そんな彼のことを見つめ、彼女は苦笑を浮かべていた

「ていうか貴方、その頭に被ってるのってちやえば？
暑くないの？」

「いや、全然大丈夫です！！！！！！
自分、暑いのが好きなんです！！！！！！」

ブンブンと首を横に振り、彼はフードをより一層深く被った
彼女はというと、“なら、いいけど”と食事を再開していた
その様子に、彼はホッと胸を撫で下ろす
ともあれ、油断は出来ない

彼女が凄まじい勘の持ち主であるというのは、彼も知っていた
故にこのまま此処にいれば、自分の正体がバレてしまうかもしれない
しかし、いまさら何も頼まずにこの店を出ることは出来ない
彼は急ぎ昼食をとり、この場を離れたかったのだ

しかし・・・

「んだてめえ、やんのかコラァ！！！！？？」

「ああ、上等だゴリアー！！！」

神様は、なんと残酷なのだろうか

彼は“またこんなパターンですか”と、割とマジで泣きそうになった

「何でよりもよって、こんな時にあんな“テンプレな喧嘩”始めちゃうんだよ」

もう、この時点で嫌な予感はしていた

騒然とする店内

彼はチラリと、自身の向いを見つめる

そして思った・・・“ああ、やっぱりな”と

周りの迷惑など気にせず、騒ぐ二人の男

その男たちを、“今にも殺してしまいそうなほどの殺気を込め”見つめる孫策

もう、“不機嫌です”と全身が語っている

冷や汗が止まらない

(これって、もしかして・・・かなり不味いんじゃない)

いやいやいや、まだ諦めるのは早いだろjk

このまま何事もなく終わってくれれば・・・)

「アンタ達・・・さつきから、凄い目障りね」

「ええ、そんな気はしてましたよ・・・はは」

ガクっと、泣きそうになりながら頭を垂れる一刀

そんな彼の気持などつゆ知らず、彼女は・・・孫策は、言葉を続ける

「喧嘩なら、外でやってくれない？

ハッキリ言って、迷惑だし」

「ああ!!?」

んだと、「くらあ!!!!!!」

孫策の言葉

先ほどまで喧嘩していたはずの二人は、2人して孫策のもとへ歩み寄る

つまりは、一刀の座る席にだ

「てめえ、生意気な口ききやがって!!!!」

2人のうち、一人が凄まじい剣幕で孫策に詰め寄る
しかし、すぐにその表情が不気味に歪む

「よく見たら、イイ女じゃねえか・・・ええ？」

ジュルリと舌なめずりをし、男は唾う

気付けば、もう一人も同じように笑っていた

そんな男たちの様子を見つめ、一刀は密かに溜め息を吐きだしていた

（おいおい、何もそんなとこまでテンプレ通りじゃなくてもいいだろうが）

心の中、小さくつぶやく

それから、孫策を見つめた

彼女は先ほどよりも、不機嫌そうな表情を浮かべている

（孫策さんのことだし・・・多分、いや絶対問題ないんだろうな
この程度の相手なら、一瞬だろうし
けど・・・）

笑い、彼は軽く頭を掻く

それから・・・

「あ・・・ちょっといいですか？」

スッと、その場から立ち上がったのだ

その口元を・・・

(やっぱり、見て見ぬふりっていうのは・・・情けないよな)

僅かに、釣り上げながら・・・

「あぁん!!!?!?
んだ、てめえ!!!?!?」

いきなり立ち上がった一刀に、男はグツと詰め寄った
それに対し、一刀はフツと笑みを浮かべ彼に向い杖を近づける

「いや、それがさ・・・一人の美しい女性に2人がかりで詰め寄る
ような情けない男に名乗る名前は持ってないんだよね」

「「あぁ!!!?!?」」

“残念なことに”と笑い、一刀は言った

その言葉に、一気に顔を真っ赤にさせ怒りを露わにする男達
それでも、一刀は笑っていた
それがまた、男たちの怒りのボルテージを上げていく

「テメエ、おれ達を怒らせて・・・タダで済むと思ってるのか？」

「いや、むしろさ・・・その言葉を、そっくりそのまま返してやり
たいよ」

「ああ!!?」

一刀は相変わらず笑っている
いや、正確には“顔だけだ”だ

男たちは知らない

彼もまた、我慢の限界だったのだ

森に迷い、熊に追い掛け回されたり

予想外の時間をかけ、ようやくたどり着いた建業

そこで、少し羽を伸ばそうとした矢先に出会ったのが・・・孫策

胃が痛むのを堪えながら、早く食事を済ませてしまおうといった直
後に起こったこの出来事

もう一度言おう

彼はもう、限界だったのだ

「なんだよ、もうっ!!」
俺に恨みでもあんのか、神様チクシヨーーーー!!!」

彼がそう叫んでしまうのも、無理もない話であった

しかし、目の前の男二人は事情を知らない

彼の叫びに一瞬怯んだ後、彼らは一刀めがけ殴りかかろうとしたのだ

「っ、危ない!!」

それを見て、孫策は咄嗟に叫ぶ

瞬間・・・

「ああもう、邪魔っ!!!」

「あつづう!!!!!!??」

“ゴウツ!!!!”と音をたて、彼の杖から炎が出てきたのだ
店内ということも考えてか、火力はいつもよりも遥かに少ない
しかし、男二人の髪をアフロに変えてしまう程の威力はあったらしい
真っ黒なアフロをおさえながら、男達は“んぎもっちいいいいいい

等と、ワケのわからないことを叫びながら店から飛び出していったのだった

—————

「や、やってしまった・・・」

路地裏に座り込み、ため息と共に吐き出す一刀

“ やってしまった ” とは、先ほどのことである

よりにもよって、皆が見てる前で “ 杖 ” を使ってしまったからだ

記憶に新しいのでは、彼が初めて雛里と出会った時のこと

あの時周倉たちはこれを見て、一刀のことを “ 五胡の妖術使い ” と

言っていた

確かに、無理もない話だ

普通、杖から炎なんて出ない

この時代ならば、尚更のことである

「 おいおいおいおい・・・ いったい何時の間に、俺に “ 不幸属性 ”
なんてついたんだよ 」

“ 不幸だ ” と、また溜め息

ともあれ、しばらく表通りを歩くのは止した方がいいかもしれない
そう思い、彼は重い腰をあげ三度溜め息を吐きだす

「仕方ない、か

もう今日は宿に戻って、休んでいよう」

「あら、もう帰っちゃうの?」

「ああ、もう疲れちゃった……し……し……?」

“ギギギ”と、ゆっくりと振り返った先

彼女は、孫策はいた

それも、ニコニコと微笑みを浮かべながら

「やつほー、さっきはありがとね」

「ああ、はい

ドウイタシマシテ……」

「ま、あの程度なら私一人でも十分だったんだけど……けど、嬉
しかったわ」

「は、はあ……それじゃ、俺はこれで

「おっとあ、そうはいかないわよ?」

「ですよね」

“あっはっは”と笑った後の溜め息
彼はもう諦めたような表情を浮かべ、彼女を見つめた
それに対し、彼女は“新しい玩具を見つけた時のような子供の目”
をしたまま微笑む

「さっきの炎の出る杖とか、いろいろ聞きたいことがあるのよねえ」

「はあ、さいですか・・・」

“ああ、これは無理だ”

彼は、この女性によく似た目をする人物を知っている
少なくとも彼女なら、このような発見をしておいて・・・それをみ
すみす逃がすなど、絶対にしない

「私の名前は孫策、字は伯符よ
貴方の名前は？」

だからこそ、もうこの状況に流されるしかない
と彼は、そのように考えていたのだ

「俺は・・・」

ここまでくると、もう笑いしかでない
苦笑と共に、彼はその手をゆっくりと伸ばす

「司馬懿……字は“パプテマス・シロッコ”だ」

やがて、その手がゆっくりと重なった瞬間
この建業の地での物語が、始まったのだ

「司馬懿……えっと
長いから“プー太郎”でいい？」

「勘弁してください」

司馬懿、またの名を北郷一刀
孫策、真名を雪蓮

この二人の出会いによって

物語は、新たなページを刻み始めることとなるのだ

・・・続く

第六章 建業激震！？ヒーローは遅れて登場するもんだってばよー！！（前書き）

はい、第六章更新です

建業編、その？

急展開の連続です

それでは、お楽しみくださいw

第六章 建業激震！？ヒーローは遅れて登場するもんだってばよー！

「・・・様、準備が整いました」

「うむ、ご苦労」

薄暗い、部屋の一室

そこに、一人の男がいた

彼は持っていた杯を机に置き、クツと笑いを零す

「いよいよじゃ・・・いよいよ、この国は儂のモノになる」

その笑いは、段々と大きくなり
ついには、その一室を飛出し

不気味なまでに暗い空にまで、届いて行ったのだ・・・

「待っている、この儂が・・・この国を統べるのじゃー！！！」

その瞳に
不気味なまでの狂気を宿す
一人の、嗟い声が・・・

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -

第六章 建業激震！？ヒーローは遅れて登場するもんだってばよ！！

—————

“何故だ？”

彼が自身にそう自問するのは、これでいったい何回目だろうか？

“いったい何故、こんな状況に？”

そのようなことすら考え付かないほどに、彼は繰り返していた
同じ疑問を、何度も何度も
されど、いつこうに答えは出ない
それに伴い、微かに痛んでくる頭

しかし・・・

「あははははは、なにこの杖〜！
面白〜〜い」

そんな彼とは対照的に、何の悩みも感じさせないような明るい声色
で笑う女性が一人
孫策、真名を雪蓮である
彼女は先ほどから彼の杖を振り回し、小さな炎を出し遊んでいたのだ
その様子を彼・・・司馬懿こと、北郷一刀は痛む頭をおさえ眺めて
いた

「ねえ、仲達！

この杖、本当に面白いわねっ」

「うん、喜んでもらえたようで何よりだよ
だから、早くそれを返してくれないかな？」

「え〜〜〜?」

「“え〜〜〜”じゃない

それは玩具じゃないんだからさ・・・」

「もう、わかったわよ

仲達のケチ」

“ケチで結構”と、彼は孫策から杖を受け取る

それからそれを肩に担ぎ、深くため息を吐き出し思いを馳せる

“何故・・・こんなことに?”と

さて、話は彼が彼女に捕まった当初に遡る

あの飲食店での一件の直後、見事に彼女に捕まってしまった一刀

これは逃げられないと、彼自身も諦めていた

せめて自身の正体は晒すまいと心の中、密かに決意しながら

名乗った名はもちろん、“司馬懿仲達”だ

そんな折、彼女はまずは一刀の持つ杖“ひのきのぼう”を貸してほしいと言ってきたのだ

どうやらあの一件以来、気になっていたようだ

これを一刀は、渋々承諾

使い方を説明し、孫策へと貸したのだ

そして、話は冒頭に戻る・・・

「すごいわね、その杖
それ、自分で作ったのよね？」

「まあ、ね」

「へえ、私の知り合いにもそういう絡繰りを作るのが得意って子がいるけど
そういう絡繰りは、見たことがないわ」

「へえ、そうなんだ」

“きつと、真桜のことだろう”と、一刀は笑う
それから、ふと込み上げるものがあった
あの真桜でも、このような発明品は作れなかったらしい
まあ一刀の場合、現代の技術もあるからなのだが
それでも、嬉しいと彼は素直に喜んでいた

「その知り合いは、どんなものを作ってるのかな？」

「えっと、確か“全自動お菊ちゃん”っていうのだったよう……
どうしたの、仲達
そんな前屈みになって」

「いや、なんでもない
ただちよつと、息子が“つい最近は、岩に隠れとったのか？”（
^）？”ってなってるだけだから
すぐに治るから、気にしないで」

「なら、いいけど」

“アイツ、なにしてんの？”と言いなながら前屈みになる一刀
そんな彼の様子を見て不思議に思っても、孫策はすぐ笑顔で話をはじ
めた

「それより、もつと他にないの？」

面白い発明品とか」

「ん、俺が作ったのはそもそも“面白い”っていつのを目的とし
てないからなあ

残念ながら、期待には応えられそうもないよ」

「え、つまんない」

“ブーブー”と文句を言う孫策を尻目に、ようやく息子が落ち着い
たのか一刀は姿勢を戻す
それから杖を見つめ、軽く溜め息を吐き出したのだ

「んでさ、俺もう帰ってもいいかな？」

宿に酔っ払い二人を置いたままでさ・・・」

「それは駄目

折角、久しぶりに面白いことに出会えたんだもの
そう簡単には、逃がさないわよ？」

「はぁ・・・さいですか」

“ですよなー”と、溜め息

大体こんなオチだろうなあとは、彼も予想していた
故に、さして驚くこともない

むしろ、この状況を逆に利用してみようなどと思い始めていたのだ

「じゃあさ、この街を案内してくれないかな？」

そう思いついての、この発言だった

「案内？」

一刀の言葉

首を傾げる孫策をよそに、彼は苦笑してみせる

「実は今、この大陸を色々旅して周ってるんだけどさ

この街にはまだ、全然詳しくないんだよね

だからホラ、この街をよく知ってる人に案内して貰えると助かるな
あと」

“どうかな？”と、一刀

それに対し、彼女・・・孫策は、笑顔を浮かべ頷いたのだった

――――

「これは鳳統様、よくいらっしやいました」

よく掃除された城内の一室

その中で、一人の女性が雛里に向い頭を下げていた

微かに赤みがかった髪を揺らし、微かに笑顔を浮かべながら
そんな彼女に向い、雛里もまた頭を下げる

「お久しぶりです、魯肅さん

急にお訪ねして、申し訳ありません」

雛里の言葉

魯肅は“とんでもない”と、小さく笑った

「いつでも、お気軽に訪ねてくださって結構ですよ」

「ありがとうございます」

礼を言い、また頭を下げる雛里

そんな彼女の様子に、彼女は朗らかな笑みを浮かべ口を開いた

「それにしても・・・今日はいったいどのようなご用件で？」

私はてつきり、鳳統様も三国会議にご出席しているものだとばかり・

・・・」

「私は少々仕事が残っていましたが、今回は残っていたんです
その仕事の途上、蜀内にある情報では少々難しくなってしまう・・・
こうして、建業を訪ねて参りました」

嘘をつくのは、やはり気が引けるものだが

それでもと、雛里はそれを態度に出さぬ様務める

魯肅はというと、その言葉に“ そうだったのですか ” と納得したよ
うな声をあげていた

「わかりました・・・どこまで力になれるかは、わかりませんが
わかる範囲でよければ、お手伝いしましょう」

「っ、ありがとうございます魯肅さん！」

三度、今度は大きく頭を下げる雛里

魯肅は、“ お気になさらずに ” と微笑む

そんな中、ふと・・・彼女は、何かを思い出したかのように声をあ
げた

「そういえば、意外と言えば・・・孫策様も、今回は建業にお留守番として残っているのですよ」

「雪蓮さんが、ですか？」

“ええ、今は少々街に出ていますが”と、魯肅
雛里は、驚いたのか目を真ん丸とさせていた

「なんでも、出発当日に急に留守番がいいと我儘を仰ったらしく
それを見た周瑜様が“なら私たちが帰ってくるまで、書簡漬けにし
てやるう”と仰いまして・・・」

「そ、そうなんですか」

何故だろう

その光景を、いとも簡単に想像できた雛里
彼女は苦笑を漏らすと、“ハア”と溜め息一つ吐き出した

(一刀さん、雪蓮さんと出くわしていないといいけど・・・)

—————

「ごめん、雛里・・・」

何故か、謝らなくてはいけない気がした

我ながら馬鹿なことを考えるものだと思いつつも、今の謝罪は決して間違いなんかじゃないと思う自分もいる

等と心の中呟きながら、歩くのは建業の街中

朝も歩いていて、見覚えのある街並み

唯一つ違うのは・・・彼の隣に、桃色の髪をした美しい女性がいるところであろうか

言わずもがな、孫策である

彼女は上機嫌に微笑みながら、彼を伴い街を案内しているのだ

「あ、あそこのお店は肉まんが美味しいのよ」

「へえ〜」

等と、自分が知っている場所、気に入っている場所があればこうして教えてくれるのだ

おかげで、この辺りのことを少しずつだが把握出来てきていた

存外、あのときの案内を任せるとい判断は間違いではなかったよ
うだ

彼女も楽しそうだし、問題はないだろう

一石二鳥、とでも言うのだろうか

「あと、あそこの装飾品屋さんが個人的にはお気に入りかなあ」

「ん・・・？」

“ピタリ”と、彼はその足を止める

そんな彼の様子を見て、彼女は意外そうに声をあげた

「なに、仲達つてば装飾品に興味があるの？」

「いや・・・うん、ちょっとね」

「なら、ちょっと見てみる？」

孫策に一言に、彼は“そうだね”と頷いた
そのまま、二人はその装飾品屋に入ったのだった

「いらっしやいませ

まあ・・・孫策様、お久しぶりで御座います」

「こんにちわ〜」

そんな二人を、店主らしき女性が出迎える

それに応えつつ、見つめる店内
其処には、珍しい宝石から安価でお洒落な装飾品まで幾つもの商品
が揃っていた

「すごい品揃えだな」

「でしょ?」

一刀の漏らした言葉に、笑顔のまま言う孫策
そんな彼女の笑顔に若干ドキツとしつつ、彼は店内に置かれている
品々に目を通していく

「贈り物か何かでしょうか?」

ふと、店主は彼に尋ねる
彼はというと・・・少々躊躇った後、“はい”と小さな声で言った
のだ
それに反応したのは、孫策だった

「なにに、もしかして仲達ってば彼女でもいるの?」

「そこは黙秘します」

「え」

“つまんな〜い”とごねる孫策
だが彼はそんな彼女のことなど気にした様子もなく、気になったものを何個か手に取ると店主に手渡した

「コレとコレと・・・あと、コレを下さい」

「かしこまりました」

会計を済ませ、満足げに頷く一刀
彼は受け取った装飾品を懐へと仕舞うと、孫策のもとへと歩み寄る

「さて、行こうか」

「わかったわ

次は、どんな所が見たい？」

「任せるよ

孫策さんの案内なら、きつと何処へ行っても楽しいと思うから」

「っ・・・」

不意打ち、とでも言うのだろうか
ともかくだ

不意に笑顔を浮かべそう言った一刀の笑顔に、彼女は胸の鼓動が速くなるのを感じていた

もつとも、笑顔といつてもフードを被っているせいかな顔はハッキリとは見えないのだが
それでも、彼女には彼の笑顔が見えた気がしたのだ
故に・・・“原因不明”の顔の熱さに戸惑いながらも、彼の手を握り足早に歩き出したのだった

「ちょ、孫策さんっ!？」

「フッフ、まつかせなさい!

この私がこの建業を隅々まで案内してあげるんだからっ
」

その表情は、ここ最近見ることのなかった
とても、明るく楽しげなものだったとか・・・

—————

“楽しい時間は、あっという間に過ぎていく”
夕刻

朱に染まる空を見上げながら、孫策は久方ぶりにそう感じていた
ここ最近、退屈で一日が長く感じたものだったが
今日は、そうではなかった

故に嬉しくもあり、また残念でもあったのだ

「もう、日が暮れるわね」

「そうだな・・・」

そんな彼女の隣

白い外衣を身に纏った仲達こと、一刀も同じように思っていた
捕まった当初は、ここまで楽しくなるものだとは思っていなかった
のである

「そろそろ、帰らなくっちゃね」

「そうだな・・・もう、帰らなくちゃ」

そうは言うが、2人とも中々歩こうとはしない
しかし、このままでは完全に日が落ちてしまう
そう思い、先に口を開いたのは一刀だった

「今日はありがとう」

おかげで、この街のこと色々わかったよ」

「ううん、いいのよ」

私も、楽しかったから」

言って、彼女は笑う

それにつられ、彼も笑っていた
やがて、ゆっくりと歩き出す一刃

だがしかし・・・その足は、孫策のもとへと向かっていた

「・・・どうか、したの？」

孫策の問い

彼は少し照れくさそうに頬を掻いた後・・・自身の懐に手をやる
それから取り出したものを、そつと孫策の手にのせたのだ

「これ・・・」

手渡されたのは、“紅い宝石”が中心に飾り付けられた首飾りだった
夕日に照らされ、とても美しく輝くそれを・・・彼女は、啞然とし
た表情のまま見つめていたのだ

「今日の、お礼

その、ありがとう・・・色々、案内してくれて」

“それじゃあ”と、一刃

彼は照れくさそうな表情もそのままに言った

それから踵を返し、宿に向いゆっくりと歩き出す

“今日が、終わる”

ふと、改めて実感する

彼女はそのことが、やはり残念だった

久しぶりに、楽しい一日だった

それが、もう終わるのだ

仕方ない

それは、理解している

時間はいつだって、自分たちの意思とは関係なく流れていくのだから

「ああ、そっか・・・」

瞬間

彼女は気づいた

確かに、“今日”はもう終わる
だったら・・・

「明日も・・・また、会えるかしらっ!？」

遠くなっていく背に向い、彼女はそう声をかけていた

顔が真っ赤になっていることにも気づかず
周りの視線なども気にせず

彼女は、大きな声でそう言っていたのだ

その声が聞こえたのか、ピタリと足を止める一刀

彼はその場でゆっくりと振り返った後・・・

「ああ、きつと・・・!!」

そう言って、大きく手を振ったのだった

何時くらいに

何処で、会ったのか

そのような約束などではない

しかし、それでもいい

大きく手を振る青年を見つめ、彼女もまた・・・負けじと手を振っ
ていたのだ

それは、お互いの姿が見えなくなるまで続いたのだった

――――
――――

「あ、おかえりなさい一刀さん」

宿に着いた時、その宿の入口にはちょうど今帰ってきたところなのか雛里の姿があった

彼女は行きよりも僅かに膨らんだ荷袋もそのままに、彼にフツと微笑んだ

それに、彼は“ただいま”と笑みを返す

「お城のほう、どうだった？」

「あ、はい

色々と、興味深いお話が聞きました

そのことで、幾つかお話したいことがあるのですが……」

「なら、雛里ちゃんたちの部屋で話を聞こうか
華雄達の体調も、良くなってるかもしれないし」

「はい」

“では、参りましょう”と、雛里

その後を、彼はゆっくりとついていく

やがて辿り着いた部屋の中、朝よりも顔色の良くなった華雄と霞が話をしていた

「おつ、一刀おかえり〜」

「ただいま

体調のほうは、どうかな？」

「うむ、だいぶ良くなったさ
すまなかったな」

“気にしないで”と、寝台に腰をかけながら彼は言う
それから、その向かいの寝台に雛里が腰をかけた

「まずは、雛里ちゃんのお話から・・・で、いいかな？」

“はい”と、頷く雛里

彼女は傍に置いた荷袋から一本の竹筒を取り出し、それを皆に見えるよう広げた

「まずは、ここ最近の呉国についてなのですが

ここ最近、“山越”の動きが活発になってきているみたいですね
流石に、それほど詳しくは教えてもらえませんでしたね」

「山越・・・ね」

山越とは、呉の地に長く住む民族のことだ

乱世が終わった今、大きな争いなどは起こっていないがそれでも、決して友好ともいえる間柄ではなかったその山越が、活発に動いているというのだ

「なんや・・・戦でも起こすんかな？」

「さあ、そこまでは・・・」

“まだ、何ともいせんが”と、苦笑する雛里その後すぐに、もう一本竹簡を取り出し広げる

「次に、荊州の問題です・・・こちらは、私が蜀を出る頃から変わっていませんね」

「ちゅうと、未だにあのままっちゅうわけか？」

「そうなります」

だからこそ、少しマズイかもしれませぬね」

荊州の問題

言われて、一刀は苦笑する

「荊州の“領土問題”、だね？」

「はい」

荊州とは、三国の丁度中心に位置する場所にある

その位置関係から、この荊州に関して三国それぞれが“自分達に、この土地の主権がある”という意見をそれぞれ口酸っぱく言っていたのだ

また位置だけでなく、その広大な土地も争いの種となっているのだが・・・

「故に、荊州あたりの治安はお世辞にも良いとは言えません

勿論、桃香様や華琳さん・・・それに蓮華さんも何とかしようと頑張ってはいるのですが・・・」

「中々、皆が納得するような案が出ないと？」

“その通りです”と、雛里は溜め息を吐き出す

そんな彼女の心中を察してか、一刀もまた溜め息を吐き出していた

「今のところ、このくらでしょうか」

あとは、概ね私が知っているものと同じような話でした」

「うん、わかった

ありがとう、雛里ちゃん」

笑顔のまま、そう言って彼は雛里の頭を撫でた

その瞬間、顔を真っ赤にさせたまま“ひゃい”と奇声をあげる雛里
しかしその表情は、すぐに笑顔に変わっていた
だが……

「そう言えば、一つ注意しなくちゃいけないことがあったんです」

「なになな？」

「それが……」

「三国会議で皆いないと思っていたんですけど、実は雪蓮さん……
孫策さんだけが、なぜか留守番としてこの地に残っているみたい
なんです」

「勘の良い雪蓮さんのことですから、もしかしたら一刀さんのこと
にも気づくかもしれません
ですので、くれぐれも……一刀さん？」

言葉を止め、雛里が見つめた先
小さく体を震わせ、大量の冷や汗を流す一刀の姿が……そこには
あった

その様子を見つめ雛里は、いや華雄と霞までもが
“まさか……”といった目で、彼を見つめていた

「一刀さん、もしかして……？」

「はい……会いました」

瞬間、三人は“やりやがった”といったふうに溜め息を吐き出す
そんな三人に対し、一刀は慌てて口を開いた

「け、けど安心してくれ！」

ほら、正体とかはバレテないから!!

アイ・アム・パプテマスシロツコ!!!!」

“ね？”と、一刀

その言葉に、雛里は安堵の息を吐き出した

「なら、いいんですけど

けど雪蓮さんの勘の良さは、凄いですよ？

今回は運が良かったとして、次はわかりませんからね」

「あっはっは、任せてよ雛りん！」

また会うなんてこと、絶対に……」

『明日も……また、会えるかしらっ!?!?』

「ぜ、絶対に……」

『ああ、きつと……!?!?』

「す、すいませんでした――――――――――
――――――――――」

「「「謝ったあああああ!!!?????」」」

宿の一室

天の御遣いは、後に“天下第一”と称されるほどの素晴らしい土下座を披露したのだった

こうして賑やかなまま

今日も、一日が終わっていく・・・

—————

「朝・・・か」

寝台から体を起こし、彼女は小さく呟く

それから小さく欠伸をし、机の上へと視線をうつした

そこには・・・窓から差し込む光を浴び輝く朱色の宝石が入った首飾りが置いてあったのだ

「ふふ・・・」

それを見つめ、彼女は笑う

思い出すのは昨日のこと

偶々立ち寄った飲食店で出会った、一人の青年のことだった

“司馬懿、字を仲達”

見るからに怪しいその身なりに反し、好感のもてる空気を持ち主

「今日も・・・会えるかしら」

『ああ、きつと・・・!』

眩き、昨日の別れ際の言葉が脳内で再生される

その瞬間、彼女は自身の顔がまた熱くなることに気付いた
そんな自分がおかしくて、彼女はまた小さく笑う

「今日も・・・会えると、いいわね」

“よし!”と、勢いよく寝台から飛び出す

目的は決まったのだ

ならば、急がなくては

彼女は自然とニヤケテしまうのを抑えることが出来ず

だがそんな自分が、どこか嫌いになれないと
笑顔のまま、準備していく

だが、しかし・・・

「そ、孫策様！！！！！」

た、たいへんですっ！！！！！」

「ん〜？」

その笑顔は

その心の奥、芽生えた新たな感情は

「一大事で御座います！！！」

「ちょっと、魯肅ちゃん

いったい、なにが一大事なの？

まさか、冥琳が新しい竹簡の山でも送ってきたの？

“ ”

「違いますよ！！？」

わざわざ魏国から、そんなことしませんよ普通！！？」

「じゃあいったい何が・・・」

「山越が・・・山越の軍が、この建業の間近に迫ってるんです！！！！！！」

この一言によつて、一気に崩れ去ってしまうのだった

+

「・・・む」

朝起きて、まだ間もない頃
宿の一室にある窓から外を眺めていた華雄がそのような声をあげる

「どうしたの、華雄？」

そんな彼女に向い、一刀は声をかける
この一言に、皆の視線が華雄に集まった
そんな中、華雄は窓の外を眺めたまま口を開く

「おかしい・・・」

“おかしい”
その一言に、三人は一様に首を傾げていた

「なんや、何がおかしいねん？」

「いや・・・何か、街の様子が慌ただしく感じるのだ」

「はあ？」

言いながら、同じように窓の外を眺める霞
それに続くよう、離里と一刀も窓から外の景色を眺めた

「確かに・・・どこか、おかしいな」

「はい・・・」

一刀の言葉

雛里は、真剣な表情のまま頷く

その隣、霞は小さく舌打ちをした

「兵士の姿も、なんや妙に多いで

それに、皆どっか焦ったような顔しとるわ」

彼女の言うとおりだった

街中を巡回する警邏隊だけでなく、明らかに一般の兵も多く混ざっている

それに皆、焦ったような表情を浮かべていた

“ 何かが、起こっている ”

「行ってみよう、皆！」

一刀の言葉

三人はそれぞれ真剣な表情を浮かべ頷いたのだった……

――十――

「山越の軍……確認できました！
数はおおよそ五万っ！！」

「五万、か……」

城壁の上

兵からの報告に、孫策は苦笑と共に呟いた

現在、建業の兵力は多くて二万

おまけに、三国会議の為主だった将兵は皆出はらってしまっている
量・質、共に危うい状況だったのだ

せめてもの救いは、孫策が此処に留まっていたことだろう

「あの勘は、当たりだったってことかしらね」

「いかがしましたか？」

「ん、何でもないわ

それよりも魯肅ちゃん、いつでも動けるよう準備しといて」

「はいっ！！」

礼をし、足早にその場から離れていく魯肅

その背を見送った後、彼女は深い溜息を吐き出していた

「でも、おかしいわね

あの勘は、“悪い方の勘”じゃなかった気がしたんだけど」

“悪い方の勘”というのは、言ってしまったえば現在のよ様な状況のことだ

“この先に罠がある”

“今夜、夜襲をかけてくる”

そういったものを、彼女は総じて“悪い方の勘”と呼んだ

それにより、今まで何度も助かってきたのだから・・・勘というもの、馬鹿には出来ない

しかし、彼女が留守番を決める切欠となったものは違ったのだ
今のままでいくと、“良い方の勘”とでも言うのだろうか

故に、彼女は苦笑を浮かべることしかできない

「ま……なんにせよ今は、あの山越共を何とかしないとね」

彼女がそう呟くのと、ほぼ同時のことだった

「愚かな呉の民よ……!!」

儂の名は“敵白虎”……!!

山越を統べる“徳王”とは、儂のことじゃあつ……!!」

そのような耳障りな声と共に

朱い鎧を身に纏う一人の武人を伴い、小太りの男がそう叫んだのは

――――十――――

「蔽白虎って、確か……」

「確か……もとは、呉群にいた豪族だったかと」

城壁の上

眼下に広がる光景を見つめながら、一刀が漏らした言葉

それに、雛里は曖昧ながらそう答える

その隣では、華雄と霞が自身の獲物を片手に同じよう眼下の光景を眺めていた

「それにしても、ようこれだけの兵がバレずに此処まで来れたもんやね」

「そうだな

ざっと五万、といったところか」

2人の言葉

雛里は“確かに”と、小さく声を漏らす

そんな雛里の頭をポンと撫で、一刀は微笑んだ

「ま、今はいいよ

それよりも、今は他に考えることがあるはずさ」

「一刀さん……そうですよね」

“考えること”
それが一体何なのかというと・・・

「貴様ら、よくも兵長を！！！！！」

「困め！！困んで、一気に叩くんだ！！！！！」

彼らが今、城壁の上で呉の兵士に絶賛追いかけられ中だということ
だった。ブスリ

「ああもうっ、なんでこんなことに！！！！？？」

「いやあ、せやかて城壁から見たと言ったんは一刀やん？」

「うむ

だから私と霞で、邪魔な兵をどけたんだ

「ひゃ、ひゃいつ!!」

言いながら、チラリと見つめた先

小太りな中年の男、厳白虎はこれまた大きな声で何かを叫んでいる

『数年前、奪われた僕の領地!!!

この国ごと、返してもらおうぞ!!!』

響く、嗤い声が・・・酷く、不快だ

そう思いながらも、一刀は駆け続ける

「させないよ・・・絶対に、な」

+-----

『数年前、奪われた僕の領地!!!

この国ごと、返してもらおうぞ!!!』

「ふざけんじやないわよ・・・まったく」

敵白虎の言葉

孫策は、呆れたよう息を吐き出した

彼女は、この男のことを知っていた

もとは呉群に住む、豪族の男

それが突如、辺りの豪族を吸収し勢力を拡大

自らを“東呉の徳王”と称し、彼女の前に立ちはだかったことがあったのだ

しかし、所詮は彼女の敵ではなかった

“徳王”等とは名ばかりで、その“徳”の欠片すら持たない狭量な男が

当時“小霸王”として名を馳せていた彼女に敵う筈がなかったのだ

その後、彼を見た者はいなかった

てつきり、一兵卒に混じりそのまま死んだのかと思っていたのだが・

「しかし、厄介ね・・・」

敵白虎が、ではない

彼が率いてきた山越の兵が、だ

さらに・・・彼の隣に侍る、一人の男

朱色の鎧を身に纏い、背に“双鞭”を背負う武人

相当の実力であろうことは、この距離からも見て取れた

故に彼女は思う

これは、一筋縄ではいかないと・・・

「そもそもあの当時、僕は手加減をしておった!!!
故に、あのような敗北に終わったのだ!!!」

「ぷ・・・今さら、あの頃の言い訳するのね」

相変わらずの小物っぷりだ

そう思い、彼女は笑いを堪えるのに必死である

「あの頃、この僕は・・・“半身”を失っていた
その為、この身を上手く操ることが出来なかったのじゃ!!!」

「は、はい？」

しかし、その笑いもふと止まってしまふ

“わけがわからない”

そう思った故だ

それは、他の兵も同様だった

敵白虎のいきなりの言葉に、皆が皆言葉を失っているのである

「ちょっと、そのメタボリック!!!」

「アンタ、なにいきなりワケわかんないこと言ってるのよ!!」

「貴様、孫策!!!?」

三国会議でいないかと思えば・・・くはは、ちょうどいい!!!!!!
あの時の力り、この場で返してやるわ!!!!!!」

「いや、その話は置いといて

今の“半身”とかなんとか、頭がいつちゃってる発言があったでしょ?」

「なつ、置いておくだと!!!!??」

く・・・まあいいだろう、教えてやる!!!!!!」

この儂が何故、あの時に敗北したのか!!!!!!」

納得いかないという表情をしながらも、彼は大声で話を続けた

「儂は、ある使命を背負いこの大陸にやって来た!!!!!!」

その使命を果たすべく、儂は自らの半身を作り出したのだ!!!!!!」

「へ、へえ」

「ぬ!!!?」

貴様、信じとらんな!!!!!!?」

「そ、そんなことないわよ?

スゴイスゴイ(棒読み)」

「く・・・しかし、儂の正体を知ればそのような顔も出来まい!!」

「!!」

—————

ピタリと、四人の足が止まる
それを見て兵たちが“今だ、囲め！”等と言っているが、今の彼に
は聞こえていないようだった
他の三人も同様である

「今……あのオッサン、何て言った？」

霞の言葉

皆が、眼下に広がる光景の中
不快な声で高笑いを続ける蔵白虎を見つめていた

「慌てるな、霞よ
きつと聞き間違いだったのだから
なあ、雛里？」

「はい、きつとそうですよ」

「そ、そうやね」

うん、きつとそうや」

そして、再び“笑う”
だがしかし・・・“彼は笑っていない”

「く、くははは・・・」

「か、一刀さん・・・？」

笑っているはずなのに、笑っていない
等と、随分と矛盾する話である
しかし、これは紛れもない事実
もう一度、言っておこう

彼は・・・“笑っていない”

「ああ、もう！！！！！！！！！」

叫び、彼はいきなり雛里を脇に抱える
突然のことに、慌てる雛里

「一刀おおおおお!!!??」

そしてそれに続くよう、華雄と霞も城壁から飛び降りる

このままでは、一刀が・・・!

そんな彼女たちの心配もよそに、彼は何か思い出したのか慌てて懐に手を入れる

それから取り出したものを、思い切り地面に投げつけたのだ

「君に・・・決めたっ!!!!!!」

直後、凄まじい煙と共に広がったのは“巨大なクッション”だ
彼らはその上に、何とか着地するのだった

「し・・・死ぬかと思った」

「な、なんで飛び降りたんや・・・アホ一刀」

「いや、なんかもう色々と限界だったから・・・って、離りん気絶しちやってる!?!」

「いや、無理もないだろ

ひとまず、私が預かっておこう

一刀は・・・」

「な、なんじゃ貴様ら!!!????」

「あつちのケリを着けて来い」

華雄の指さす先

そこには、驚いたような表情で彼らを見つめる厳白虎の姿があった
一刀は“任せるよ”と離里を華雄に預けると、霞を伴い歩き出す

「いやあ、なんかすいませんね

大切なお話の時間を邪魔しちゃって」

「ま、まったくじゃ!!!」

「いやあ、貴方のお話を聞いてたら居ても立ってもいられなくなっ
ちゃって」

言って、一刀は笑う

その言葉に、厳白虎は先ほどまでの警戒はどこへやら
上機嫌に笑うと、一刀の肩を叩いてきた

「がっはっは!!」

なるほど、この儂に……天の御遣いにあやかりたいというのじゃ
な!!!

若いもんの考えそうなことじゃ!!!」

「ははは、そうっすねww」

「よし、わかった

お主にも、儂の女をわけてやろう！

どのような者が好みじゃ？

孫策のような女か？

それとも・・・」

「曹操や、魏の女がいいか？」

彼は知らない

その言葉が

この場で、どれほどマズイものだったかということ
を故に、その口から零れ出たのだ

「・・・れ」

「むっ？」

彼は気づけない

その言葉が

青年の心の中、どのように響いたのか

故に、彼はその場から動こうとはしない

そして・・・

「黙れって言ったんだよ・・・このくそジジィッ!!!!!!」

「ぶべらっ!!!!???」

自身が、目の前の青年に思い切り殴り飛ばされた後に
彼は、ようやく気付いたのだ
自分がやってしまったことに

「がっは!!!??」

「げ、殿白虎様!!」

吹き飛ばされた殿白虎に、慌てて駆け寄る男

その光景をしり目に、一刀は深い溜息を吐き出したのだ

「はあく……いつてえ

俺ってあんま人のこと殴ったりとかするキャラじゃないんだから・
・あんま、怒らせないでくれよ」

「き、貴様が勝手に怒ったんじゃろうが!!!??」

「勝手に？」

「おいおいおい……まうだ言いやがりますが、このじいさんは」

「そやね

今のは一刀が殴らんかったら、ウチがなぐつとつたわ」

言って、二人は笑う

そんな二人の態度が気に入らなかったのか、巖白虎はさらに怒り狂った

「貴様ら、儂を誰じゃと思っておる!!!」

あの、天のみつかびゆっ!!!??」

「あくつと、手が滑ったあww

なんか間違って“偶然手に持っていたベイブレード投げちゃったあ”、テヘペロツ」

「手が滑ったんなら、しゃあないよなww」

“あつはっは”と、また二人は笑う

この態度に、巖白虎は我慢ならんといった表情を浮かべ叫ぶ

「太史慈”っ！！

あの二人を叩き殺せ！！」

「・・・御意」

そして、2人に歩み寄るのは先ほどの朱色の鎧を着た武人

“太史慈”

彼は背に背負った双鞭を構えると、二人のことを睨み付ける
しかし・・・二人は、構えない

「あのさあ・・・まだ、お話は終わってないんだけどな」

「うるさい！！」

「いったい、なにを話すというのじゃ！！？」

「それはもう、色々と聞きたいこととかもあるけど・・・まずは、
そっだな」

言って、彼は自身の身に纏う外衣を掴み

「まずは、「自己紹介」から・・・かな」

そして・・・それを、勢いよく脱ぎ捨てたのだ

「なっ・・・」

瞬間、辺りを静寂が包んだ

山越の視線も

呉の兵士たちの視線も

全ての視線がその青年に・・・“彼”に集まっている

そんな中、彼は唱えるように口ずさむ

「俺の名前は北郷一刀
もつとも・・・」

自身が背負う
その白き光の名を・・・

く人によつては俺のことを・・・“天の御遣い”つて呼ぶ人もいる
けどね

・・・続く

第六章 建業激震！？ヒーローは遅れて登場するもんだってばよー！！（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

じかい、いよいよ建業編はクライマックス！？
それでは、またお会いしましょう

第七章 建業決着！〜よしわかった、尻を貸そう〜（前書き）

皆さん、こおんばんわw w

建業編、いよいよクライマックスですw
今回はまあ

一刀が、めがっさ卑怯だったり
太史慈さんが、ものすごく可哀想だったり
雛りん、まじひなりんだったり

それでは、お楽しみください

第七章 建業決着！〜よしわかった、尻を貸そう〜

城壁の上

私の視線の先に広がるのは・・・信じられない光景だった

突然、巖白虎の前に現れた男

白い外衣を身に纏った男

その男を、私は知っていた

“司馬懿仲達”

昨日、一緒に街を歩いた

昨日、退屈だったはずの毎日が少しだけ変わった

昨日・・・私に、あの首飾りをくれた

まだ記憶に新しい、出会ったばかりの男

そんな彼が、急に現れたかと思ったら・・・

『まずは、“自己紹介”から・・・かな』

あの巖白虎を殴り飛ばした後

その身に纏っていた外衣を、脱ぎ捨てたのだ

そして、現れたのは・・・“見覚えのある青年”
日の光を浴び、白く輝く衣服を身に纏う男

彼は・・・

『俺の名前は北郷一刀
もっとも・・・』

く人によっては俺のことを・・・“天の御遣い”って呼ぶ人もいる
けどね〜

真・恋姫十無双 - 白き旅人 -

第七章 建業決着！〜よしわかった、尻を貸そう〜

――――

「て、天の御遣いじゃとっ!?!」

信じられない、という風に声をあげる小太りの男

“自称・天の御遣い”こと、“巖白虎”

彼はあまりの驚きに、その場から一気に後退していったのだ
まさか本物が来ていたなど、夢にも思わなかったのだろう

そんな彼をやや冷めた目で見つめるのは、北郷一刀こと“本物の天
の御遣い”だ

彼はというと、怒気を孕んだ瞳を隠そうともせずゆっくりと・・・
深く溜め息を吐き出した

「はい、そうです

魏の種馬こと、天の御遣いですよ〜」

「ぶっ・・・くく」

一刀の言葉

霞は一瞬噴き出しそうになるのを何とか堪える
そんな霞のことを、一刀はジト目で睨み付けた

「おい、霞・・・笑い事じゃないぞ？」

霞だってあのままだったら、このオッサンの愛人だったんだからな」

「くく、ああそうやったね

それだけは勘弁や」

“つつたく”と、一刀

彼はそれから、その視線を未だ驚く巖白虎へと向けた

「さつてと・・・この俺、天の御遣いと」

「ウチ、張遼文遠の前でええ加減なこと言った罪」

「「きつちり、落とし前つけてもらっぞ?」「」

「ひつ、な・・・ちよちよ張文遠じゃとっ！！！！????」

男は、さらに二人から距離をとる

天の御遣いだけじゃなく、まさかあの“神速”と謳われた張遼までいるとは想像することすらできなかった

このことに、呉の兵や山越からも驚きの声があがる

「おい、あの白い服って・・・」

「ああ、間違いない！

確かに戦場で見たことがある・・・！」

「それに、あの張遼將軍までいるなんて・・・」

“天の御遣い”

“張文遠”

この二つの名によって、戦局は大きく動き出したのだ

“このままではマズイ”

そう思ったのは、勿論敵白虎である

想定外のことばかりおき、その表情には明らかに焦りが見える

「くそ、聞いていないぞ・・・儂は、このようになるなど・・・」

「おい、一人でトリップしてないでさ
こっちでお話でもしようよ」

「ひ、ひい!?!」

ユラリと、男に歩みよる一刀
その姿に、男は恐怖を覚えた

故に、彼はさらに後ろへとさがると・・・大声をあげ、一刀を指さ
したので

「そそそそ、そうじゃ!

た、太史慈!!

その御遣いは偽物じゃ!!

早う、早う始末せいっ!!!!!!」

「・・・御意」

男の言葉

太史慈はゆっくりと、手に持っていた双鞭を構えた
その姿に、霞はニヤリと嬉しそうに笑みを浮かべる

「へ〜、アンタ・・・中々の、使い手みたいやねえ
おもしろいやんけ
太史慈、つちゆうんか？」

「太史慈、字は子義
それが、某の名前だ」

言つて、構えた双鞭を握る手に力を込める
その瞬間、凄まじい程の重圧が空気を“揺らした”

“強い”

思つると同時に、彼女は笑う
乱世が終わつて以来、出会うことになかつた“強敵”
その登場に、彼女は“喜び”を隠すことが出来なかつたのだ

しかし、だ

「待つて、霞」

「ん？」

その笑みも、次いで聞こえてきた彼の声
一刀の声により、消えてしまうことになる

「なんや、一刀
今、ええところなんやけど？」

不満そうに、一刀に言う霞

その彼女の肩をポンと叩き、彼はニッと笑う

それから持っていた杖の先を太史慈へと向け、こう言ったのだ

「俺が・・・戦うよ」

「なっ・・・!?!」

この一言に霞は、いや霞だけではなく

其の場にいる者は皆、一斉に驚きに表情を変えた

彼の目の前で双鞭を構える、太史慈でさえもだ

「おい、一刀!？」

あの太史慈っちゆう奴、かなり強いんやで!!!?

一刀じゃ・・・」

「大丈夫だよ・・・」

霞の言葉

彼は歩みを止めることなく、そう答えた
それから、杖を握り締め言ったのだ

「もう・・・大丈夫だから」

「一刀・・・」

“大丈夫”

温かな笑みと共に放たれた、その言葉に
彼女は、しばし悩むような表情を浮かべ

其の自身の肩に、ゆっくりと偃月刀を担いだのだった

「わかった・・・そのかわり、絶対に勝つんやで」

「ありがとう・・・霞」

言って、向き直った先

太史慈は、少し意外そうな表情を浮かべていた

「話では・・・確か、御遣い殿は戦場で矛を振るったとは聞いてい
なかつたのだが」

「まあ、ね

いっつも皆の後ろで、じつと・・・戦場を眺めてたよ
つて、いいの？

俺のこと、御遣いって呼んでさ？

あのオジサンが言うには、俺の方が偽物らしいよ」

「いや・・・一目見れば、某にはわかり申す

貴殿が身に纏う空気は、まさに万人の心を照らし温める太陽が如く
貴殿こそ、天の御遣い様であるのでしよう」

「けど・・・」

「いかにも・・・それでも尚、某は戦いましょう

あのような輩でも、某には受けた恩があります故」

“なるほど”と、一刀は苦笑する

史実においても、太史慈はとても義に厚い武人だったという

それは、この世界においても変わらないようだ

故に、彼はその瞳を真っ直ぐと見据えた

「始めに、言うておくけどさ

俺は“武人じゃない”、俺は“俺として戦う”

それで、いいかな？」

「問題ありませぬ

どのような相手だろうとも、某の双鞭は等しく砕いてみせましょう」

「なら、そろそろ始めよつか」

「御意・・・さあ、かかって参られよ!!」

この太史子義!!

全力をもって打ち砕かん!!!!」

それが・・・“合図”となった

太史慈の声と共に、一気に駆け出したのは一刀だった

彼は素早く太史慈との距離を詰めると、その杖の先を太史慈へと向けたのだ

「燃えろっ!!」

瞬間、勢いよく飛び出していく炎

辺りには、驚きの声があふれかえる

巖白虎にいたっては、“ん”ん”””””と叫びながら尻餅をついている

そんな中でも、太史慈は至って冷静であった

彼は襲いくる炎に怯むことなく、ジッと睨み続ける

やがて、その炎が自身に当たろうかという時・・・

「むん!!!!!!!!」

その双鞭を振るうことによって、掻き消してしまったのだ
これにまた、周りの者達は驚きの声をあげた
そんな中、彼は炎により見失った一刀の姿を捕えるべく駆け出す
同時に……

「さっすが、太史慈

けど……これは、どうかな？」

彼の耳に、このような言葉が聴こえたのだ
と、同時に聴こえる……“シュー”という、何かおかしな音
それが自身の周りから聴こえることに気付くのとほぼ同時のことだ
った

「ぼくのかんがえたかつこいい武具シリーズNo.21”
良い子は絶対に真似しちゃダメな、危険な花火……その名も“ジ
バクくん”だ」

彼の周りから一斉に、凄まじい量の火花が音をたて散ったのは……

「む、むうつ!!!?!」

突然のことに、今度こそ驚きの声をあげる太史慈

それだけでなく、自身の周りで破裂する“ジバクくん”の火花の熱に表情を歪めていた

“しかし、これさえ耐えれば・・・”と、ブンと双鞭を振るう太史慈

「もしかして、これで終わりと思った?ww」

「っ!!!?!」

その刹那、響いた声

同時に、背筋に嫌な汗が伝う

“マズイ”と、そう思った時には遅かった

「それ、モンスターボールww」

「あふんっ!!!?!」

彼の股間めがけ、思い切り投げられた“モンスターボール”
それは彼の股間に衝突し、凄まじい衝撃と共に弾けたのだ
そして・・・辺りに溢れるのは、一刀特製の“胡椒”やら“唐辛子”
やら“ウコン”やら“ジャスミン”やらが含まれた煙
胡椒や唐辛子で相手の視界や嗅覚を奪うだけでなく、ウコンやジャ
スミンで健康や香りにも気を使った至高の一品である
もつとも、現在進行形で火花を浴び続け股間に打撃を負った彼にそ
れらを楽しむ余裕などなく
唯々、それらの中心で悶絶するばかりである

「ちょ、ま、ゴホツ・・・待つて、ゲほ・・・」

「あつはつはつは!!」

見たか、御遣いの“正義”の力を!!」

言つて、上機嫌に笑う一刀

周りは皆、“何処が正義だ”とツツコんでいる
霞にいたつては、爆笑しその場を転がり回っていた

「さつてと、太史慈さん

もう、降伏してくれないかな?」

「ぐ、断る・・・ゲほ、つて、ちょ、お主、何を・・・!?!?」

「いや、そろそろ切れそうだったからジバクさんの補充をあと、モンスターボールも五個くらい投げとくか」

「な、なんだと!!!?」

「ちよ、ま、あつつ!!!?」

「熱い熱い鼻が痛いでもなんか良い香りゲゲゴボウエ……!!!?!?!?!」

“よ、容赦ねえ”と、皆が思ったのも無理はないこの状況下で、さらに追い打ちをかけたのであるしかし、それでも尚太史慈は降伏しようとしなかった

「太史慈さん、もういいだろ?」

「ぐ、ぬぬぬぬ……某は、まだ恩を返せておらん!!」

あのときに受けた恩は、まだ返しきれておらあふんっ!!!?ちよ、こら!!!?」

ははは話してる最中に、股間を狙う奴が何処に……」

「此処にいるが?」

それよりもさ、聞かせてくれないか?」

君が、どのような恩を……あのくそじじいに受けたのか」

「ひっ!!!?」

あつつ……わかった!

わかったから、“その手に持ったモノで某のモノを狙うのを止める”!!!!!!」

“仕方ないなあ”と、一刀
その姿にホッと胸を撫で下ろしつつ、彼はその口を開いたのだ
因みに・・・現在進行形で、彼の周りには未だにジバクくん達が勢
いよく破裂している

「某は長い間ずっと・・・ただひたすら、自身の武を高めるべく生
きてきた

それこそ、他のものを全て後回しにして
毎日のように、ただ鍛錬をかしてきたのだ」

この話に、“太史慈さんらしい”と一刀は苦笑する
彼の実直なまでの性格は、昔からだったらしい

「そのせいか・・・某は、大切なものを捨てることができなかつた
のだ」

「大切な、もの？」

その言葉に、一刀は首を傾げてしまう

一方の太史慈はというと、“御遣い殿ならば、簡単にわかることだ
”と悲しげに笑う
因みに・・・彼は未だ股間が痛いのか、大きく前屈みになったまま
である

「某は・・・未だに、“女子を知らぬのだ”」

「っ！！！！??」

一言

太史慈が放った一言に、一刀は驚愕に表情を歪める
微かに、その体は震えていた

“女子を知らない”

それが表すものは、つまり・・・

「ど、“童貞”・・・だと?」

一刀の言葉

太史慈は、悲しげな表情を浮かべたまま頷く・・・
その姿に、一刀は自身の胸が痛むのを感じた

「た、太史慈さんは今・・・何歳、なのかな？」

「齢29・・・今年で、30だ」

「っ・・・！」

瞬間、一刀は口元をおさえ涙を流した

なんという、ことだろう

もしこの世界に“魔法使い”という存在があったのならば

彼は、今年で・・・

「某は、毎晩のように涙した

失った時は、もう2度と戻ってこないのだ・・・と

そんな時だったのだ・・・巖白虎殿が、某に手を差し伸べてくれたのだ」

『儂が・・・お主を、助けてやるっ』

「例えそれが、某の武を利用しようと考えたものであっても例え、それが悪の行いだっただとしてもそれでも、某は嬉しかったのだ
こんな某に、手を差し伸べてくれたことが・・・ただ、嬉しかったのだ」

「た、太史慈さん・・・アンタって、奴は」

涙を拭い、一刀はグツと拳を強く握りしめる
太史慈の想いに、応える為に・・・

「わかった・・・わかったよ、太史慈さん」

「御遣い殿・・・かたじけない」

「けど、さ

やっぱり、間違ってるよ」

「御遣い殿・・・」

呟き、彼はキツと太史慈を見つめる

その手は、未だ強く握りしめられたままである

「俺たちの人生を・・・例えば、“戦”に例えたでしょう
その場合、さ

どうなってしまったら、戦は終わっちゃうと思っつ？」

「それは・・・己が死したならば、終了ではないのか？」

「違っよ、太史慈さん

それは、間違いだ・・・」

「だったら、いったい・・・」

言い掛けて、彼は言葉を止めた

見たのだ

彼を見つめる、一刀の・・・その、優しい瞳が

彼に、こう語ってきたのだ

く諦めたらそこで・・・戦は、終了だよ？」

「・・・ああ、そうか」

その言葉に、その温かな言葉に
彼は、知らず涙を流す
それから、グッと双鞭を強く握りしめた

「そういう、こと、だったのか」

言って、彼はそれを・・・振るう

その姿に笑みを浮かべ、一刀は自身の懐からあるものを取り出した

「やっと、気付いたみたいだね・・・」

言いながら、彼が構えるのは・・・太史慈が持つ双鞭のように
二本一對の武具
ただ、双鞭と違うのは・・・その、圧倒的なフォルム

「だったら、決着をつけよう」

長く白い柄

そして・・・黒いゴムで出来たお椀型の先端部分
摩訶不思議な、その武具に
辺りは、驚きのあまり言葉が出ないようだった

しかし・・・もし仮に、この場に一刀と同じ世界の人間がいたのなら

まったく別の意味で、言葉が出なかつただろう

一刀が構える、それは・・・

「^ヌぼくのかんがえたかつこいい武器シリーズNo.9” “^{ロンキ}崙義警
主”」

トイレが詰まった時に使うあの、“キュッポン”こと・・・正式名称を、“ラバーカップ”だったのだから

「さあ・・・いくよ、太史慈さん」

「うむ・・・いざあ！！」

叫び、同時に駆け出す2人

かたや、二振りの双鞭を持ちながらも・・・片手は、股間をおさえ前屈みになつたまま走る

一人の、孤高の武人

かたや、二振りのキュッポンもとい^{ロンギヌス}崙義警主を構え駆ける
天の御遣い

その二人の距離は瞬く間に縮まり
そして……

決着は……一瞬にしてついた

キュッポン

「某の負けだ……御遣い殿」

ゴトリと双鞭を落とし、呟く太史慈
その顔には、なぜか笑顔が浮かんでいた

その懐で、ロンギヌス 崙義警主を強く握りしめ
その切っ先にて、太史慈の股間をキュポン したまま……一刀は、
同じように笑い呟く

「ああ、そして……俺の勝ちだ、太史子義」

グツと力を込め、キュポン と音をたて引き抜かれるロンギヌス 崙義警主
“あふんつ”と、太史慈は悶え膝をついた
やがて彼は、苦笑を浮かべ呟く

「はは……某は所詮、この程度の男でござったか」

「太史慈さん……」

その姿を見つめ、一刀は一度深く息を吐き出した
それから、彼を見つめ笑ったのだ

「さつき、言ったよね？」

諦めなければ、おれ達は終わらない・・・いや、終わるはずなんて
ないんだ

諦めなければ、おれ達は何処へだって行けるんだよ？」

「御遣い、殿・・・」

「だからさ、聞かせてほしい

今の太史慈さんの、本当の気持ちを・・・」

「某の、本当の・・・気持ち」

言われ、彼は自身の胸に手をあてる
そして・・・気付いたのだ

己の・・・本当の、気持ちに

「御遣い殿・・・某は、某は・・・」

故に、彼は吐き出したのだ

溢れ出る涙が

零れ出る想いが

「御遣い殿^{センセイ}・・・女の子と、イチャイチャ、したいです」

彼の本当の想いを

長い間、一人で抱え込んでいた闇を

ようやく、曝け出すことが出来たのだ

「太史慈さん・・・それで、いいんだ
俺たち男は、それでいいんだよ」

ポんと、優しく肩を叩く

それから一刀は、自身が持っていた“^{ロンギヌス}崙義弩主”を彼の手へと握ら
せた

そして、ニツと微笑を浮かべたのだ

「これを・・・受け取ってくれないかな？」

男として、ようやく一步踏み出した貴方への・・・敬意を表して」

「御遣い、殿・・・くっ、忝い！」

グツと、強くロンギヌス崙義督主を握り締め
彼は、その場から立ち上がった

そして、受け取ったロンギヌス崙義督主を・・・天高く掲げてみせたのだ

「某・・・太史子義は、御遣い殿に生涯の忠誠を誓いましょうっ！
！！！！

そして、歩もう！！

真の、男を目指してっ！！！！！！」

その姿に

唯一人の、ひたむきなまでの真っ直ぐな想いに

呉国の民は・・・山越の兵たちは

皆大粒の涙を流し、皆で大きな拍手を送っていたのだった・・・

・・・続く

(・・・って、なんじゃこの茶番-----!!
!!???)

“いやいやいや、長すぎるだろ!?”と、一人心中ツッコんだのは
冴えない中年のオッサン

敵白虎である

彼は長かった戦いの結末を見つめ、声を大にしてツッコみたい衝動
を必至に堪える

それから、自身のおかれた状況を理解した

太史慈はもう、自分には従わないだろう
山越の民も、恐らくは自身の命令には従わない

つまり・・・彼は負けたのだ

(くそ・・・このままでは、“あの方”に面目がたたん!!
いやそれ以前に、儂の命が危ないっ!!)

思い立ったが吉日、とは少し違うのだが
彼はそのことに思い至るのと同時に、その場から駆け出そうとする
幸い、今皆の視線は太史慈と御遣いに集まっている
故に、今ならばなんとか・・・

「あつれえ〜？」

どこに行くのかしら〜？」

「ひっ・・・!?!？」

・・・などと、そう思っていた時期もあったのだが

「貴様、そそそそそ孫策!!!??？」

「は〜い、お久しぶり」

逃げようとした彼の前

そこに、いつの間にか孫策が立っていたのだ

「い、いつの間に?!?!?」

「まあ、勘ってやつかしら?

ようやく、調子が良くなってきたみたい」

言って、彼女は思う

“いや、違うか”と、そう呟きながら

一年前

あの時の勘だって、ハズレじゃなかったのだから
今ならば、彼女はわかった

あの時、感じた勘は

あの時に見た、あの白い光りは

きつと・・・

「彼と会う為だった」・・・なんて、ね」

言いながら、微笑む孫策

そんな彼女の様子に戸惑いながらも、敵白虎は今がチャンスとばかりに駆け出す
だが……

「おっと……悪いがここから先は、立ち入り禁止だ」

やはり、彼に待つのはこのような結末であった

彼が逃げようとした方向には、二つの人影があったのだ

華雄と、そしていつの間にか目を覚ましていた雛里である

「きよきよきやらしやきにいわ、いきやしえましえんよ……!……!」

まだ、完全には回復していないようだが
さらさら……

「どこへ行くん？」

まだまだ話は終わってへんやろうが」

「ひっ!……!……!……!」

その背後から、彼の首筋に偃月刀の刃をあてがう霞
まさに、四面楚歌……絶体絶命である

加えて、だ

「さつてと、覚悟はいいかな？」

このタイミングでの彼の登場は、もはやトドメをさしたに等しかつただろう

「アンタは、この“天の御遣い”の名を使って・・・罪のない、山越の民を巻き込んだ

アンタはどす黒い欲望を満たす為、太史慈の純な心を弄んだ
そして、アンタは・・・俺の前で、“彼女の名を穢そうとした”
その報いを、アンタは受けるべきだ」

「ひっ・・・ひい!!?」

迫りくる、一人の青年

天の御遣い

白い外衣を身に纏い、その手に杖を携えて
少しずつ歩み寄る彼に、男は恐怖した

「く、お前さえ!!」

お前さえいなければ、全て上手くいったのだ!!!!」

この期に及んで、皆はそう思い溜め息を吐き出す
しかしそんな中、唯一人だけ
一刀だけは、ニヤリと意味深な笑みを浮かべ呟く

「ああ、そうだよ……この場に俺がいなければ、アンタの企みは
上手くいっていただろうね」

「……!？」

突然の言葉

敵白虎は、驚き目を見開いた

「けど……それは“有り得ないんだよ”」

“残念ながらね”と
それでも、彼は言葉を続ける
やがて彼は、驚きのあまり身動きのとれない敵白虎の耳元で……
小さく何かを囁いた

「……だっけ？」

アンタに、このことを教えたのっさ」

「な、ななななな!!!!？」

何故だ!?

何故貴様が、“その名”をしつてぶげるあああああ!?!?!?!?
????」

言い掛けて、その場から吹き飛んでいく蔵白虎

その顔面に思い切りぶち込まれた、一刀の拳によってである

一刀はその手を強く握りしめたまま、吐き出すように・・・再び、
小さく呟いたのだ

「なんたって、俺は・・・天の御遣いだからね」

やがて、深く溜め息を吐き出す彼
それから、その場にいる皆を見回した後・・・スッと手をあげ言っ
たのだ

「面倒はひとまず押し付けちゃえ
てことで、華琳のところに送るに一票」

この一言に、皆はクスリと笑いを零す

「はいはいはい

「じゃあ私は、“衣服は道中邪魔になりそうだから着せない”に一票
」

これに続いたのは、孫策だった

それに対し、他の三人もそれぞれ手をあげる

「ほんならウチはそれに、“曹操は僕の女”って腹に書いとくに一票
ww」

「ふむ・・・ここはやはり、“せめて男らしく兜だけは被っていく”に一票だ」

「あわわ・・・私は、“護衛や護送する人はみんなガチでムチないイ男”に一票です」

「ひ、雛りん？

何気に、ある意味一番ひどいこと言ってない？」

・・・哀れ、巖白虎

彼は自分が気絶している間に

“全裸に兜だけ装着しお腹には『曹操は僕の女』と書かれた状態で、ウホツでガチムチなイイ男達の手によって魏国にまで送られる”ことになってしまったのだった

『なに、男は度胸・・・なんでも試してみるものさ』

等と、とある青ツナギのイイ男の声が聞こえた気がした

ともあれ、これにて一件落着

山越の民も恐らくは、巖白虎の口車により騙されていたのだろう
今はもう、敵意はないとばかりに武器を捨てこちらの判断を待っているようだった

「疲れたあ・・・」

そんな中、一刀は溜め息と共に吐き出す

それから見上げた空

未だ太陽が昇る青々とした空を見上げ、彼は誰にも聴こえない様小さく呟く

「やっと・・・“一つ目”か」

その呟きは風に掻き消され

やがて、その場から溶けるよう消えていったのだった

—————

「まずは・・・ありがとう
呉国を代表し礼を言うわ」

場所を移し、ここは建業城内の玉座の間

その玉座に腰をかけそう言ったのは孫策だった

その彼女の視線の先

一刀をはじめとし、華雄・雛里・霞・・・そして、太史慈の姿があった

「だけどもさか仲達の正体が、天の御遣いだったなんてね」

言って、彼女は笑う

それに対し、彼は申し訳なさそうに苦笑した

「ごめん、孫策さん

けど、俺にもその、事情があつてさ……」

「わかつてるわよ」

別に、怒つてなんかいないわ」

“その代わり”と、彼女は微笑む

「私のことは雪蓮つて、そう呼んで」

「つて、はあ!？」

それつて、真名だろ？」

「いいのよ」

貴方がいなかったら、今頃建業は大変なことになっていたわ
本当に感謝してるの

それにね、今回のことで山越の民から“交流”を持ちたいって
言ってきたのよ？

良いことづくしだわ

だから、そのお礼に……ね」

「はあ……わかつたよ、雪蓮」

だったら俺のことも一刀つて呼んでくれよ
こっちでいう、真名みたいなもんだからさ」

「わかつたわ一刀」

それから、2人は小さく笑いあう

そんな光景を、霞は何とも不機嫌そうな表情で見つめていたのだが
残念ながら、一刀はそれに気付けないでいた

「ところで、太史慈はこれからどうするんだ？」

ふと、思い出したのか一刀は自身の後ろに控える太史慈に声をかける
彼はそれに対し、スツと頭をさげ言葉を紡いだ

「某は、真の男になるべく一人で大陸を旅して周ろうかと思えます
そしてこの“ロンギヌス 崙義弩主”に相応しい男となり、御遣い殿のもとへ馳
せ参じましょうぞ」

「ああ・・・待ってるよ」

「必ずや！」

言って、彼は背負っていたロンギヌス 崙義弩主を掲げた

此処まで来たらもう、“深夜のテンションで作ってしまったモノ”
だとは言えない

そもそも、こつちの世界での使い道を探す方が難しい
本来は、トイレでキュポンキュポンするものだし

一刀は、ただ頷くことしかできなかったのだった

「さつてと、それじゃ・・・そろそろ宿に帰ろつかない」

「え？」

「ちよつと待ってよ」

「折角だから、お城に泊まっていけばいいじゃない」

「いや、遠慮しとく」

「明日にはもう、建業から出ていこうと思ってたから」

「明日あ！？」

一刀の言葉

雪蓮は、驚きのあまり玉座から立ち上がった

「そんな彼女にビックリしつつも、彼は苦笑いを浮かべたまま話を続ける」

「俺の正体がばれちゃったからね」

「残念ながら、長居は出来ないよ」

「そっか・・・残念だわ」

“ごめんね”と、一刀

「そんな彼の言葉とはよそに、彼女はしばし何かを考え込むすると、段々とその表情は明るくなっていき・・・」

「そっか・・・“この手”があつたじゃない」

誰に聞かせるでもなく

一人・・・小さく呟いたのだ

背筋が凍るような、不気味な笑みを浮かべながら・・・

—————
—————

「よかつたのかい？」

ホイホイ、運ばれちまって

俺は・・・ノンケだって構わないで喰つちまうような人間なんだぜ
？」

「よ、よくない!!」

わ、俺は女が好きな普通の男・・・」

「あぁん!!!？」

だらしねえな!!!？」

「ひ、ひい!!!?!」

「それじゃ、とことん悦ばせてやるからな」

「お、おい!!!?!」

何を、おま、やめ、あ、ああ、ああああ、あ……

アッ

と、賑やかに魏国に送られていく敵白虎を見送り
一刀達は今、建業を少し離れた位置を歩いている

「はあ・・・結局、観光は無理だったな」

「ウチら、酔い潰れとっただけやもんねえ」

「あわわ、次の街でゆっくりすればいいんですよ！」

“だから、元気だしてくださいしゃい・・・あう、また嘔んじやいました”と、雛里の励ましに癒されつつ

四人は、“宿を出る前に決めた行き先”へ向け歩を進めていく

「一刀？」

どないしたん、さっきから・・・なんや、妙にソワソワして」

そんな中、霞は自身の前を歩く一刀の異変に気付く
彼は先ほどから、なぜかソワソワとしていたのだ

「いや、その・・・上手くいえないんだけどさ
こう、嫌な予感がするんだよね」

「嫌な予感？」

「気のせいちゃうか？」

「だと、いいんだけどさ」

言いながら、見あげた空

昨日に引き続き、今日もまた快晴である

「ま、そうだよな」

“きつと、気のせいだ”

そう言い聞かせ、彼はその足を早めた

目指すは・・・

「行くう、皆

目指すは・・・」

「ちよつとおー!!」

遅かったじゃない、一刀!!--!!」

「めぞす、は・・・え?」

“ギギギ”と、なんとも古典的な効果音と共に四人が見つめた先
自分達がこれから向かおうとした道のりの真ん前

そこに、“彼女”はいた

桃色の髪を靡かせ、すっかりと旅支度を済ませた女性・・・

「雪蓮！！！！??」

「やっぱり、一刀」

孫策こと、雪蓮が
彼らの前に、立っていたのである

「な、なんでここに!?!」

焦る、一刀達

そんな彼のすがたに笑みを浮かべつつ、彼女はガバツと一刀に抱き
着きこつ言ったのだ

・
・
・
続
く

第七章 建業決着！〜よしわかった、尻を貸そう〜（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？

今回は、ちよつとした閑話休題
その後、新章に突入します

それでは、またお会いしましょう

第八章 あわてないあわてない、一休み一休みイクソオラアアアアアアアアア

こんばんわ、です

こんな時間に投稿します

今回は、のんびりしたお話ですw

それでは、お楽しみくださいw

第八章 あわてないあわてない、一休み一休みイクソオラアアアアアアアアア

「平和だな」

「平和ですね」

ある晴れた空の下

温かな太陽の光に目を細め、二人の男女が草むらに座っていた

一人はフードのついた白い外衣を身に纏い、その手に一本の大きな杖を持った青年

司馬懿、字を仲達

本名は北郷一刀・・・三年前に消えたときれる、天の御遣いである

もう一人は大きなとんがり帽子を被った、背の小さな少女

鳳統、真名を雛里である

彼らは草むらに座り込み、空を見上げゆったりとしていたのだ

「あ、本当に平和だな」

「そうですねえ」

言って、二人は微笑む

その頬を、風が吹き抜けていった

・・・いや、訂正しよう

“凄まじい風圧が、2人の間を吹き荒んでいった”

「雛りん、ヤバい
今の風で、ちよつと頬が切れたよ」

「あわわ・・・やっぱり現実から目を逸らしたってなんの解決にも
なりませんね」

何故？

そのように、風が吹き荒れているのか？

原因は、至って簡単だ

その、原因というのは・・・

「あゝ、もう！！

なんやねん！！

昨日から、一刀にベタバタバタバタ・・・何様や、こらあ！！！！？

「？」

「あら、一刀だって嫌がってないんだし別にいいじゃない」

「ウチが、嫌やねん！！」

「あつれえ？」

もしかして、嫉妬してるの？」

「ぐ・・・わ、悪いかあ！！？」

三年やぞ！？

三年ぶりに会ったいうんに、一刀ときたら鈍感やし女ときたらすぐにデレデレするし！！！！」

一刀達の視線の先

それはもう凄まじい速度で偃月刀と剣を振り回す、二人の武人によるものだったのだ

一人は紫色の髪を大きく揺らし、目にも止まらぬ速度で偃月刀を振るう女性

張遼、真名を霞だ

もう一人は、これまた同じくらいの速さで剣を振るう桃色の髪をした女性

孫策、真名を雪蓮である

2人は先ほどからずっとこの調子で、刃をぶつけ合っていたのである

言ってしまったえば、所謂“喧嘩”だ
その原因というのも、霞が言っていたとおりである

霞曰く“一刀にベタベタしすぎだ”と

しかし、雪蓮曰く“一刀は嫌がつていないし、別にいいじゃない”と
先ほどから、このような言い分の繰り返しである

因みに・・・一刀のすぐ傍

僅かにある砂場で、一人の女性が“棒倒し”をしていた
華雄である

彼女は霞たちの放つ風圧も、まるでそよ風の如く
黙々と、棒倒しに勤しんでいたのだ

そのくせ、たまに飛んでくる石などは躲すのだから
生粋の武人というのは、凄いものである

「なあ華雄、楽しい？」

「うむ・・・何故だろうな

久しぶりにやってみたら、ハマってしまった
へ、変だろうか？」

「いや、いいんじゃないかな

たまには、こういうのも」

言って、一刀はだらしなく頬を緩ませた

上目使い+赤くなつた頬

その何とも可愛い華雄の姿によってだ

そうとも知らずに彼女は、“そ、そうか”と嬉しそうに言つと再び

黙々と一人棒倒しを再開する

そんな光景を見つめ

彼は静かに目を閉じ呟くのだった

「あゝ、ほんとに・・・平和だ」

これは、賑やかな五人の
とある休日のお話・・・

真・恋姫十無双・白き旅人・
第八章 あわてないあわてない、一休み一休みイクゾオラアアア
アアアアアアア!!!

――――

建業の地より、数日歩いた先にある・・・小さな街

そこに、一刀達はいた

無くなってきた水と食料、その他旅に必要なモノを揃えるためである
それと同時に、今後のことを相談し・・・しばしの休憩を取ること
となったのだ

そんな中、明るい街中を一刀は歩いていく
その手に、一枚の紙と幾つかの荷物を持ちながら

「水と食料は、まあこんなもんでいいか」

「そうですね

“次の目的地”までもてばいいですし

他のモノも、問題はなさそうです」

隣を歩くのは雛里である

彼女はそう言うと、フツと笑みを浮かべた

「買い物は、これで終わりですね」

「そうだね

あとはこれを宿に置いて来て・・・その後は、どうしよっかな」

言って、一刀は少し考える

現在、霞と雪蓮は昨日の続き

つまりは、壮絶な喧嘩の真っ最中

いい加減に落ち着いてもらいたいものだが、あの中にツッコんでいく勇氣は一刀にはない

華雄は、一人鍛錬に勤しんでいるらしい

毎日欠かさず繰り返す様は、流石は武人といったところかともあれ、武闘派三人組はそれぞれに過ごしているのだ

「あ、あのっ！」

「ん・・・？」

ふと、かけられた声

それが自身の隣を歩く雛里のものだと気付くと、彼は考えるのを一時中断し微笑を浮かべる

「雛里ちゃん、どうかしたの？」

「えっと、その・・・」

頬を赤らめながら、モジモジとします雛里

その様子を不思議そうに眺める一刀だったが、やがて雛里は意を決したのか大きく口を開け言葉を紡いだ

「この後、よろしければ・・・一緒に、ご飯を食べに行きませんか！？」

雛里の言葉

一刀は一瞬キョトンとした後、ニツと笑う
それから彼女の頭をポンと撫でると、こう言ったのだ

「喜んで、一緒に一緒にさせてもらおうよ」

「・・・あ、ありがとございますー!!」

言って、嬉しそうに微笑む雛里

そんなこんなで、二人のこの後の予定は決まったのだった・・・

――――
――――

「あゝ、疲れたあ」

「ホンマやなあ」

ゼエゼエと息を切らし、草むらに寝転がる二人

霞と雪蓮

流れる汗を拭い、見あげた空は・・・眩しい程の蒼
そんな空に、二人は目を細めていた

「それにしても・・・相変わらず、速いわねえ」

「そつちこそ・・・腕は衰えとらんようやな、小霸王」

言つて、霞は微笑む

それに対し、“まあね”と雪蓮も微笑んだ

「にしても、話には聞いてたけどさ・・・」

「なんや？」

「霞つて・・・いえ、霞だけじゃないわね

魏の皆つてさ、本当に一刀のことが好きなのね」

雪蓮はそう言って笑う

それに・・・霞は、“当たり前や”と苦笑する

「三年間・・・一日だって、一刀のことを忘れたことはないで
それは、他の連中も同じや
皆、一刀のことが大好きなんや」

「そっか・・・」

霞の言葉

雪蓮は、“凄いわね”と微笑む

「雪蓮は・・・どう、思っどるん？」

「一刀のことを」

「一刀のこと、ね・・・」

フツと、笑みを浮かべたまま見上げた空

自分達の真上で眩しく輝く太陽を見つめたまま彼女は眩く

「好きよ

もしかしたらこれが、噂に聞く“一目惚れ”ってやつかしら?」

「知らんがな、ウチに聞かんといてや」

言いながら、霞はその場から立ち上がる
それから雪蓮を見つめ、不敵に笑ったのだ

「けど、そんならウチらは好敵手……一刀の言葉を借りるなら、
“ライバル”やな」

「あら、いいわねそれ
退屈も潰せて、一刀も手に入る……一石二鳥じゃない」

「残念やけど、退屈が潰れるだけやと思うけど？」

「やっぱり、欲張るのは良くないわよね
てことで、貴女の退屈を潰してあげるから……一刀は貰うわよ？」

「おせると思つか？」

「あら、私は本当にやるわよ？」

――間――

「上等っ！！！！」

叫び、駆けだす2人

太陽が真上ということは、お昼ご飯にはちょうどいい時間だろう
そのことに気づき、二人はただ一言叫び駆け出していたのだ

“一刀と二人きりで、ご飯を食べるのは自分だ”と
そのような意味を、心の中叫びながら・・・

――――

「一刀っ！！！！」

“ダンツ!!”と、勢いよく開かれた扉
その扉から、これまた勢いよく入っていくのは先ほどの2人
霞と雪蓮だ

しかし、そんな二人の勢いも部屋に入った直後に消え去ってしまう

「「あ、あれ・・・？」」

いないのだ

その部屋には、北郷一刀の姿がなかったのだ

「いつたい、何処に・・・」

「ん・・・？」

雪蓮に霞じゃないか

二人して、どうしたのだ？」

「華雄・・・」

そんな二人の背後から、ふとかけられた声
華雄である

彼女は経った今鍛錬が終わったのか、手に持った布で汗を拭いなが

ら二人の傍まで歩み寄った

「あんな、一刀がおらんねん」

「一刀が？」

ああ、そういえば先ほど食料などを買いに行った後・・・雛里と二人で、食事へ行ったみたいだな」

「雛里と・・・二人で？」

「ああ、そうだ

私は鍛錬の途中だったから、遠慮させてもらったのだが・・・」

言い掛けて、華雄はふと自身の体にかかった不思議な浮遊感に首を傾げる

それと同時に、凄まじい速度で雪蓮と霞が駆け出していったのだ

“華雄の体を、抱え上げたまま”、だ

「・・・つて、ちょおおおおおおお！！！！？？？？
なんだ、この急展開！！！！？？？」

「アカン!!!!油断しとった!!!!!!」

「まったくね!!!」

普段“あわわ、BL美味しいです(^ ^)”とか言うような子だったから、私もすっかり油断してたわ!!!」

“まさか、先を越されるなんて”と、二人は苦虫を噛み潰したような表情で呟く

仲良く華雄を抱えたまま、全速力で駆けながら・・・

「いや、だからちよつと待て!?

普通に待て!!!?

私、関係ないか!!!?」

「関係あるわよ?

貴女だって、一刀のこと好きでしょ?」

「な、なああああ!!!?」

一刀のことが、すすすすすすスキiiiiiiii!!!???

ば、おまつ、そそそんな・・・」

「あゝ、はいはい

そんなベタな反応はええから、早ういくで!!!」

「というか、だ!!!」

まずは私を下ろせつ!!!」

「いやよ、面倒くさい」

「そや、その時間すら勿体ない!!」

「こっちの方が面白いじゃない」

「こうしてる間にも、あのトンガリ腐女子が一刀に何かするかもし
れへんやろつが」

「おい、コラ!!」

「一人、なんか納得できないこと言ってるぞ!!!!??」

「気にしない気にしない」

「お前だ、コラ!!」

「ちよっとは気にしろよおおおおおお!!!!?」

華雄の叫びも空しく

哀れ華雄

彼女はそのまま、勢いよく運ばれていくのだった・・・

—————

「華雄さん……？」

ふいに、彼女は呟く

そのまま見つめた窓の向こう……相変わらずの青空に、可愛らしく首を傾げた

「どうしたの、雛りん？」

「い、いえ……にやんだか、華雄さんの叫び声が聞こえた気がする」

「聞き間違いじゃないかな？（また噛んだな）」

「しょ、しょうでしゅよね」

「雛りん、ごめん」

スルーしようと思ってたけど、流石に“二連噛み”は無理だよ」

「あわわ!？」

「ごめんくださいっ!?!」

「はい、いらっしやい〜ってコラ

今度は凄まじい言い間違いだよ!?!」

雜里の“噛みスキル”は、今日も絶好調だった

まあ、それはともかきゅ・・・ゴホン、ともかくだ
今二人は、街にある小さな食堂のような場所にいた
小さな街だ

小さな食堂といっても、この時間帯だ
店内は、人で賑わっていた

「良い街ですね」

「うん、そうだね」

このような小さな街の中

乱世の頃では、考えられなかった光景

それが今、こうして少しずつ“当たり前”になりつつある

それが・・・二人には、嬉しい事だった

「さ、早く食べよう」

温かいうちに、美味しく頂かないと」

「そうでしゅね」

「雛りん、血が

噛み過ぎで、ついに口から血が出てるから雛りん」

「だ、大丈夫でしゅ

これは、その・・・“鉄の味がするケチャップ”でしゅ！」

「血だよ、それはもう！

純度100%、血液だよ！！

間違いなく鉄分含んでるから！！！！」

間違いなく血である

まあそこまで噛んで、出血しない方がおかしいのだが
ともあれ、ひとまずは舌を休めるのが先決である

「とにかく、水で口を注いで・・・」

「なら、私は一刀の口に水を口づけで飲ませてあげるから
そしたら一刀はそれを、私に返してね」

「いや、それじゃ意味がないってうおわっ！！！！？？」

ガタンと席を立ち、一刀が見つめた先
一刀の隣の席

何故かそこに、汗だくの雪蓮がいたのだ

「それじゃ早速、水を飲むわね」

「ちょ、待て！

誰もやるとは言っていない！！」

「わかつとる、ウチはわかつとるで一刀

一刀は、口じゃ満足でけへんもんな」

「わかつてねーよ、何一つわかつてねーよ

言いながら、服を脱ごうとしてる時点で何一つわかつてねーよ」

そうツッコまれたのは、同じくいつの間にかいた霞である
因みに・・・

「お、オウフ・・・」

何故か、お尻をおさえながら華雄が悶えていた

「か、華雄!？
いつたいどうしたんだ!?!？」

「一刀・・・あ、ありのまま起こったことを話すぞ？
私は鍛錬から帰ってきたはずだった
けどいつの間にか、こんな所にいたんだ
何を言っているかわからないかもしれんが、私にもわからない
超スピードなんてもんじゃない
もっと恐ろしいモノの片りんを以下略」

因みに彼女が尻をおさえているのは、到着時に雪蓮と霞が同時に手を離しそのまま地面に尻を強打したためだ
ドンマイ、華雄

「大丈夫か？
ホラ、手を貸すから・・・」

「すまん、一刀」

差し出された手を掴み、立ち上がる華雄
彼女は軽く自身の尻をさすり、“ありがとう”と苦笑した
そんな彼女の姿に笑いを零しながら、彼が振り返った先・・・

「アンタがそのサラシを外すなら、私は・・・私はこの服を脱ぐことを、止めないいいいいいいいいいい!!!!!!!!!!」

「いいでえ、こい、こいやあ・・・ウチは、ここに居るじゅうじゅうじゅう!!!!!!!!!!」

「あ、あわわ!!!!!!!!!!」

お二人とも、やめてくだしや~~~~~い!!!!!!!!!!」

地獄でした。ブスリ

「華雄・・・止めるの、手伝ってくれる?」

「ああ・・・そうだな」

数秒後

店中に、“胡椒”やら“唐辛子”やら“ウコン”やら“ジャスミン”の匂いがする煙が充満したそうなの・・・

――――

「ゴホツ・・・」

軽く咳込み、見あげた空

月は、美しく光り輝いていた

その美しい夜空を眺めたまま、彼は微かに微笑む

「満月・・・か」

眩き、思い出す

いつか見た・・・ “あの日の光景”

あの日、“全てが終わった夜”のこと

くさよなら・・・愛していたよ、華琳く

「あらん？」

もう来てたのねん、「ご主人様」

ふと、聴こえてきた声

とても野太く、“もうすっかりと聞き慣れてしまった声”に

彼は・・・口元の“赤”を拭い微笑んだ

「まあね・・・今日は、満月だったから」

「そう・・・」

「そう・・・一刻も早く私に会いたいからなんて、嬉しいこと言っ

てくれるじゃない」

「うん、言ってないよねそんなこと」

「大丈夫、安心してちょうだい」

私はもう、いつでも準備バッチしだからん」

「あれ、おかしいな」

“ひのきのぼう”の火力が勝手にMaxになっていくぞ?」

“冗談よん・・・”と、声の主は驚きながら言う

それに対し、一刀はクツと笑った後に・・・再び、軽く咳込んだ

「はぁ・・・」

「ご主人様・・・」

「ああ、気にしないでくれ・・・大丈夫、まだ“たった一つ”だから」

「そう、けれど・・・無理はしないでちょうだい」

「わかってるよ」

“任せてくれ”と、彼は笑う

その言葉に、声の主・・・筋骨隆々な体つきに、ピンクのビキニパ
ンツ一丁の“変態”も笑った

「あ、あらん？」

なんか今、間違ったナレーションが流れていなかったかしらん？」

「気のせいだ、変態・・・それよりも、だ

ここに呼んだってことは、なにか話があったんじゃないのか？」

“ そうだったわん ” と、変態は笑う

それから、おもむろに穿いているパンツの中に手をつっこみ・・・

「 えーっと、何処にやったかしらん 」

モゾモゾと、漁り始めたのだ

(^ ^) ?

「おい、おいおいおい・・・おいおいおいおい、ちょっと、待て、割とマジで

落ち着け、止まれ、いつかい探すのを止める

お前もしかして、いやもしかしなくても其処から取り出したもんを俺に渡す気じゃないだ・・・」

「あつたわん」

「おまつ、見えた！

今なんか取り出した瞬間、見たくもなかった“性剣”がちよつと見えた！！」

「そうよん、これをご主人様に渡したかったのよん」

「そして間髪入れずに、近づけるんじゃない！！？」

何これ！？

滅茶苦茶良い匂いなのが、逆に恐いんだけど！！！！？？」

ザツと、慌てて離れる一刀

そんな一刀の姿に、目の前の変態・・・“貂蝉”は、面白そうに笑う

「心配ないわよん

ご主人様の目の前にいたドラえもんが、四次元ポケットから道具を出したものだと思っただけだよ」

「思えるはずがない」

当たり前である

中の人も、まったくベクトルがちが・・・ゲフンゲフン

ともあれ、貂蝉曰く“四次元ポケット”から取り出されたモノを見つめ

一刀は、表情を歪めた

「これ・・・」

「私と卑弥呼・・・そして、“彼”と一緒に作ったモノよん」

言っつて、渡されたモノを・・・彼は、凄く嫌そうな顔で受け取り
そして懐へと仕舞った

「ああ、そっか

“そういうことか”」

「あらん、何かわかったのかしらん？」

「まあ、ね」

“なんとなく、だけど”と、一刀

彼はそれから貂蝉から距離をとり、ニツと笑みを浮かべ手を振った

「ありがとな、貂蟬

卑弥呼と・・・“アイツ”にも、お礼を言っといてくれよ」

「お礼って・・・そんなの、気にしなくてもいいのよん
むしろ、お礼を言いたいのはこっちなのに」

呟く、貂蟬

しかしその呟きも空しく、彼はその場から離れていく

もう、声は届かないだろう

「本当に、謝りたいくらいなのよん・・・」

それでも、貂蟬は呟く

「貴方に・・・このような、辛い道のりを歩ませてしまっことを」

例え、彼に聴こえなくとも

例え、彼に届かなくとも

「もう一度……同じことを、繰り返させてしまつてことを」

貂蟬は、苦しそつに
本当につらそつに……その言葉を、吐き出したのだった

――――

翌日

その日もまた、晴天の空の下
旅支度をすっかりと済ませた五人は、街の出口に集まっていた

「さつて、と……みんな、準備はいいかい？」

一刀の言葉

四人は、それぞれ笑みを浮かべ頷いた

それを満足げに見つめると、一刀は“雛里ちゃん”と声をかける

「それでは私たちはこれから……予定通り、目的地へと出発します」

「食料などは私が持とう

なに、丁度いい鍛錬になる」

「そんじゃ、ウチと雪蓮が他のこまいのもったるわ」

「そうね

考えるのは、雛里と一刀に任せるわ」

ウィンクし、見つめる先

一刀は苦笑し、“そんじゃあ”と言葉を紡ぐ

「それじゃ行くつか、皆……蜀の都、“成都”へと」

蜀の都、
“成都”

そこが、次なる旅の目的地

白き旅人とそのお供は、成都への道のりを

ゆっくりと、歩き出したのだ・・・

――十――

そして、場所は変わり・・・

「ええい、もっと早く走らんのかっ！」

ここは、何処かの山の中

その中を、二人の女性が馬で駆けていた

「焦るな、姉者！」

そのままでは、馬がバテテしまっぞ！！？」

「しかし・・・！」

言いかげ、彼女は言葉を止める

それから見つめた先

空は、憎くなるほどの青

「くそ・・・」

彼女は、“焦っていた”

それは何故か？

その理由を、隣を走る女性は勿論知っている
いや、彼女もまた焦っているのだ

だからこそ、彼女達は急いでいた

「早く、行かないと・・・」

呟き、見つめた先

その遙か先に、二人の目的地はある

向うのは“成都”

「必ず・・・必ずお前を見つけてやる、北郷っ！！！！」

蜀の都
成都

其の地を中心に、今まさに・・・“何か”が、始まるつとじていた

・
・
・
続
く

第八章 あわてないあわてない、一休み一休みイクソオラアアアアアアアアア

あとがき

こんばんわ〜

皆みてねえよって時間に投稿ですw

いやあ、焦りマシた

最近是国家試験だけじゃなく

【モバの三国志バスターにハマってた】

【絵の練習】

【コールオブデューティー面白いw】

等の理由で、遅れましたw

さて、いかがだったでしょうか？

今回は【日常、謎】というテーマ

雪蓮も加わり、ますます賑やかになった一刀達

しかしそんな中、ひっそりと隠された“物語”がありました

白き旅人は、【基本的にはコミカル】です

しかし、なんとというか

作者の癖でしょうか？

物語の奥に、“本当の物語”を求めてしまいましたw

伏線だらけですね
本当にすいません

さて、次回はいよいよ新章【成都編】に突入しますw

舞台は、蜀の都【成都】

向う五人に、待ち受ける幾つもの障害!?

「今度はオオカミかよっ!?!?
ほんとに動物運ねえなあ、もうっ!?!?!」

「安心して一刀!
必殺、“雛里バリアー”!」

「あ、あわわ!?!?!?」

「雛り—————ん!?!?!?」

「そんでこっちは、“ついでないだの街で雛里がこっそり買ったB本バリアー”や!?!?!」

「わ、私の聖書—————!?!?!」

「ば、雛里!?!」

さらに・・・明かされる、彼の嘘？

「ごめん、皆

ごめん・・・」

「ごめん・・・華琳」

次回

成都編

白き旅人、第九章

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5977v/>

真・恋姫†無双-白き旅人-

2011年10月22日03時43分発行